

# 川柳塔

昭和四十二年一月九日 第三種郵便物認可  
平成二十三年七月一日発行（毎月一日発行）  
創刊大正十三年 通巻一〇一〇号

日川協加盟



No. 1010

特集 麻生路郎この一句

七月号

## 路郎賞・川柳塔賞の応募は

### 八月号の刷り込み用紙で

① 川柳塔欄・水煙抄欄に6か月以上、出句した人に応募資格を認める。

② 平成22年9月号から平成23年8月号までの入選句（自分の句を出句する）

③ 8月号刷り込み用紙に5句を楷書で書き8月10日必着のこと。

昨年九月から今年八月の間に  
誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を選択して応募して下さい。

ただし「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、間違いないようお願いします。

## 選者交代のお知らせ

九月号（七月投句締め切り分）から来年八月号までの選者を次の通り交代します。

水煙抄 川上大輪

檸檬抄 福士慕情  
池森子）共選

川柳塔社

## 「檸檬抄」課題

福士慕情・池森子 共選

| 発表  | 月   | 課題     | 締め切り日  |
|-----|-----|--------|--------|
| 23年 | 9月  | 変化     | 7月15日  |
|     | 10月 | 錯覚     | 8月15日  |
|     | 11月 | 支える    | 9月15日  |
|     | 12月 | ピリオド   | 10月15日 |
| 24年 | 1月  | ぜいたく   | 11月15日 |
|     | 2月  | ゆがむ    | 12月15日 |
|     | 3月  | 目指す    | 1月15日  |
|     | 4月  | 人柄     | 2月15日  |
|     | 5月  | ざわめく   | 3月15日  |
|     | 6月  | 思いっきり  | 4月15日  |
|     | 7月  | 調理器具   | 5月15日  |
|     | 8月  | ダイナミック | 6月15日  |

## 第35回全日本川柳

### 2011年仙台大会

小島 蘭 幸

復興と祈り、全日本川柳仙台大会は、3月11日の東日本大震災で尊い命を一瞬のうちに奪われた多くの犠牲者への哀悼、黙祷から始まりました。

「…言魂の力、川柳の力は多くの人に勇氣と元氣を与えると信じています…」雫石隆子仙台大会実行委員長の力強い言葉に、私は溢れる涙を堪えることが出来ませんでした。

出席者は六〇〇名を越え、避難所から出席された方もおられました。持ち場、持ち場で一所懸命対応されるスタッフの皆様の情熱も素晴らしいものでした。私は大会に出席するたびに橘高薫風先生のお言葉「蘭幸さん、記念の会にはなるべく出席するように…」を思い出しています。川柳人との出会い、交

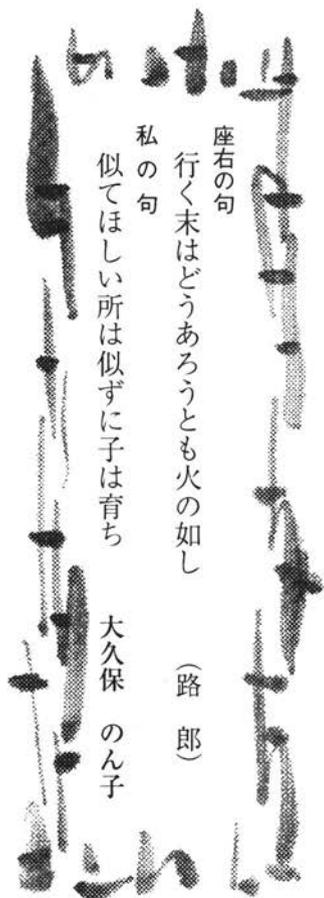
流、佳句を直接聞くことの大切さが、この頃やっと解ったような気がします。

「伊達政宗と文学」と題して伊達宗弘仙台大学教授が講演されました。

ジュニア部門から始まった披露。今回もたくさん聞くことが出来ました。特に震災、復興を詠んだ佳句が多かったのを喜びました。川柳塔社からは板尾岳人氏と高瀬霜石氏が立派に選者を務められました。

大会終了後、静岡の加藤鯉氏に誘われて打ち上げに参加。出席者24名、乾杯、自己紹介から始まり、美味しいお酒と料理、若い川柳作家の笑顔を見ていただけで、大いなるパワーを頂いた気になりました。「第35回全日本川柳大会バンザーイ!!」「カンパーイ!!」アツという間の四時間でした。

翌日、仁王丸で日本三景松島湾を一周、美しい海、美しい景色を見ながら、復興と祈り、仙台大会の盛會を喜び、つくづく出席して良かったと思えました。来年の全日本川柳大会は、6月10日、徳島で開催されます。



座右の句

行く末はどうあろうとも火の如し

(路郎)

私の句

似てほしい所は似ずに子は育ち

大久保 のん子

## 川柳塔 七月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「大宇陀」

|                         |          |      |
|-------------------------|----------|------|
| ■巻頭言 第35回全日本川柳2011年仙台大会 | 小島 蘭 幸   | (1)  |
| 川柳再出発                   | 牛尾 緑 良   | (2)  |
| 川柳塔(同人吟)                | 小島 蘭 幸 選 | (4)  |
| 川柳塔の川柳讃歌 (79)           | 木津 川 計   | (47) |
| 自選集                     |          | (48) |
| 温故知新                    |          | (51) |
| 水煙抄                     | 西出 楓 楽 選 | (52) |
| 麻生路郎句抄                  |          | (75) |
| 追悼 岡本久峰さん               | 米田 恭 昌   | (76) |
| ■新刊紹介「川柳の理論と実践」新家完司著    | 栗原 道 夫   | (77) |
| ■路郎忌特集 麻生路郎この一句         |          | (78) |
| ■エッセー「マーケティングの眼で川柳を見る」  | 吉村 久 仁 雄 | (89) |
| 愛染帖                     | 新家完 司 選  | (90) |

## 川柳再出発

牛尾 緑 良

平成二十年一月で川柳塔わかやまの主幹を川上大輪氏にお願いした際、わかやま誌も川柳塔誌も一掃してゼロからの川柳スタートを決意しました。

原点は昭和三十年初期にあります。北九州八幡市(当時)に南本願寺を名乗ったお寺がありました。京都本願寺の教義に反旗をかかげた若いお坊さんの話は中学生だった私には刺激的でしたが共感も出来ませんでした。例えば、写真のネガを見ると美男も美女もなく、これが人間本来の姿なのだったとお説教が心に残り、しばらく早朝の勤行に参加しました。

編集など吟社の運営から手を引いた当初は脱力感もありましたが、体調の不良もあってゆっくり休養にあてさせていただきました。川柳以外の書籍を捲っているうちに不思議と川柳に帰ってきて、過去を消し去った川柳はずっと身軽になっていました。街无いものが無い身は自由で無限の可能性を感じたものです。

般若心経の入門書や瀬戸内寂聴さんの著

檸檬抄「不揃い」……………三宅保州・山本希久子共選……………(94)

■エッセー『人物しまね文学館』―尼 緑之助―……………竹治ちかし……………(97)

誹風柳多留―一篇研究 71…………………………(98)

一路集……………長浜美籠選……………(100)

「敷く」……………武本 碧選……………(100)

「泡」……………樋口輝夫選……………(101)

「ライン」……………鈴木公弘……………(102)

初歩教室「まずい」……………喜田准一……………(104)

秀句鑑賞「同人吟」……………三浦強一……………(106)

「水煙抄」……………新家完司……………(107)

せんりゅう飛行船(7)……………高瀬霜石……………(108)

津軽発おもしろ景色④…………………………(109)

全日本川柳仙台大会結果…………………………(110)

六月本社句会…………………………(114)

各地柳壇(佳句地十選／大石あすなろ)…………………………(118)

柳界展望…………………………(128)

七月各地句会案内…………………………(130)

■編集後記(ひとこと／古久保和子)……………朱夏・光久……………(164)

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

私の句

万葉が世界遺産で蘇る

(路 郎)

黒岩 靖博

書を読むうち、自分の川柳の方向性が少し見えて来て川柳塔誌に投句を始めたのはやつと昨年の夏からで、初めて自分の足で立つたような再スタートでした。

川柳への入門は野村太茂津先生との出会いでしたが、句会は多くの先生方に支えられてきました。大阪からは川村好郎・神谷凡九郎・西田柳宏子・阿萬萬のなどの各氏、桜井から岩本雀踊子氏と個人的な指導は初心者の方に疊惑的でした。一方和歌山市内からは岩橋芳郎氏を忘れることが出来ません。参加した句会では番傘句会の中村重治氏や淵田寛一氏にお世話になりました。どの句会でも温かく迎えていただいた寛容さに今も感謝しています。

句会にはそれぞれ個性があります。指導者の個性がそのまま会の個性にもなりますが私には個性が無く、反面、会員の個性が自由に發揮できた場ではなかったかと省みています。太茂津先生はD51といわれた牽引車でしたが、それぞれが個性を出せる場もまた必要だと確信しています。

いま透析生活36年目、ペースメーカー設置2年目を迎えました。身体障害1級を二つもいただきましたが、もうしばらく川柳の仲間と居させて下さい。

# 川柳塔

小島蘭幸選

鳥取市 福永 ひかり

哀しみを誘う瓦礫の中の花

反古になる約束さくら咲いたのに

被災地に説得力のない背広

電力へ目につく自動販売機

安全を買うとコストが高くなる

被災地が晴れの予報にホッとす

和歌山市 柏原 夕胡

どんな色にも染まらぬ白にならなう

面従腹背いつもニコニコしています

たつぷりと箍を緩めて生き延びる

冤罪が晴れても戻れない暮らし

喋るだけ喋って風の無責任

無愛想な諭吉みんなに愛される

尼崎市 春城 年代

顔の皺より見られたくない丸い背な

立ち話のおんな躑躅が炎え盛る

いっそ葉桜身の上ばなし果てもない

この幅で寝ていたんだなセミダブル  
ナツメロを転がしているフライパン  
残り時間が少し気になる肺活量

和歌山市 木本 朱夏

見下ろしていると淋しい町の屋根

雨が降るまではわたしの空だった

壁の向こうも息を潜めているようだ

いま書いておかねば風にさらわれる

薔薇ひらく有象無象はなぎ倒せ

いもうとの庭にも春が来るように

橿原市 居谷 真理子

人の世に縛られたくて腕時計

ガード下飲んであかさぬ氏素性

昼の月シャンプーの香とすれちがう

こんな日は野のタンポポと友達に

満腹になったら落ちる綱渡り

神様がこの世の花を摘みにくる

堺市 柿花和夫

栄転の内示を受けてから無口  
予定にはなかった老犬の介護

乾涸びた蚯蚓を跨ぐアリの群れ

東の間のドラマを閉じる鯨幕

雨の日は地下街を行く万歩計

被災地と絆強めるガムテープ

さいたま市 星野育子

描いた絵にひと色を足す春の彩

川の流れにもあつた喜怒哀楽

知らぬ人隣で寝てる新幹線

古里の風景見える音を聴く

スーパールのレジに人気の列がある

段差を無くして外ではよく転ぶ

弘前市 高瀬霜石

死神も女神もチャイム鳴らさない

花束もいいが笑くぼはもつといい

かみさんは温泉ぼくは家の風呂

本日も山脈二本あるズボン

先祖代々副耳を持ち貧にいる

ぼくひとり場違いであるレストラン

松江市 石橋芳山

疲れたと思う歪な楕円形

決断のすぐに切れなくなるナイフ

現実を見せられ土砂降りに気付く

責任を問われる僕は風なのに  
マンネリをこつこつ築きあげている  
約束を破って指先が濡れる

堺市 榎原道夫

湖静かチチチと鳴く鳥静か

かたつむり百匹居れば百の口

キューピーとなら坂道を転げよう

太古から鶏おのが影突つく

要するにたましいが最も水欲す

同じこととするの映画が終わつたら

八王子市 播本充子

プライドの色で咲いてる茄子の花

先人の歩幅で本殿へ進む

汲み置きをしよう余震がまだ続く

宿題もお風呂も停電の前に

花道へ磨き残しのないように

家族葬でした半年前でした

京都市 高島啓子

ツイッター仲間の増えるかすみ草

曇天の朝顔あいまいに萎む

せせらぎに聞き耳たてる水芭蕉

本降りになってあじさい饒舌に

鬼百合だなんてわたしの誕生花

ひまわりだったことのあるおばあさん

鳥取市 両川 無限

のらりくらりと春の陽気に紛れこむ  
ストレスを束ねた輪ゴムぶち切れる  
大海へ吠える大きな夢抱いて  
洗濯機家族まるめて放り込む  
カーナビの真ん中にある僕の城  
どの子にも狙える位置に的をおく

大阪市 吉村 一風

ふる里は元気なうちに帰れとさ  
幸せと限らぬ窓の明るい灯  
つばめはきつと幸せな家分るんだ  
雲ひとつない青空へ妻を呼ぶ  
なんで爺ちゃん生きてるのんと孫が聞く  
忘れ上手で雲をじっくり眺めてる

三田市 堀 正和

割烹着つけて男はママになる  
スイーツでコニヤックを飲むキザな奴  
ペラペラと儲け話はするでない  
古い映画だな主役は短足だ  
テレビ見て今日も怒っている男  
日帰りの温泉ほどの幸せ度

吹田市 山本 希久子

散る命また咲く花よあじさい忌  
頑張り過ぎて傷は大きくなるばかり  
間違っても生肉などは食べません

昭和の味平成の味三世代

いざごごは多分私の蒔いた種  
旅の期待へふくらみ過ぎた紙風船

枚方市 伊達 郁夫

よそ見して自分の影に蹴躓く  
手ぶらだが笑顔を下げてやって来る  
結局は漬物石に選ばれる  
雑巾は昔の事は喋らない  
空論がバケツの中をかき混ぜる  
懐の深い男だ海を抱く

藤井寺市 太田 扶美代

聞きましたか私も聞いた復興の音  
エプロンを付けたまんまでラブソング  
若葉風ひとりぼっちも偶になら  
目覚ましが優しすぎたか起きられぬ  
鉛筆とノート穏やかなる老後  
やさしさを使い果たして兄が逝く

松山市 古手川 光

杉松植えて花粉に攻められる  
原発推進なら原発の傍に住め  
しつかりせよ龍馬いうてる声がある  
見倣おう向日葵どれもいい笑顔  
喉は水心潤すのは洪茶  
蚊よ蚋よ骨皮筋の血を吸うか

納得の出来ないままに春終る

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

豆ごはん今日をだいに食べてます

やはり女で愉しい彩の組み合わせ

追伸のあたりで心弾ませる

ひらがなのかたちで蝶が舞っていた

こわいほどきれいな夕陽人を恋う

東大阪市 北村 賢子

感謝するところはメールより電話

ありがたい今日もプランがある元氣

顔映す鏡磨かぬほうが良い

あの日から亡母の指輪をはめている

思いやりへここにポツと花が咲く

この星が今温いところに包まれる

愛知県 早川 遯行

鳥たちが羽根を休める樹になろう

可愛がり過ぎて大事な木を枯らす

幸せにしますと言ったことがある

気付かれぬように包丁研いでます

大学は一流だった畑仕事

食べないと次の料理が出てこない

堺市 村上 玄也

自分色薄めて生きてゆく余生

決心をして行ったのに切り出せず

何遍も聞かされ色褪せる美談

みんないい顔してるアスリート  
衰えた肉体さらけ出す風呂場  
老いてなお男の性か美女が好き

羽曳野市 吉川 寿美

被災者の健気さほろりするテレビ

行きくれてまだわたくしの絵に逢えず

ジャンケンポンいつも後出し鬼でいる

無欲にはなれぬ椿の落下音

作り笑いで紆余曲折を切りぬける

糸切歯キリリどうにも許せない

鳥取市 夏目 一粹

良心が落書きさせぬ白い壁

ステッキを忘れた人が気にかかる

小魚は巨大な群れの中にいる

寄り添って歩いたことのない夫婦

いのちほど時間気にするものはない

聞き返す亡父母を笑っていた不徳

米子市 吉田 陽子

脳死判定聞えませんか叫び声

脳回路昔話をよく通す

モニタリングすつかり耳が馴れてきた

掌に休ませている難波船

古木に芽一つ弾みがついてきた

住み馴れて大きな顔で歩く路地

吹田市 木下敏子

旬のものを食べて感謝の箸を置く  
白い歯がまだ威張ってる健診日  
故郷に待つ人もなく風薫る

無と言う字いっぱい書いて無になれず  
穏やかな老いのリズムでベダル踏む  
七坂を越えた笑顔の土踏まず

尼崎市 加川靖鬼

変換キー猫が跨いで換えていた  
太陽と湯舟に浸る露天風呂  
盆栽展苦節を耐えた美の極致  
影法師ときどき独り歩きたい  
自然から学ぶ地球の知恵袋  
銀の靴残して闇にかたつむり

出雲市 多久和敬子

七十路少し休んでから登る  
七十年歩いた足が纏れ出す  
いつまでも亡母は心の支えです  
ゆっくりと歩く野の花友として  
カーテンを開けて大きく息をする  
白い画布私の色が見つからぬ

大阪市 寺井弘子

春帽子ふわりと着地する未来  
震災に生きる姿勢を立て直す  
一つ二つ思い出せない事の増え

天国へ飛立つ翼まだ生えぬ  
震度十余震止まらぬ夫婦仲  
懐は苦しいけれど義援金

橿原市 安土理恵

初摘みのお茶が毎年届く縁  
アスパラガスのびる迷いのない緑  
番茶たっぷり注いでひとりに馴れていく  
手土産の効果計算したとおり  
割り算の余りあなたの皿に置く  
そこそこのぜいたく回らないお寿司

宇部市 平田実男

楢山へやがて行く道辿る道  
僕故の皺と白髪が増えた妻  
見学会今日は葬儀屋明日ホーム  
だんだんと酸素が薄くなる実家  
クラス会タイムカプセルかも知れぬ  
風評へとっても弱い日本人

大山市 関本かつ子

どしゃぶりの雨に洗車も任せてる  
見て見ると背伸びして来るチューリップ  
夫婦仲まで書いてないプロフィール  
被災地を走るカメラに色がない  
お隣の犬も寝ている休刊日  
隣きをさせてあげたい仁王様

美作市 福原悦子

決断の朝を踏み出す靴がある  
花に埋れ満ち足りている尊厳死  
心根の明るいあなたと幾年も  
ガミガミとうるせい人が味方です  
生涯も雑魚で私は生きている

美作市 大石 あすなる

山彦が帰って来たよ春の森  
時々軌道を逸れる軽い靴  
タイムスリップ輝いた日が笑つてる  
姿見が夫婦百景見つづける  
すんなりと聞き流すには重い風

美作市 山本玉恵

ローカル線お国なまりが生きている  
この道が好きで放せぬペンと辞書  
人生も馬耳東風の老いふたり  
山積みの苦勞の中でケセラセラ  
大正の自負で歩幅を守り抜く

竹原市 石原淑子

天と地の大変動に抗わず  
一億の心被災地はなれない  
地産地消ジャガ芋レシビ開拓中  
順風も逆風も佳し添うて生き  
ほーほーほたる白い光の鎮魂歌

竹原市 岩本笑子

ツクシツクシ春のほろ苦さ  
雨の日晴れの日畑は待っていてくれる  
人間の前も後も森羅万象  
バス乗って医者のはしごに出かけよう  
てのひらの薬毎日言い聞かす

竹原市 時広一路

平均を越えた寿命の使い道  
病室を和やかにして鶴千羽  
自由とは何ぞや肩書の無い名刺  
いつもお独りですねと鏡から見られ  
三食は好物ばかり独り住む

府中市 馬場利子

手の中で今日のドラマを弾ませる  
自分史へ他人の席も入れて置く  
風呂の栓抜いてストレス押し流す  
幸せを少し下さい夏帽子  
釣り糸に命が絡む海の闇

府中市 岩本雅代

ひとすじの光に涙こみあがる  
小さな庭百花繚乱テイータイム  
初夏の風新茶の香り鶴の首  
つばめたちは子育て奮闘期  
留守中は犬の散歩かカラオケか

府中市 藤岡 ヒデコ

朗読をラジオで聞くと味がある  
ばあちゃんの不調で伸びる庭の草  
今日よりは若くなれないのも定め  
あの日からラジオが流す応援歌  
嫁の手も子の手孫の手全部借る

美祿市 安平次 弘道

決断をせまれば迷いさめていた  
喜怒哀楽やさしい風が吹いていた  
妙案はないが苦言は持っている  
指文字にしては刺激が強すぎる  
真つ白いレースにいつもだまされる

東かがわ市 原 賢

残された男一人の米を研ぐ  
父の背を越すこともなく白髪増え  
杖ついて思案している歩道橋  
欲得の闇で人間道はずす  
災害の不安に負けず鯉のほり

東かがわ市 川崎 ひかり

残骸の中から天へ木の芽吹き  
眼裏に残る故郷の草千里  
一回忌母の軽さが背に残る  
亡母さんに唯一似てきた掃除好き  
ダムが出来二級河川も干からびる

東かがわ市 清川 玲子

残る菌のいとしさゆるり磨いてる  
おんなじ顔と三食たべて居る安堵  
ありがとうの花束二つ子が二人  
京の旅納骨堂の父母に会う  
百歳を目ざす恩師に励まされ

東かがわ市 伊勢 八重子

朝一番命の水を呑んでから  
カーネーション母に捧げる感謝状  
助手席は今でも亡妻の指定席  
野仏に花一輪のおすそわけ  
母心始めて知った下宿の灯

松山市 高橋 宏臣

即答は避けてしばらく雲を見る  
胸開いている一步も譲れない  
追伸の棒一本の生乾き  
信号の黄になる前に出る元氣  
ブランコの男の貌の出来上がり

松山市 宮尾 みのり

人前に出ると明るく振舞える  
よよと泣く膝が欲しいと思う日も  
スーパリーの広さ病後の身に堪え  
鍵の束役に立たないのも混じり  
マークシートへ人間性は問いません

大洲市 中居善信

唐津市 坂本蜂朗

木の中を抜けて来たのか空気が澄む  
内緒だが石に何度も躓いた

今朝の仕合わせが瓦礫に埋れる  
原発の近く日日これ肝試し  
棺桶を前に男が煮え切らぬ

肩透かし何度も食って不甲斐ない  
背開きにされた不覚を悔いている

鉛色に煮詰めた愛が重過ぎる  
さあ掴めと持つて来られて妻にした

雑学の強い男よ面白い

西予市 黒田茂代

唐津市 井上勝視

色も形も臭いも怪物は見せぬ

花の下西行ほどの欲はない

嵐ぎの海悪魔の面持つなんて

手のひらに明日をのせて四苦八苦

震災の町も桜は拒まない

終章に溜った灰汁が便秘する

抱きしめるだけで百万語の会話

徒党組む連中みんな淋しがり

白黒を決めぬまあるい座に和む

曆通り律儀に老いることはない

高知市 小川てるみ

唐津市 山口高明

節電へ戦後思えば屁の河童

閔兵の総理へ挙手と捧げ銃

筍のまつ正直が憎らしい

お前まで謀反はすまい影法師

夢売りの夢が掴めぬもどかしさ

劇薬のニトロが僕の常備薬

形から入る作法が理にかなう

早よ嫁やらな後がいるぞと急ぐ夫

断捨離とはゆかぬ未練の根がはえる

注射器をもった天使に子は怯え

高知県 小澤幸泉

唐津市 樋口輝夫

切り札を持たぬ俸せまだ遠い

八十の恋です低温やけどです

母の肩だいても昔戻らない

拍手まで賛成なんかしていない

チャップリンのように生きたい今の世に

饒舌が急に無口になる不気味

未来形夢と不安が語り出す

懺悔するきっかけ母の一筆

転生の祈り空しく朽ち果てる

病む友へまた置いてきた嘘ひとつ

熊本県 高野宵草

穩便に治める僕の泣き寝入り  
足の爪奇麗に揃う初夏が来た  
大好きな二人の医師に生かされて  
一坪の庭も隣と社交の場  
気がつけば老化の道をまっしぐら

熊本県 岩切康子

琴の音でお点前いたたく和みの輪  
待つ時間お見舞いに行く点検日  
マッサージ信じた痛み酷くなり  
捻子一ヶ失い眼鏡役立たず  
考えて医食同源幸を追う

札幌市 三浦強一

日本の領土へなんで柳腰  
継続に力が付いて来てくれぬ  
ほつほつと妻と終活やっている  
路地裏に少年の日がそこかしこ  
馬車馬の手綱しっかり妻が持ち

札幌市 小沢淳

楚々として疑い知らぬ素焼鉢  
浪々と辿り着いたは喜寿の坂  
虚と実の海で泳いでまだ飽きず  
冗談を少し遅れて父笑う  
郵便受け開けてときめき貰ってる

砂川市 大橋政良

メガネ拭く春の明るい風になる  
とりあえず百まで生きる呼吸をする  
成長の過程で捨う嘘の数  
三センチ踵の高い靴でくる  
鉛筆の削り屑からあるヒント

黒石市 相馬一花

究極の穴場を探す週刊誌  
しなやかな肌をちらりとチャイナ服  
墓場まで持ってゆけないアノ秘密  
一流の人には見えぬ低姿勢  
達人を意識させない身のこなし

黒石市 佐藤古拙

リストラの愚痴かかされる縄のれん  
小刀の傷あと残し脱皮する  
メーターの刻みに酔いが醒めてゆく  
列島に住み不条理と向かい合う  
持ち帰る位牌アルバムエトセトラ

弘前市 須郷井蛙

職業と齢が聞きたい趣味の会  
被害地へせめて節電して送る  
五十年母は乱れず米を研ぐ  
糠味噌を開ける亡母が語り出す  
癌封じあとは鎮守に頼るだけ

弘前市 今 愁女

さくら吹雪水面曼陀羅花いかだ  
散りてなおにぎにぎしさよ花筏

ひと日停電に現地被災の悲惨さを

停電にオール電化は遠ざける

お化けよりもっと怖い目は目に見えぬ

弘前市 高橋 岳水

溺れ切ることも叶わぬ水中花

手探りで歩む青春桜桃忌

もしかして拍手しているのがサクラ

幸せの原点に置く握り飯

雑草の声があふれている屋台

弘前市 岡本 花匠

天地人災受けて現世の地獄絵図

卍風と出逢い一縷の目処に生き

永代経終えて凡夫の晴れた貌

割り切れぬ不満を捨ててダイケアへ

梅干しの胚まで食べる笑い草

弘前市 福士 慕情

縄文の土器が日の目を見る工事

切り札を出す頃合が難しい

幼児からメタボのままで古稀となる

住職の息子さんの方が通る声

回覧板一晩泊める家がある

青森県 松山 芳生

道草をいっぱい食べてまた走る  
遠くなる昭和を走ったサツマイモ

鎮魂の涙しずめるさくらみち

逢いたくて一番近い星と居る

花びらを掬うところを震わせて

東京都 岸野 あやめ

図書館で本の名前が出て来ない

盛り場の朝はカラスの天国だ

地縁血縁わたしひとりは何れもない

公園のベンチで老いのもの思い

子に躰出来ない親が言う苦情

横浜市 菊地 政勝

本当の決意をさせるクールビズ

堅物へ洒落の解説してあげる

芽の出ない子の頑張りをはがゆがり

恨みっこないジャンケンはせぬが良い

加齢だと言われたくない古希の坂

横浜市 小野 句多留

満開の桜が競う応援歌

仏様ローンクお借りいたします

GWに雄叫びあげるポランティア

風はらむ明日の夢見る鯉のぼり

カラオケにおとしがわかるレパトリー

川崎市 三浦 きぬ

便利追求しすぎた罰かこの惨事

遠目には麗女の如し桜花の下

自慢する事のあるうち生きていよう

痴呆症にだけはなるまい友達び

亡夫探しの目標何を用意しよう

富山市 島 ひかる

花はみな生き延びる術知っている

一言へ灯火となり生きている

世界中の善意を無駄にせぬ涙

ご先祖のギフトへ今日も生かされる

文明の力に怯える今むかし

可児市 板山 まみ子

色形違う器にみる調和

震災禍見なおしてみる暮らし方

節電へ早寝早起きウォーキング

まあいいか手抜き掃除も板に付き

意気込みはいつまで続く庭いじり

静岡県 菌田 猿 杏

歩き方までひま人と言う歩幅

いたずらをしたいが金の無い無職

面白くないハゼ釣りで引きがない

そよ風へまた余震かと身構える

衣装展母は古典の裾模様

大山市 金子 美千代

海岸の見る目変わって来た恐怖

自粛する事を自粛という支援

雨の日のツアーガイドの低姿勢

息抜きに丁度よい量庭の草

手の内を明かしてしまいうまだ優位

大山市 吉田 幸子

萌黄色さてこれからと深呼吸

青い蝶見つけ幸せ旅日誌(キュランダにて)

ヘルペスが忍び込んでの修羅の道

復興へ若芽も根付く青写真

厳寒に耐えたエンドウからパワー

京都市 三宅 満子

母の日のバラ一本のいい笑顔

衣替えまた断捨離が出来ぬまま

バイキングやめてちよつぱり義援金

平凡に感謝ことさら夕餉時

武者人形に似ても似つかぬ草食系

京都市 榎本 宏子

ほどほどのいい人トップにはなれず

今日の風何色にせんスニーカー

実印を押された紙がえばりだす

御札にと志功のメモが今家宝

絵手紙は下手のままでもぬくい友

京都市 坪井孝一

座右の銘今日は自分に酷なもの  
指切りした昔の指が痒くなる  
金貸した方が孤独な顔となる  
鈍刀でも丈夫それで生きている  
グラスの底今夜も夜叉が踊ってる

京都市 西村益子

入園後すぐに知恵熱かわいいね  
同じ所へ別々に行く老夫婦  
色々あった知らん顔して桜散る  
隣の人聞き上手だったバスの旅  
万歩計も立ち話には慣れました

京都市 藤井文代

ブランド服今は眺めるだけの欲  
真実知り知らぬ時より不幸せ  
御近所へは飾る言葉でつつがなく  
着飾っても磨いてみても古希は古希  
武力よりハラハラさせるツイッター

岡岡市 井上森生

原発がアメカムチかの正念場  
百年の計せめて今から余生にも  
どうなるかそれともほくならどうするか  
大危機にきつと龍馬が現れる  
復興の底力待つ世界の目

長岡京市 山田葉子

ダブルパンチ立ってるだけでよしとする  
漫画だけで孫とギャップを埋めている  
頼んだらすぐにパソコン答くれ  
窓際に坐ってからがむずかしい  
干渉をしない家族の輪がぬくい

大阪市 川端一步

さて今年何を読もうか八月忌  
悪友と紹介されたその絆  
死んだなら百の経よりワンカップ  
ツンドクも役に立つよとひさしさん  
十指みな元気で僕と同じ歳

大阪市 古今堂蕉子

ドーナツの穴にカレーを詰めてみる  
?マークこの愛嬌のある形  
コーヒーのあてに悪口似合わない  
ロイヤル・キスいたわるように触れられる  
避難所の大きな輪やら小さい輪

大阪市 谷口義

問診票に夏は枯れると書いておく  
計画書も出さずに夏がやって来る  
銀行は何日休んでも平気  
一万歩歩いたなんて申し上げ  
祥月命日だからおにぎり食べている

大阪市 神夏磯 典子

思い出の詰まった足を撫でている  
どの総理出ても言い訳ばかりなり  
デパートの林立人が恐ろしい  
バランスを崩さぬようにバラを切る  
何もかも老いるがベンは走ってる

大阪市 坂 裕之

意見聞く前に結論出してある  
顔を出すだけで賛成票になる  
いつからか距離置く人が出来ました  
結論があつて会議の幕が開く  
先ず一杯いやな話はそれからに

大阪市 井 丸 昌 紀

もやもやを許せぬ人で友はなし  
筆箱にみんな秘密を隠してた  
よく馴れた亭主一匹飼つてます  
馴れ初めを聞かれないのにしゃべり出す  
財産が無くて兄弟仲が良い

大阪市 津 守 なぎさ

露天風呂眼下の海に思いはせ  
海老アワビつられてついて鳥羽の旅  
青葉映え森林浴の深呼吸  
旬の幸筍御飯匂い立つ  
好きなもの好きな時食べ感謝する

大阪市 平 嶋 美智子

処分待つ被曝の牛のやさしい目  
チョコ一つでは足りない脳が言う  
飯できたとうに寿命の過ぎた釜  
洗濯機レンジ風呂釜みな余命  
エコ対策のいでみよう団扇出す

大阪市 鶴 田 遠 野

復興への槌音遠い永田町  
天下り汚染ルートのまま歩み  
場当りの総理には無い挫折感  
被災地へ祭囃子を響かせる  
家計簿にも勧められてるエコ生活

大阪市 津 村 志華子

さみどりの森で私のリフレッシェ  
笑顔から心の鍵を開けられる  
才覚は無いが真つすぐ生きた自負  
三猿になろうと決めてからの鬱  
一言が人傷つけて傷ついて

大阪市 奥 村 五 月

子の素質埋めてはならぬ伸ばさねば  
料理屋で母のおにぎり思いだす  
不況風孫の門出を遅らせる  
正直な人にもやはり影はある  
ペットにはやさしく話す反抗期

大阪市 板東倫子

力士たち現場で力貸せばよい  
妻よ子よ海の男が浜で呼ぶ  
ひたすらに働き老いては認知症  
芸人が無理やり笑わせようとする  
古き良き時代わが家にまだ残る

大阪市 原田 すみ子

身を削り都会へ電気生む地方  
常識のぬり絵きれいにはみ出さず  
いい月夜そうねと返す幸もあり  
遊び心へ出しっぱなしのウインカー  
葉桜の並木緑のシャワー浴び

大阪市 田浦 實

雑草でも咲き切る花はついまたぐ  
復興へエールを送る通り抜け  
今の私わずかな寄付と祈ること  
捨てられるコウナゴの目に涙あり  
船頭ばかり集めて遅し政治丸

大阪市 榎本 日の出

桜にも負けてないのは笑い声  
節約の文字官僚の辞書に入れ  
母さんが主役と自分だけ思う  
スキップの出きる間は尻尾ふる  
リードならしている積もりされていた

大阪市 小谷集一

出る杭を打つ手加減が難しい  
ときめきは恋だけでなし趣味の道  
言い勝って痛みが残る自己嫌悪  
深入りをしない距離から矢を放つ  
まだ戸主という肩書を持ち続け

大阪市 岩崎 玲子

錆びた脳春の風入れ磨いている  
晴天の春の便りは嬉しそう  
妻の春弾み出したら止まらない  
コンサート帰路のハミング大切に  
鈍行の旅で仲良し老夫婦

大阪市 伏見 雅明

ああ無情洗車直後に黄砂降る  
数字では表わされない人間味  
雑踏にひとの気配が遠くなり  
赴任地の水が合ったか終の宿  
名水と蜜にかける村おこし

大阪市 升成 好

疲れたと靴もひっくり返ってる  
もう一度やる気にさせる酒が好き  
飲む口実照る日雨の日雪月花  
しんどいと言わぬお日さまお月さま  
贅沢を知った幸せ不幸せ

大阪市 澤田定子

ロイヤルの童話の世界ウエディング

余生日々仕事の一つ歩くこと

九十四歳童女のような笑顔みせ

原発を止めても絶えぬ放射能

携帯ベル老眼鏡を捜して

大阪市 大川桃花

左遷地で人間らしくなるキヤリア

詫び状をケイタイメールで済まされる

スローモーション記憶を辿る忘れ物

粗探しわたしの影が瘦せていく

アリバイはもう作れない友が逝き

大阪市 岩崎公誠

言葉尻すこし削って丸くする

不器用に生きた男の長い髭

嘘ふえて胃袋の穴拡がった

王室の恋のタイムに花が咲き

涙ぼろり6Bで書く追悼句

大阪市 江島谷勝弘

宝くじ祈りつづけているけれど

人は飴しゃぶらされると甘くなる

一度ぐらい花をもたせて下さいな

増税せよがなばれ日本できるはず

廃炉までまだまだ時間かかるだろ

大阪市 小泉ひさ乃

復興プラン活路を開く底力

上機嫌ちゃんと記憶にインプット

老いた老いたと言わないでまだ咲かせる気

世間との違う物差しもつ自由

帰途の道程遠い日も近い日も

大阪市 榎本舞夢

幸せを呼び込む豆をたんと撒く

いつ呼ばれても間に合うように待っている

豪快に笑って食べて愛される

北国からライラック咲くいい便り

気まま旅人の出会いがうれしくて

大阪市 小糸昭子

何時も後ついてくるのは猫だけだ

原子より陽と水風が安全だ

雨の後かかった虹は天への橋

一匹の犬でも命生き残り

泣き叫ぶ動物達の抗議だよ

大阪市 熊代菜月

スイーツの甘さ怒りを忘れさせ

罪な花今年も私花粉症

凍て土で転んで私老いを知る

今日だけは泣いていいかと一周忌

顔いた顔が言ってるありがとう

大阪市 松尾 柳右子

折鶴を久し振りに折って見る  
泣かんとこまだいい事が待っている  
今日よりは明日の風吹く夢もある  
出番待つ緊張感は若返る  
脱ぎ着する三寒四温堪えます

大阪市 近藤 正

被災者に役立つならと過疎の村  
就活がやつと決まった朝の靴  
ピンラディン殺してテロが治まるか  
アフガンの孤児の涙は報われぬ  
もったいない心忘れていませんか

大阪市 佐藤 忠昭

震災の故郷を見舞い遠すぎる  
夜行バス十二時間でやつと着く  
災害の現場に立って足すくむ  
塩害の田畑で泣く稲野菜  
灯りなし星の輝やきうらめしい

大阪市 中村 叡子

両陛下御座する国の有難さ  
東北の人の優しさ行儀よさ  
胸さけるほどの悲しさ秘めた笑み  
戦中を思い電灯ワット下げ  
母の日に文字が大きくなる時計

大阪市 池上 清治

電波時計いっぺん狂うたらどうや  
長講話欠伸のたびに見る時計  
待ち合わせ時計ばかり見る男  
確率を信じジャンボに手を出さず  
会場に着けばトイレを探す癖

池田市 栗田 久子

元気ですただ筋力は落ちました  
正直な鏡わたしはあきらめた  
切り上げも切り捨てもせずほどほどで  
いただいた笑顔あなたを信じます  
仙人掌が読めぬくらいは恥じやない

和泉市 横山 捷也

遠回りして来た人に賭けてみる  
文句など言うまい私ゲストです  
ペアルックシルバー旅行五月晴れ  
古希すぎて残る若さの畑仕事  
酒だけが味方と老いの一人ごと

和泉市 西岡 洛醉

年齢の行くのを忘れ病ふす  
明日こそは退院だと頑張る身  
雑踏のにぎやかさがほしい今日  
頑張るぞ今日も妻娘にはげまされ  
八十三歳まだ生き返る男です

泉佐野市 山本蛙城

朝のパン瘦せるつもりでいるのです  
生きどまは隷書体なり九十路なり  
これはもう趣味だよサプリーたん  
祖父の日がなんでないのか五月鯉  
小さい手の温みも届く募金箱

茨木市 藤井正雄

天高く育ち盛りの腹時計  
世渡りのご高説聞く屋台酒  
如露の水祖父と仲良し菊作り  
塾があり泊れませんかと孫帰る  
気配りも終わり幹事の深夜風呂

茨木市 島田誠一

今時の若い者はと上目線  
鋭角の月に遠吠え聞く寒夜  
原発を見ていた視点ぐらり揺れ  
吊り革でスーツ姿が読む漫画  
手の荒れは愚かなまでの母の愛

大阪狭山市 矢野梓

久し振り友に逢うのは眼科歯科  
バイキング食べて夕食お茶漬けに  
今日もまた手抜き料理で日が暮れる  
ゆっくりの妻の支度が焦れたい  
間違いでありますように再検査

交野市 森本弘風

安全神話荒ぶる神もおわします  
三年日記去年の今日も寒かった  
連休を懂れていた若かった  
忘れ物妻のチェックを受けて出る  
主語のない言葉で妻は責めてくる

河内長野市 山岡富美子

ユーモアで攻めて垣根を取り払う  
満面の笑顔に城を明け渡す  
公園のベンチ疼きを溜めている  
激辛で流してしまいうエトセトラ  
爽やかな空気朝刊ひらくまで

河内長野市 村上直樹

ウルマンを声高らかに老いの坂  
鼻歌まじりポンと百億寄付の夢  
黄砂にももしやたつぷり放射能  
亀の自負武骨なまでに真正面  
ご放念ください そつと家族葬

河内長野市 井上喜醉

天寿まで登る覚悟の縄ばしご  
変貌の浪速に老いの夢がない  
傘寿越え黙々のぼる雲の峰  
白マスク黄砂花粉が大嫌い  
平成に維新があると笑わせる

河内長野市 黒岩靖博

時代越え写楽はいまだ謎の絵師

舵取りを妻に取られて忍の盾

一台の車を妻とせめぎ合い

たけのこの山菜和えて春が来る

境界線越えてたけのこ顔を出す

河内長野市 水谷正子

気の毒と言っても身銭切らぬ人

終戦の頃なつかしや電気消す

一人暮し朝顔ヒマワリ蒔きました

一人暮し新聞読んで日が暮れる

年金が入り東へ募金する

河内長野市 植村喜代

夢ばかり一ぱい見ました八十二

孫三人帰れば淋し疲れ出る

今年の桜は皆静かに終り

春だ春だと元氣出す雑草

毎日が追われて済んで行く思い

河内長野市 坂上淳司

ローン組み手にしたライカ青春譜

高画素のカメラが怖い染み小皺

カプセルで体内巡視するカメラ

ドック入りするたび禿びていく身丈

減量という強敵の居るチャンプ

岸和田市 井伊東吉

病には負けじと老いの空元氣

不意の客困るわが家のクールビズ

コンセント抜いたままでは灯はつかぬ

日本の再興図る今チャンス

やっと雨草引き準備整えり

岸和田市 雪本珠子

かあさんの味に六十路で辿りつく

偏屈を破顔一笑させる酒

どことなく妻に似てきた家の猫

節電で街の雰圍氣変わりました

川柳に人生觀をちりばめる

岸和田市 岩佐ダン吉

結果よりやっぱり汗の量とする

声なき声などと私は言わせない

曲ってはいるが一点外らさない

闇は深い辛抱の二字なんだろう

チャンネルのどこも笑っている軽さ

岸和田市 土橋房枝

歳重ね丸くなるのを期待する

以心伝心血縁以上の友がいる

氣持だけでは空氣のようでたよりない

長寿国誇れぬようになった国

私利私欲神に祈って自己嫌悪

岸和田市 森元 ふみよ

八十路来てよもやの大災言葉無く  
風呂静か気付かう妻のありがたさ  
どこへでもお供は甘い飴袋  
閻魔王苦勞が足りぬと追い返す  
列島へ備え万全ボランティア

岸和田市 原 さよ子

プレゼントの帽子ぬいだり被ったり  
つまずきながら頷きながら一人旅  
ほよほやの名刺差し出す春の風  
頭ではわかる体が無理という  
肩の荷をおろすと口が軽くなる

岸和田市 堤 権代

悔しいがやつぱり老いがそこいらに  
この傷みチチンプイプイ飛んでゆけ  
ダイエットしたくないのに痩せ細り  
いたわられるのに淋しデイサービス  
カレンダーデイの日だけは忘れずに

堺市 加島 由一

いろいろとあり花見には行つてない  
ウォーキング服着た犬とすれ違ふ  
丸腰で含み笑いの中に立つ  
メイドイン大阪日本一の妻  
別れたと知らず家族のことを聞き

堺市 奥 時雄

不自然は何れ自然の怒り買う  
泣きながらめんこい牛の乳捨てる  
マネキンが着ていたものを買ったのに  
防犯灯突然点いて手を放す  
喋らねば見た目は申し分がない

堺市 遠山 唯教

板長の味が馴染みを放さない  
口よりも目が真実を喋りだす  
晩学を邪魔する棚のナポレオン  
あつけなく済んでしまった雛祭り  
被災地の暮らしに生かす老いの知恵

堺市 大隅 克博

好きだから態といけずをしたくなる  
廃線と決まっただけは混んでいる  
静かにと保護者を叱る参観日  
もしかして天才かもは五歳まで  
煽てるなすぐに天狗になるやんか

堺市 大久保 のん子

生も死も所詮ひとりの祭りごと  
風の音散る花びらの吐息とも  
芥子粒の一つ一つにあるプライドよ  
この命どう仕上げよう汗の坂  
アルバムに貼れぬ写真の置きどころ

堺市 荻野 像 山

妻よりも頼りになったカレンダー  
未だいける積りの足がきつくなる  
二度聞いて三度聞けずに笑つとく  
四月馬鹿ヘルスメーター嘘つかぬ  
楽くれるはずのロボット暇くれる

堺市 西村 りつえ

饒舌にいつのまにやらした妥協  
目覚めれば水と電気に助けられ  
もがいても脱原発の無理な国  
ずつしりとパワー抱いてる八重桜  
新緑のパワーを貰うスニーカー

堺市 源 田 八千代

五月晴の下で冴えない五月病  
蕉翁も賢治も記す みちのくよ  
バーベキューの煙にむせる青葉かな  
仲間らとお喋りはずむウォーキング  
せめてもはトイレマツトにバラの花

堺市 志 田 千代

おおらかな神が許したギヤル御興  
百合が咲くユリの切手の便り書く  
はよ回れゆつくり回れロスタイム  
本当のビールかどうか聞いて飲む  
口閉じてから喧嘩には勝つていた

堺市 山本 半 錢

米撒いて雀と遊ぶ日もあつて  
勢いを付けても老いの空元氣  
孫の誘い嵌った振りも難しい  
鬼が出るか仏が出るか迫る闇  
石けりをしながら母を待つていた

四條畷市 吉 岡 修

お邸もうちもアンテナだけ同じ  
屈折をしてから僕にきた光  
鬼いっぴきいつでも吐いて進ぜよう  
変わらないテンポ無理なく生きている  
ちよつかいを出して咬まれた傷がある

吹田市 太 田 昭

スイッチオンまだ善人で居たいから  
古傷を語れる友に会いにゆく  
正論を吐いた拳は下ろさない  
まだ生きるために履歴書書いておく  
過去の荷を下ろし明日の荷を背負う

吹田市 大 谷 篤 子

箸を割る森の叫びが聞こえそう  
ただいまと言えるところの巢にかえる  
遠い日とピツタリ同じワイン飲む  
飢えたこと時々孫に聞かせてる  
昨日から重い決断だいたまま

吹田市 瀬戸 まさよ

原点は正義教師の思いやり  
短編のドラマつながるわが人生  
スーパへ素顔帽子を目深くし  
葬式の費用これだけあればよし  
大陸の黄砂小鳥も姿消す

吹田市 野下之男

支援され素直に言える有り難う  
体なら三つは欲しい総理です  
噴水で涼しい顔のコインです  
初恋かいつものオウム物思い  
やったるで何はともあれタイガース

吹田市 須磨活恵

がらくたになっても昭和捨て切れず  
くずし字と女心は読みにくい  
暁のまどろみ亡母が逢いに来る  
もう一度逢いたい人よ桐の花  
五月晴自分探しをするもよし

高石市 浅野房子

年金に合わせせししの義援金  
順調に老いて文句は付けられぬ  
若き日の美貌を残し車椅子  
南海地震私が逝ってからにして  
宝くじ私が生きているうちに

高槻市 杉本義昭

いつまでも海を眺めて待つ母よ  
弁解はよそう私は男です  
風船の軽さで初夏の散歩道  
幸せになる本ばかり読んでいる  
損をした人の話は盛り上がる

高槻市 安田忠子

ヨイトマケの歌しみじみ聞き涙  
嫌な事日記に書いておさめてる  
国会の君呼び指命いとおかし  
中学生父の大きな革財布  
アレルギー反応起こす馬鹿騒ぎ

高槻市 乙倉武史

元氣出せと励まし泳ぐ鯉のぼり  
老いるとはこんなものだと感受する  
断捨離はとて無理です未練派で  
笑顔には太刀打ち出来ぬ鞆め面  
自己診断体調良好腹が減る

高槻市 片山かずお

飲むほどにふわりと酔いがまといつく  
寂しさと気楽が対という独り  
加齢かなすぐに涙が出てしまう  
働かぬ蟻を見つけて拍手する  
きっかけが欲しくて美女のそばへ寄る

高槻市 富田美義

恥かいた昔の上で生きている  
怒ったら物を言わない心太  
生甲斐は何かと蟻に問うてみる  
ストローの先でクイズを解いている  
嘘言うてくれる世間が有難い

高槻市 左右田泰雄

人の世にソフトな明かり灯したい  
石燈籠しだれ柳が語りかけ  
花と幹互いに支え合うさくら  
湯上りの肌に優しい若葉風  
少し距離置いて眺めるシクラメン

高槻市 佐甲昭二

自分史をめくれば弱み軋げ出る  
亡母の気配ふつと漂う台所  
わくわくと言う妙薬に癒やされる  
初対面大阪弁にほぐされる  
はいはいとハンコを押したのが誤算

高槻市 井上照子

シヨウウインドウ背なを伸ばせといつも言う  
被災地の折れた桜の健気なり  
病む義姉に慰めごとはもう効かぬ  
妻を看る兄は辛いと言わぬ人  
子に世話をかけたかたくないと歩く日々

高槻市 峯村勲弘

「避難せよ」マイク握って散った花  
夢つなぐ津波に耐えた松一本  
ふと思うそうだ東北訪ねよう  
おもてなし心が通う東北路  
ダイエツトしても無駄ねとDNA

豊中市 江見見清

脳味噌に泡があるのかわれの忘れ  
マスクとり挨拶もして咳もする  
椅子足りず孫たちだけの時差食事  
五月病なのか回らない風車  
放し飼いしても夫は家にいる

豊中市 松村里江

口ケンカたまにはしたいひとり者  
袈裟懸けに消したい過去もごさいます  
認め合う時の笑顔は美しい  
窓に月やつと落款押せる書が  
おしゃれして街の空気にふれに行く

豊中市 藤井則彦

妻の手にうっかり触れた満員車  
飼猫も嗅ぎつけてくる年金日  
美人にはふと目を逸らすエレベータ  
てふてふと書いても読める戦中派  
薬飲み過ぎて狂った腹時計

豊中市 安藤 寿美子

黄砂来て日輪翳る息子の死  
冷えてゆく頬手のひらであたためる  
死に顔のマブタ動いたように見え  
息子の死私は何とすればいい  
鳥の影窓をかすめてとび去った

豊中市 水野 黒 兔

駅弁に古稀もはしゃいで汽車の旅  
幼稚園音符ころころ跳びはねる  
叱られるたびに脱皮の若い蝶  
町中にマスク溢れる見えぬ敵  
欄外に父の遺した覚え書き

豊中市 松 尾 美智代

検査結果気になりころ弾まない  
迫りくる老いを笑顔で迎え撃つ  
夕闇が迫るとテレビ点けてます  
極楽の角度で見てるお月様  
若さ保つ秘訣しつかり食べてます

富田林市 中 崎 深 雪

久し振りに紅さしてみる回復期  
命救ったご先祖様の言い伝え  
春のウツ緑の風に洗われる  
ゴキブリと一騎打ちする夏が来る  
婆ちゃんの無理すんなやに救われる

富田林市 井上 じろう

相部屋になった縁から心友に  
減りました家族ぐるみのお付き合  
夢にでる母の姿は後ろ向き  
雨男今日も今日とて隅にいる  
祝日に元校長は旗を立て

富田林市 片岡 智恵子

テレビ見てまた黙祷をしましょう  
防虫剤変わる季節の匂いなり  
遊びごとのルールはよく皆守り  
還付税小さな春が来たような  
燃え尽きて父風になる土になる

富田林市 中井 アキ

群青の海で詩人の顔になる  
柵を越えたらきつと不しあわせ  
深追いはするなど影に突つかれる  
門限にこっそり木戸を開けておく  
いちにちを急ぐ木槿の薄ピンク

寝屋川市 森田 麗

口紅は春の色です会いましょう  
引き裂いた日からの余白花葉  
回転ドア数秒間にある孤独  
仏壇の菓子が手招く血糖値  
炸裂音が輪切りしていくMRI

寝屋川市 森 茜

自衛隊という哲学を持つ気骨

きりきり舞いする太らせたマニフェスト

迷いこんだ四つ辻さまと出会う

お手軽にどうぞ用心してしまおう

ローカル線軽いタツチでひとり旅

寝屋川市 太田 とし子

真ツすぐに歩くばかりが能でない

競い合い支え合ってる軒づたい

補聴器をつけて気苦勞しています

復興に世界の知恵をよせて来る

一斉に花が動いた五月晴

寝屋川市 富山 ルイ子

大津波の傷痕いまだ消えやらぬ

一時帰宅只二時間とは殺生

牛が死に飼犬が死に心死ぬ

東北への愛日本人皆が待つ

賞金を全額義援愛ちゃんも

寝屋川市 平松 かすみ

母さんの元気よるこぶ紅生姜

冗談に揺らしたおっぱいに痴り

ドクターの注文通りセミヌード

良性と思うがあっちこっち撮り

レントゲン胸にきれいなお月様

羽曳野市 安芸田 泰子

遅咲きの桜に託す惜春賦

抜け道を知って足取り軽くなる

余命など判らぬままの畳替え

言い訳の復唱をする胸の中

飲み込んだ苦言がつまるのどぼとけ

羽曳野市 徳山 みつこ

古い種双葉になつてくれました

母の日にやはり嬉しい声と花

ほんのりとわたしを染めにきた梅酒

ストレッツチかねて蒲団の上げおろし

放射能見えないけれどあるんだよ

羽曳野市 酒井 一壺

医学部に咲いて家計が大弱り

苦しくはないのだろうか水中花

一月の顔で家族が大笑い

初恋の思いは冷めず五十年

ひとめはれ今もやっぱり好きな人

羽曳野市 三好 専平

電気さえあればなんとかなる文化

春月に縄の梯子をかけてみる

烏なげ泣くのコちゃん逝きにけり

人間は猿に似てきて喧嘩好き

「想定外」が津波のように押し寄せる

羽曳野市 福田悦子

亡母の日に感謝忘れぬカーネーション

消熱はゴーヤに頼む苗を植え

明日我が身リュックに詰めた必需品

お願いは暑くなるなど神頼み

ボランティア行く気体が動かない

羽曳野市 吉村久仁雄

愛という字にはたくさんトゲがある

正論を自分に課してまだ独り

喧嘩した僕にも妻の旨いメシ

誕生の日から余生の蟬しぐれ

逝くときはほなさいならと言おうとする

羽曳野市 永田章司

ライバルが追いかけてくる至近距離

人間の欲望満足を知らず

贅沢は敵かつての標語よみがえる

震度5もたびたびでると馴れてくる

独裁に民意の反旗そこかしこ

阪南市 森村美花

ひとり住む自由が好きな窓あかり

美辞麗句並べて君の顔がない

嘘すこしまぶしまあるく生きている

体力はないが頑固は持ち合わす

言い放題言うてそれでももててはる

東大阪市 佐々木満作

穏やかな日日が続かぬ世の流れ

情報の罨に溺れて身を崩す

事あらば庇ってくれた姉嫁ぐ

マドンナの周りはいつも華やかだ

世間体気にせず生きてきた素顔

東大阪市 米田水昇

春時雨被災地の海不気味です

被災地に早く晴れ間が見えてほし

大花火街の夜空に喝入れる

母と子で弁当作る行楽日

誕生日孫の手紙を読み返す

枚方市 寺川弘一

気象予報士タレントなみになって来た

記念切手でささやかな夢送る

テレホンカード偶に使ってさしあげる

今日の分だけ成長をして明日が来る

胡蝶蘭いつも主役の顔で居る

枚方市 海老池洋

花菖蒲活けて心を初夏にする

事もなく長閑にたむろ消防車

丸かじりの菌形リングを喜ばす

幸せな時は手相を気にしない

本当の穴場ガイドに書いてない

枚方市 小林わこ

フライング多いが憎めない男  
泣きごと言わぬ男黙って手紙書く  
賞罰なし男みごとな力瘤  
一直線父を追い越すのが男  
踏んぎりをつけて男はドア開く

枚方市 二宮紫鳳

沈丁花香り一輪お裾分け  
完食の孫のお膳にVサイン  
たんぼぼがガレキの中で春を告げ  
大丈夫呪文のような母の声  
弱点をさらけて絆強くなる

枚方市 丹後屋肇

お開きの校歌老師が肩を組む  
左遷地に種火を点けて赴任する  
映像が目に焼きついたままの春  
ラッシュアワー吊皮両手放さない  
無味無臭線量計が震え出す

枚方市 二宮山久

人生の花咲く趣味を追い求め  
老いてなおまだまだやれる芸の道  
ボランティア終えてふる里母思う  
年金の暮し苦もあり楽もあり  
ほら春が来てます朝のスニーカー

枚方市 安達忠央

目覚ましが鳴ってその日がダツシユする  
穫り入れの豊かさ祈り種を蒔く  
鉢巻で自然に歩調あつてくる  
花時計綺麗に四季が流れてる  
目ぢからでお店まとめてる女将

藤井寺市 高田美代子

天国で退屈するのなら御免  
ノックして下さいわたしデリケート  
留守電へ大事な用を言い洩らし  
無添加のわたしを賞味しませんか  
いけずさえ言わなきや美しい女

藤井寺市 伊藤アヤ子

あなた居て笑い話も出来るもの  
前向きと自分自身に言い聞かす  
母の日に新米ママがくれた花  
連休で少し疲れた母の顔  
なつかしい母の自慢の木の芽和え

藤井寺市 吉田喜代子

大阪で津波を逃げる場所探す  
駅前に葬祭会館ばかり増え  
クラス会六十年が消えて行く  
女の橋数時間では語れない  
独り居も時にはパツと花も咲く

藤井寺市 鈴木 いさお

方言に囲まれノスタルジアに酔う

失恋の痛みオブラートに包む

針千本覚悟の上でついた嘘

激動を生きて刻んだ深い皺

満腹が何より贅沢だった頃

藤井寺市 俣野 登志子

桜散るさあおちつこう落着こう

断捨離に抵抗があり戦中派

昔の恋を今さら妬いているわたし

いとしさと憎さ同なじ顔飽きず

野菜に虫きつとビタミンABC

藤井寺市 津田 シルク

足腰の錆は気合でカバーする

日の本の大事に黄砂構いなく

あれ以来釣の仲間がおとなしい

護身術教えてからの塾通い

雷の妬み七夕雨になる

藤井寺市 若松 雅枝

土筆摘む被災の土地を偲びつつ

水河期の真ん中孫の就活期

花丸が減って淋しいカレンダー

物忘れお互い様と笑い合う

藤棚の下で仔猫と日向ほこ

箕面市 出口 セツ子

推進の責任国はどうとるの

増税の前に半減したい議員

天皇と総理被災地での違い

下請けの派遣へ危険押しつける

逃げる術不安抱きつけない庶民

箕面市 広島 巴子

鶯の初音に餅とお茶揃え

少しづつ励ますように木木芽吹く

洗濯で気を紛らわすユーザーン

子を送り次の連休もう調べ

若者のパワー頼もしボランティヤ

守口市 井上 桂作

放射能危険区域が拡がりを

放射能被害どこまで魚にまで

毎度ありなにわ商人程のよさ

老いの身は何時も連休ありがたい

通り抜け今年もつづく人の波

八尾市 高杉 千歩

散歩道一円だつて見逃さず

生き方の変えようもなく老い加速

脳トレゲーム五十歳も若返る

怯むなと朝は元気なジャスミン茶

断捨離の一字だつたら出来るかも

八尾市 宮崎 シマ子

少女のように母の好きな人だった

私にも猫にも優しい人だった

まだ未練あるか私につきまとう

一周忌も済んだちよこちよこ出てくるな

私は逝かぬ そちらでいい人見つけてね

八尾市 内海 幸生

子らのためペンペン草も必死なり

禁酒の身テレビよ怨みでもあるの

昇る陽がいいね夕陽も好きだけど

何回も出直し一冊本をかう

野良犬の首輪がちぎれかけている

八尾市 寺川 肇はじ

身に余る世辞に思わず背伸びする

きつぱりと断り過ぎてちよつと悔い

スイートルーム子らの奢りに寝付けぬ夜

平凡に生きて余生を闊歩する

発電のエースも今は忍一字

八尾市 村上 ミツ子

風薫る五月わたしの誕生日

探しています風評の震源地

がんばってがんばらぬようしています

自粛止めおいしいケーキ買ってくる

銀行で川柳談議して帰る

大阪府 米澤 俣子

背のびした影を木蔭で休ませる

ときめきを見つけにちよつと出かけます

無農薬器量悪いがお裾分け

しあわせ貰う翡翠のような豆御飯

シンプルに生きて可もなく不可もなく

大阪府 初山 隆盛

ふくしまにへんぼんと舞え鯉のぼり

幾万の御霊に謝する想定外

復興へ振る一念の日章旗

三景の松のみどりは名を残す

生かされて生きるつとめの恩返し

大阪府 野田 栄呼

家族愛ケーキに並ぶ誕生日

後一回免許更新する不安

戦中派物持ちよすぎ狭く住み

薄布を引いて静けさ保つて

理不尽に女性長寿の同年会

大阪府 桑田 ゆきの

鯉幟避難所癒す風含む

人生の坂へ背を押す風があり

語尾軽い総理に嵐吹く気配

げんげ田へ大の字となり思惟の空

野火が生む無限の地図にある浄土

神戸市 山口光久

聞かされたジョーク筆筒に入らない  
命懸けだった初恋冬木立

様々な人と出会える吹き溜り

街角に誰も気付かぬホームレス

雨もよし今日一日を振り返る

神戸市 伊勢田 毅

たけのこの正義真つすぐ天を衝く

義理がたい鮭が忘れぬ川がある

血統書ないから犬は吠えるだけ

責任がのらりくらりと七転び

世渡りに頑固な顔を一つ持ち

神戸市 山口美穂

バーゲンの値札に騙されそうになる

もうとまだ喜寿都合よく使いわけ

老犬の夜鳴きへ子守唄うたう

残り物あれこれ冷蔵庫を満たす

雨の日は昼寝してます万歩計

神戸市 早川孝子

あこがれたあなたの町も好きになる

ふるさとを歌えばやはり友がいる

一歩ずついっしょに花を咲かせたい

ふる里の笑顔そのまま残したい

お互いに傘傾ける細い道

神戸市 木村 貴代子

太陽と青空が好き上を向く

先人の教えたしかに生きている

自己完結求められてもボランティア

大半が中流ですと言った頃

文明災フクシマにのみ担わせて

神戸市 山崎 武彦

安物の靴で立ち位置決めている

デジタルの波に刻まれ生きている

千円になれば刻みにするタバコ

社のために一身上と書く辞表

須磨琴の何やら寂し爪の先

神戸市 山田 婦美子

大鼾うるさい逆さに寝てみよう

半世紀よく連れ添ってくれた足

人工の耳が拾ってくる噂

この道を辿れば亡母に逢う予感

人は皆傷つきやすいから誉める

相生市 中塚 礎石

今だから笑える話妻と酌む

暗号に涙を流す古日記

耐えて来た妻は二倍も三倍も

八十路坂怖いものなし腰のばす

窓際の明かりで社内よく見える

明石市 糀谷和郎

尼崎市 藤岡りこ

不揃いを埋めてひとつになる夫婦  
カサブタが剥れてついに恋終わる

原発への非難は津波より高い  
人の居ぬ地球はきつと住み易い  
飽食の海で溺れている人科

芦屋市 竹山千賀子

尼崎市 軸丸勝己

方言を使つて絆太くなる

公に土下座するほど偉くない

ファッションで別な私を追いかける

お付き合い続けたいから距離をおく

訃報聞くとび身辺の整理する

芦屋市 黒田能子

尼崎市 林昭三

みじん切り忘れたいこと忘れませ

風向きが急に変つた運のよさ

テーマも決めず一日わたしフリーです

四つ角の迷いエイヤで決めました

門灯がほっこり帰る人待つ

尼崎市 山田耕治

抜け道をくねくね時間稼いだ気

嘘は苦手すぐにほんとのことを言う

本積んで二階の間わがお城

一拍の遅れ地球の裏の声

ああしんどかったと花見から帰る

憶えのない芽が出て花を期待する

エプロンのポケットに檸檬ほのかな香

大津波目の前の春遠くする

安全神話想定外に裏切られ

初恋は今も心にトゲ残す

昭和史を捲くる図書館昭和の日

裸木も整いましたみどりの日

大震災脳裏に浮かぶあの戦後

松原を残す一本松聳え

がんばろう日本十年肚くくる

むつかしい事突然に子に聞かれ

久し振り母の電話も花粉症

音沙汰が無きは無事だと昔の子

保釈金どんなお金かたんとある

カーテンも二人で引けば安らかだ

逆境に負けぬ強さの無洗米

老いたりな多少のことは目をつむる

気分転換うまくするのも生きるこつ

言わぬが勝ちそつとナフキン折りたたむ

究極の選択だった娘がひとり

尼崎市 長浜美籠

伊丹市 山崎 君子

早や五月今年も飾る男雛  
母の日の娘の優しおくりもの  
鯉のほり出せばあの子を思い出す  
のど自慢聞いてしみじみ思う  
丸い月いよいよ寝ますどのあたり

加西市 金川 宣子

新入学ママの仕事は名前書き  
ランドセル喜び倍の双子ちゃん  
タンポポの綿毛と風が鬼ごっこ  
節電も買う気が失せるショーウィンドー  
何回も繋ぎ直した赤い糸

川西市 米原 雪子

差し木から返事を貰う可愛い芽  
駆け込んだトイレ只今掃除中  
懐しむちよっとおまけの計り売り  
素直さにちよっと意地悪したくなり  
一ランク上を受けると言う決意

川西市 西内 朋月

冷凍の料理二分で出来あがる  
残り物で苦しくなった冷蔵庫  
共存の癌を宥めて飲んでます  
露天風呂ストレスを芯からほぐす  
青空にぼっかり母のにぎり飯

三田市 福田 好文

保険屋が仮に仮にと繰り返す  
風邪引けば家の看護師活気づく  
子も孫も百まで習う風呂の中  
ジーパンの穴が縫いたいお婆ちゃん  
国破産年金打ち切り来る予感

三田市 石原 歳子

自転車を手放し淋しそうな夫  
売り物にならぬ野菜を貰ってる  
メモしてる暦を見てるのに忘れ  
母の日の父母に弁当持って来る  
兄が逝き次は僕かと独り言

三田市 上垣 キヨミ

此処もかと思われぬよう店開ける  
友人の訃報に我を置きかえる  
耳にタコ出来た地デジに妥協する  
今ならば解る旋毛を曲げた父  
今のうち吞ませてくれと生き仏

三田市 久保田 千代

女三人男を皿の上ののせ  
飲み込んだ言葉を隠す咳払い  
ライバルにたたみかけして席を立つ  
責任を取らぬ男の世紀末  
物言わぬ父が教える背の光

三田市 北野 哲男

わたし喜寿三途泳ぐ気スイミンゲ

一握りほどの水着が五千円

エリートの犬が人間様を連れ

左手も添えた握手で孫託す

原子炉に一蓮托生強いられる

三田市 田中 章子

短冊を読んでいるのか風の音

つながりがネットだけとはさびしいね

君ならばわたしのよさがわかるはず

阪急電車空気が少しお上品

西宮市 足立 茂

金切り声耳に栓する午前様

猫舌が超熱爛で目が細い

元気です金を送れと子のメール

酔って怪我引きずる足に犬が吠え

常識をひっくり返す四コマ目

西宮市 藤本 直

昔話聞くたび違う花が咲く

我を通し失う物に未練なし

飽食の果てに生肉食う文化

グルメです朝は目刺しと海苔に凝り

初歩き見守る中の一步二歩

西宮市 緒方 美津子

神仏キリストおわすいい国だ

はらはらと瓦礫に涙つきません

バーゲンで漁る妻には近づかぬ

笛吹けば踊ってくれる母大事

ごゆるりと時は刻まぬ旅の宿

西宮市 亀岡 哲子

連休のママが淋しい子の育ち

復旧の路線で春を北国へ

瓶の蓋の頑固へ老いの意地つ張り

小半日景色眺めている齢よ

サラブレッドの足を温泉で癒す

白木蓮はらはら別れ暗示する

天気予報切なく思う北の空

震災が心ひとつにしてくれる

美しいから刺があるからばらが好き

賑やかにカーネーションが来てくれる

西宮市 秋元 てる

オミナエシ亡き息子は場所を秘めたまま

てこずらす孫へひそかに肩入れす

もう効き目うすれた涙また流れ

オツなもの良さがこの頃分かりかけ

花の名は思い出せぬがあの香り

西宮市 吉井 菜々子

きのうから荷風耽読してる雨  
ボサノバを口遊んでるカップ酒  
後ろから拝むとくしゃみする貴方  
時々生演奏を聴くグラス  
とてもクールに官能的なドラマソロ

西宮市 片山 忠

一人では背負いきれない娑婆の恩  
憤るだけならテレビ消しなさい  
どんな子にさせたいですか塾漬けで  
当然のようにベットが先に食べ  
心機一転頭洗って風呂を出る

西宮市 山本 義子

女ひとり鏡のうらと喋ります  
女部屋一輪挿しの位置がある  
苺パフェを前におこは物静か  
山小屋は男の料理見せどころ  
あの男やっぱ尻尾ありました

西脇市 七反田 順子

ワインシャンペン新婚さんへピンク色  
お日さまの輝きは愛格差なし  
あじさいに基地を作った雨蛙  
目分量で自慢の料理出来上り  
食べてくれる君が居るから腕振るう

姫路市 古川 奮水

丸ビルへ音楽の森聴きたくて  
自由席のぞみに決めて早く着く  
暗い駅これが首都かよ東京か  
跡形無し東京中央郵便局  
身勝手な連れが煩い夜行バス

奈良市 加門 萌子

遺体さえ見つけられない悲悔哀  
日本の英知疑う落し穴  
寄付出来る側に居るのを感謝して  
人の性ほんとは善できつと勝つ  
被災者の涙真珠のひとしづく

奈良市 辻内 げんえい

ゲスト部屋そんな豪邸憧れる  
あかんがなと叱った祖母はもういない  
お世辞言う部下を避けてもついてくる  
二歳の孫もうおべんちゃら言ってる  
震災後節電ライフ続けてる

奈良市 阿部 紀子

かやく御飯ぶりと粕汁祖母の味  
文嬉しコマージュシャルでも文嬉し  
好きなのは同じ視点で笑う人  
前の家日々壊されていく無常  
墓石が壊れ呻きが聞こえそう

奈良市 岩本浩二

香芝市 大内朝子

本棚に全書並べて見栄を張り

金婚を迎え空気となる夫婦

我慢などしない八十路よケセラセラ

折角のアリバイ崩す妻の鼻

お悔みはどうもどうもとしか言えぬ

奈良市 天正千梢

月ひとつ大きな芝居やっつてのけ

うさぎ年びよんびよんはねて母子です

自問自答甘い答えはまだ出ず

縄電車車掌になつた事がある

しあわせは起伏少なく九十年

奈良市 米田恭昌

東北の空煌めく星は墓標かも

ロボット健気人の替りに原発炉

そこそこに儲けてすぱつと義援金

懐古主義とんと断捨離すすまない

ロスタイムいつ気につきを引き戻す

生駒市 飛永ふりこ

明日香路でびーちく熟女野にあそぶ

わたくしが変ればまわり温かい

フランスパンちよいと気取つてボンジュール

花水木キュンキュン恋が点滅し

葉草料理で五体の血を浄め

日本中笑顔にもどる日を祈る

若ければ駆けつきたいなボランテニア

慰めの言葉がなくて書けぬ文

突つ走つた恋もあつたのひまわりよ

まなうらの母の笑顔の道標

大和郡山市 坊農柳弘

水無月の雨を殊更待つつ棚田

向日葵の黄のひとひらにある音符

生きたくて虚飾の地図を塗り替える

腹割つて話せる友と酌む地酒

五体満足今日も母さんありがとう

奈良県 渡辺富子

たんぽぽの綿花の自由わたしにも

人の情け奈落の底に灯をともし

先見えぬ避難生活夏に入る

足して二で割るとびつたりいく意見

不用意に腹の底見せ悔いている

和歌山市 牛尾緑良

生きてもがいてまるで第一バイオリン

許すとか許さないとかひとの世よ

支持率のひとり私はサクラです

いただきますみんな揃つたおまじない

常識をあなたに言われたくはない

和歌山市 松原寿子

分類をされてもわたし人科です  
お役には立てず重荷に耐えている  
頭脳線ころの糧に五七五  
逢いたい人の彩であなたが蘇る  
被災地を救え与野党一体で

和歌山市 上田紀子

ドラエモンのポッケであの世下調べ  
堪忍袋何度も縫った後がある  
頭にもビタミン欲しいもの忘れ  
何色を足せば明るくなる未来  
薄墨で義理を果したのし袋

和歌山市 坂部紀久子

目覚ましを一度二度止め三度止め  
お世話した事が裏目に昼の月  
肩の凝りガッツポーズをやってみる  
口下手でいつも語尾から攫われる  
北向きの玄関せめて観葉樹

和歌山市 田中みね

成績はともかく孫は男前  
大金であれば返して言えるのに  
あんな事こんな事経て早や古稀に  
証拠物件もっているから強い事  
上品にいこう決めて臨んだ席だった

和歌山市 福本英子

新緑のそよ風笑顔連れてくる  
新緑に熊野古道も三つ星に  
後れ馳せ雨後の筈我れ先に  
復興の兆へ邪魔な雨続き  
そわそわとお洒落して出るデイクアー

和歌山市 喜田准一

心には白髪生やさぬ古稀半ば  
ひと言が踏み絵になつては会話  
付き合いの広さ手加減匙加減  
悪友が無理をするなど注ぎにくる  
笑つてる顔にかなりの無理がある

和歌山市 古久保和子

お洒落して靴に咬まれた春の街  
紋白蝶はキャベツ畑が出生地  
水鳥の脚は優雅にしておれず  
ジグソーパズル森の奥から呼んでいる  
花の名を覚え豊かになるころ

和歌山市 武本碧

大好きな君を私の基地とする  
アナログのテンポで歩く人生譜  
果たし状封の端から火の匂い  
両方へいい顔をして椅子がない  
スカートを踏まれてリストから外れ

和歌山市 岩本 美智子

復興を見届けるぞと松一本

戦中派英語できぬをその所為に

制服が氣にいつて行く滑り止め

子供の日ケーキも面白いトンビ飛ぶ

児纏わる木登りのようママのっば

和歌山市 松尾 和香

帰り待つシチューふつつ香り立つ

大空へ羽ばたく思い孫巢立つ

仕事持つ母の健康宝物

削る文字探し続けて夜が明ける

川柳の女神ときどき背中押す

和歌山市 堀 富美子

遠吠えに慣れた日記がいと嬉しい

母よりも歴史見届け喜寿祝う

震災の余波通院にない葉

大根の白さを染めるわたし彩

コンクリート割る雑草と根競べ

海南市 堂上 泰女

不揃いに億の値がつくピカソの絵

虚心坦懐若葉の風に身を晒し

有情の温さに溶けた五月鬱

幸せの彩で咲いてるライラック

燻し銀心に残し恋終る

田辺市 岡本 昇

新築の匂い背伸びをしたくなり

雨の日はしつとり本を読んでいる

おにぎりにスパイス利かす竹の皮

散らかした机でペンがよく走る

被災地にあしたの鐘が鳴り渡る

鳥取市 鈴木 公弘

木の芽どき原発すべて停止せよ

ちかごろの耳はよいことばかり聴く

杜の都を励ましに行く全日本

葉桜の下のおわさを掘り返す

行儀よいお子様ばかりいて怖い

鳥取市 池澤 大鯨

夏は水田冬は池の面四季めぐる

養魚池放流をして放置する

菱の実は落ちて池底に根をおろす

池の底鯰はチャンス狙ってる

ブラックバスひそかに放ちルアー打つ

鳥取市 春木 圭一郎

無理をせずできる範囲をがんばるか

様子見ることも大事と知らされる

間に合わぬことにこだわることはない

日和待ちできる根性身につける

習慣でプラス思考は養われ

鳥取市 武田帆雀

めし三杯食つてるうちは大丈夫  
勇気ある発言なれど手が鳴らぬ  
純白のタオル不徳な顔を拭く  
降参はしてない耳が動いてる  
不器用な指では弦が弾まない

鳥取市 吉田弘子

計画避難それからを問う収束日  
ドック入り永い航路の船だつて  
順番のない終章へ日々好日  
晴れ続き雨で落ち着くアマノジャク  
今もつて風になれない人の居て

鳥取市 田中一眸

満月の夜の化粧はチヨイ濃い目  
金髪に染めても根つ子染まらない  
心から春喜べず去つて行く  
闇抜ける悲しい涙サヨウナラ  
貴男だけ私の香り知っている

鳥取市 高浜勇

また余震引き際悪いマグマ様  
子等の声響きひとすじ光射す  
がんばろうテレビの声が空々しい  
大津波心までもは奪えまい  
美しい海に魔物が住んでいた

鳥取市 土橋睦子

昭和史を導いて来た先祖の碑  
爺ちゃんのポケットの底に裸銭  
老いてなお裏門あけて待つ爺さま  
先祖から頂く土にただ感謝  
生き甲斐のように老母も出る畑

鳥取市 池原天馬

人はまだ海の浄土でただよつて  
万歩計朝のリセット夢もたせ  
燕来るその家今年なくなつた  
敬老会廃校の館満員に  
ドタキャンでまつりの料理四日食べ

鳥取市 加藤茶人

可愛さと欲の勝負は欲が勝ち  
似るものは似るもの似てる足の裏  
アルバムに不幸は載つてない写真  
四面楚歌妻の姉妹はちと苦手  
水前寺清子は偉い一步勝つ

鳥取市 有沢せつ子

少なさを恥じらいながら募金する  
通帖と身体なかなか太らない  
健康法梅二十キロ予約する  
まず背筋伸ばし作句のペン握る  
宰相の打たれ強さよ投げ出すな

鳥取市 深澤 千恵子

物言わぬ花さえ人の愛を知る  
友情も打算からむともろくなる  
楽しむと知らないうちにうまくなる  
老いの影丸くなる背に忍び寄る  
逆風は父の背中で避けて来た

鳥取市 西川 和子

天候不順冬の箆筒が片付かぬ  
いざの時位牌を抱む風呂敷を  
歳月が景色を変えて古い二人  
お喋りが集い元気を分ち合う  
孝行のはずの支払い母が持ち

鳥取市 近藤 佳子

タンポポは未来預けて風にのり  
日本の風土は粹に花を愛で  
襟首も頬つべも花吹雪にまみれ  
関節炎以外はしあわせな暮し  
引力に勝てぬ体形もてあまし

鳥取市 吉田 孔美子

イクメンでミルクおむつと楽しそう  
赤ちゃんは珍しいみんなが覗く  
日の丸を一層緑にしませんか  
赤い下着なんぞめつそうもないわ  
ミルク色の混浴効果止まらない

鳥取市 土橋 はるお

金持は損せぬ案を出してくる  
悪友は脂ぎつててくれたばらぬ  
立派な墓に立派な花が立ててある  
始末書が書けりゃ一人前だろう  
田圃にも取水ルールがあるんだよ

鳥取市 森山 盛桜

何者か解らぬ取り敢えず笑う  
無策では二十四時間生きられぬ  
幸せが何時かは掛かる蜘蛛の糸  
呼び水をされたら大阪弁が出る  
皆を決した腰が重いまま

鳥取市 中村 金祥

青空の力皆んなを勇気づけ  
ろうそくの明かりを揺らす万の風  
故郷におひとり様が多過ぎる  
孫掃り一直線に畑行く  
孫のチュー妻には内緒しておこう

鳥取市 奥谷 彩子

つくしタンポポお喋り好きな野の音符  
原風景に父母がいて今生きる  
七転八起幸せつかむまで続く  
イクメンの出番待ってる核家族  
百彩を溶き亡母の笑顔が画き切れず

鳥取市 田村邦昭

幸運を掴む自分の手がちさい  
かけ違いボタンをしかと直しとく  
横着という魔ものから離れない  
悪運に耐えて今日からいい笑顔  
武士を語る城跡で花の宴

鳥取市 太田幸枝

よく喋り後指には気づかない  
大山の見える所に家を建て  
不景気に追打ちかける大津波  
震災が大臣の格また下げ  
辛いこと流して卒寿今も元氣

鳥取市 横田春名

遠い地のカーネーションが届く日よ  
五月晴れ再会の友赤い服  
亡母教え菜の葉一枚捨てなよ  
不満壺うんと大きくして老いる  
泥かぶる覚悟で友に助言する

鳥取市 岸本宏章

戴いた恩の全部は返せまい  
ごみ仕分け子供は親を見て育つ  
出席の返事大きな丸で書く  
嫌煙権いつかは死語になるだろう  
今日生きる何万人の手を借りて

鳥取市 永原昌鼓

勇ましい瓦礫の上を泳ぐ鯉  
世話させるくせに威張っている夫  
病人のサロンと化した待合室  
亡母の歳二十超えても母を恋う  
皺々のこの手来し方物語る

鳥取市 竹口清信

碌でなし自分で気付くだけ取得  
都合など言ってもおれぬ時がある  
時どきは無理をしてまで生きて来た  
苦いこと言う人腹は黒く無い  
腹の底見せて仕舞えば楽になる

鳥取市 倉益一瑤

さくらが咲いて散って忘れてゆくほとけ  
花束を貰ってからの大火傷  
家中を花で飾って充電す  
鑑定をしてから壺の不眠症  
人間味あつて七癖持つてます

鳥取市 前田孝子

飼犬に噛まれた傷は見せられる  
二度とない出会いに感謝夫が言う  
あと一步踏み出す勇氣世が変わる  
国民は冷めた処で見えています  
ダイエツト見てる夫が痩せてきた

鳥取市 岸 本 孝 子

連休の旅は近場でお湯の宿

くじ引きで決めた役なら受けやすい

戦中派あふれるほどの湯は張れず

年月が経つほど痛む傷もある

まだ愛があるから憎いことも言う

鳥取市 平 尾 菜 美

愚痴ひとつきいて欲しくて風に乗り

突如出る自浄装置のない持病

垣間みる姑国会に御執心

スマートに噂を畳む苦勞振り

見た目より這い蹲える人が好き

鳥取市 中 宇 地 秀 四

生きている心をつなぐ助け合い

八百長の下手法政治家蚊帳の外

終章の道がドンドン伸びて行く

矢車の音に集まる鯉のぼり

良い天気今日も茶粥に梅一つ

鳥取市 鈴 木 一 弘

白壁のしだれ桜に灯がともる

冷えびえと湯薬師さんの花まつり

祭り好き花が咲くころ現れる

尺庭にコブシの灯りほんのりと

春風にコブシの雪が降りつもる

倉吉市 山 本 玲 子

今日の捻子ゆるめて仕舞風呂にする

虫たちのテロに溢れる無農薬

濠の蓮みな天上を指している

乾杯へみんな立たせて花冷える

老夫婦テレビに見入る悲しい目

倉吉市 山 中 康 子

原発に決死の戦見るような

内心は参加希望のボランティア

大難を笑顔に変える健気な子

乾パンを食べて非常時のまねごと

見送った後の寂しさ開放感

倉吉市 猪 川 由 美 子

大惨事に人も野菜も魚も泣き

原発事故長い戦がはじまった

新聞や書籍無くなる日が恐い

被災地を巡幸姿胸詰まる

自衛隊災害時には感謝され

米子市 白 根 ふ み

いつまでも若いと思う自惚れか

人の世話できて普通の日を送る

どこまでも華追いどこまでも平和

告白を終えてさくらは北上す

垂直に椿は落ちて物語る

米子市 高田 振作

風呂上りおんなの艶も出なくなり  
ファスナーを上げていますか妻が聞く  
ゴミ捨てにどこまで行った立ち話  
マドンナからラストダンスの申し込み  
マニュアルに想定外が抜けていた

鳥取県 石谷 美恵子

桜満開片意地捨てて逢いに行く  
キャンセルのキップは福の神だった  
探すより早いわたしの糸切り歯  
意地捨てて水の流れに逆らわぬ  
愛しくて憎いあなたと半世紀

鳥取県 西谷 悦子

真心の味がじんわり胸に沁み  
人間味肩書き取れてから滲む  
すさま風わたしの城は入れない  
輪の中へいつ時孤独捨てにゆく  
罪いくつまるめて生きてきたのだから

鳥取県 北村 稔

昼中に電気つけてるばち当り  
独身を通すいじはる彼女なし  
ねえあんた今更好きなど言えないわ  
放射能にてもやいても食えませぬ  
日本国安心安全場所がない

鳥取県 細田 裕花

一日をのんびりしよう誕生日  
ゴールまで燃費の悪い旅続く  
ブラタモリの目で首都をウォッチング  
東京でしつかり出来たウォーキング  
夢ひとつ叶いハナミズキが開く

鳥取県 斉尾 くにこ

怒ってはいないが落胆している  
あらましが遠ざけられて見えてくる  
考える葦であつては抱きあえぬ  
始まりはデフォルメされて見せられる  
道草の恋満ちたりぬまま完とする

鳥取県 松川 行男

妻君がいけないと言われ話題変え  
妻という恐さ知らずで嫁探し  
積んでいる川柳誌ならおすそわけ  
洗濯ものが俺を呼んでる空模様  
衣替え山も姿を替えました

鳥取県 岩崎 和子

サクサクとらつきよう弾むカレー好き  
汗しとど意地で抜いてく庭の草  
雑草を抜いたあとには花笑う  
すっぱんぽん汗まみれ脱ぐ気持よさ  
朝刊の入る音待ち二度寝する

鳥取県 山本 正光

原発のニュース途絶えぬ日がつづく

天災で煙草屋さんも暇らしい

庭木花樂し小さな趣味がある

この歳へ頼ってるらし家族たち

好きですと言われたことを知らぬ僕

鳥取県 山下 節子

実践はテキストよりもよく解る

泥くさい案山子田圃によく似合う

浮き沈み重ねた背中頼もしい

いつときを浮かれ気分にするさくら

けなげにも震災の地にさくら咲く

鳥取県 深田 倶久

るるんの日は続かない外は雨

放射能五キロ十キロ見えぬ線

正座してテレビに向かう不眠症

交通安全手本つとめた錆自転車

肝心な所で早口聴き取れぬ

鳥取県 竹信 照彦

苗木を植えて被災地を思う

孫の顔見れば被災の子ら思う

GW僕は毎日サンデーだ

ボランティア足手まといの歳である

復旧も復興するも要るお金

鳥取県 佐伯 やえ

もう少しおしゃれ如何と風薫る

水琴窟の音色うれしい夏の宵

晴耕雨読できる自由に掌を合わす

バカになる薬はいつもはなさない

かたむいてもまだ一心に回る独楽

鳥取県 鳥越 鬼一

三月三十日ベットのドンは逝きました

墓碑銘は犬ドン享年十五歳

病院で死んだベットの幸せか

ゲンパツをゲンバクにする大震災

五月雨が黄砂を洗い清めてる

松江市 三島 淞丘

はんなりと生きてひっそり逝くつもり

ドクターの本音白衣に秘めている

右脳全開待合室の五七五

ケータイの待ち受けフォトも花盛り

女房の愚痴が煮詰まる鍋の底

松江市 松本 知恵子

新芽吹く勢い私も活気づく

朝顔の二葉伸びゆく五月の陽

黄砂降る白い太陽昇り来る

身を削るなんて死語です核家族

食べ放題感謝忘れた食べ残り

松江市 小川注湖

出雲市 岸 桂子

人生の青葉が芽吹く入学式

被災地の五月の屋根に跳ねよ鯉

片肌の桜吹雪が仕分け人

緑の羽根山をみどりに美味い水

忠告は耳に溜め置き時に出す

松江市 川本 畔

出雲市 石倉 芙佐子

万象の緑がもろ手挙げはじめ

真実をポツリと話す伏目がち

駅裏は石ころ道の泣かせ道

一輪を探してふきのとうに会う

アラスカの空へと捲る旅しおり

松江市 松本文子

出雲市 小白金 房子

被災地の犬よさ迷う牛たちよ

哀しみをぼとぼと零す桜土手

カラスまで溜息ばかりついている

草の中のボール教えてやろうかな

今までを許すと言つて葉桜に

出雲市 富田蘭水

出雲市 伊藤玲子

新緑の五月に元氣もらっている

ウォーキング無心に長生きしたいから

パソコンも出来ぬが心負けはせず

八十の手習い恋が邪魔をする

父母も居ない古里足が向く

哲学は知らないけれど生きている

捨てるには少し未練な箸袋

もう一つ疲れぬ鉢欲しい春

誕生日めでたがられて歳をとる

半歩だけ踏み込む君の輪の中に

出雲市 石倉 芙佐子

大国様のお恵み受けて育つ町

天窓から見るお星様きらきらと

冗談でも無い本気でもない片想い

過去みんな焼いてすっきりしたいのに

よっこいしょどっこいしょ誰かが宝を運んでる

出雲市 小白金 房子

生かされて日々誕生のありがたさ

青空に垣根はもたぬ鳥の声

新緑へ勅使むかえる大やしろ

手料理を褒めて誕生囲む椅子

弁解をしても心に残る棘

出雲市 伊藤玲子

連休は一番先に墓参り

春雷の轟天も哀しいか

インナーをピンクに替えてまだ女

うれしさを煮込んでどうぞ召し上がれ

真心がじんじん来たよ握手から

(伊藤寿美さんの句は74頁にあります)

# 川柳塔の

## 川柳讃歌

79

木津川 計

便利さへ警鐘鳴らす臨界点

山岡 富美子

急げば早駕で行き、早馬を飛ばす。それが江戸時代の時間短縮策だった。人馬の速度以上の早さはなかった。

なにしろ原子力はむろん、電気を知らず、石油と無縁に、自然と共存して人びとは暮らし、不便を託つこともなかった。その自然に逆らい始めてから不自然が自然とされる。私たちは地球の滅びを自覚した最初の人類である。「誰が為に鐘が鳴ると問うなかれ。それは汝の弔いのために鳴るのだ」(ジョン・ダン)

入院したかったのに日帰りの手術

谷口 義

術後といえども静養させてはくれない。白内障の手術も日帰りとおつて拍子抜けした老人は驚くにあたらない。心臓のバイパス手術も術後三日があると聞いて啞然とした。むしろ運動をせよ、が主流らしい。

生きての間は休みなく働く。墓に入れば休息はなんぼでもできる。そんな世の中をこしらえたのも私たちだ。一日を24に分け、その一つを60に割り、その一つをまだ60に刻み、その一つをさらに10に細分して競う。ああ。

不器用に生きる靴下干して春

伊達 郁夫

善人といわれ喜んではいけない。「タフですねえ」といわれ、喜んではいけない。(その年にしては)が省略されている、ということは、相当の年々のに、とみられているのである。褒めことばにはウラの意味がしばしば隠されている。「えらい人やなあ」にも感嘆と揶揄、二つの意味がある。

不器用とはバカ正直であり、愚直の謂でもあった。だが、誠実に生きてきたのである。そんな人にこそ春の陽は輝いてほしい。

断りが周到すぎて次が来ず

吉村 久仁雄

「かくれんぼ上手にかくれはほつとかれ」はどなたの句だったか。遊びには余裕のスキ間が必要で、マジヤムキになつては火傷するのがオチだ。賭け事も遊びと心得れば損もまた楽しからずや、腹は立たない。

京都の大学を退くとき、「京都を去り、大阪に帰ります」の挨拶状を送つたら、大阪は増

えたが、京都の仕事は激減した。ええような淋しいような、挨拶も断りも難しい。

出直しの効かぬラストで笑いたい

酒井 一壺

「父帰る」の父は放蕩のあげく老いさらばえ、二十年ぶりに帰つてきたのだ。糾弾する長男に耐えられず、ヨロヨロ家を出るとき老妻に言う。「お前はおれに捨てられて、かえつて仕合わせやなあ。仕合わせやつたなあではない。苦勞のあげくの仕合わせである。菊池寛はこう考えていたのだ。老後の平穩こそ人生の目的なのだ、と。出直しの効かないラストで笑えるか、泣くか、どちらかの結着が一壺さんにもあなたにも、まもなくつく。

忘れない忘れたくない過去の人

平田 実男

苦しい思い出である。傷ついたら別れだった。きれいさっぱり忘れない。が、共にときめいた至福のときもあつたと思えば、愛し合つた日々だけは忘れたくない。そんなかつてが実男さんにある。僕にも多くの男にもある。

行くかどまるか。受けるか断るか、買いかやめるか、思えば人生は刻々の、日々の、年ごとの選択でからくも生き継いでいる

(「上方芸能」誌発行人)

# 自選集

小島蘭幸

女にも妻にもなつて火を重ね  
紀国屋ピンラデインの童話集  
人妻を愛したことがない自信  
曲線美しくずれる時を待つ受胎  
梅の種かんで砕いている命

板尾岳人  
奥田みつ子

年金満額まで一年という長さ  
もう母は杖を忘れることもない  
炊飯器にこだわる父の手料理だ  
ハンバーガーにかぶりつくとき無であつた  
歳月や尾道の句碑弓削の句碑

八十田洞庵

亡き人のしきりに恋し五月闇  
バラよりもすみれに惹かれ街の隅  
目も舌もはんなり楽し京の膳  
生きるとや花も枯れ葉も流す川  
命ある句は出来たのか持ち時間

河井庸佑

どん底に若木が二本育つてる  
観光を当てこんだ寺青畳  
唇を嚙んで女まだ信じ  
バス来ない古寺にある侘と寂  
門閥も学閥も無くお人柄

両川洋々

反論を真摯に受けるのも器量  
無理をして体内時計狂い出す  
四分六を逆転させるフアイト見せ  
一步退き二歩前進を心掛け  
曖昧模糊見抜けなかつた自己嫌悪

川上大輪

善人を演じ切れずに春がゆく  
君のハートに春を吹き込むのは僕だ  
卒業は出口わたしに職が無い  
死に神がそつぽを向いた厄年よ  
闘病記ペンの先から春覗く

どう転んでも幸せの曲り角  
アルバイトらしい列から逸れる蟻  
ありがとうの代りペロツと舌を出し  
この道でいくつの夢を零したか  
まだ明けぬ東北の長い夜

木村 あきら

節水の宣伝カーがゆく暑さ  
裸婦像も汗をかきそう夏旱り

新鮮な花供へあり六地藏  
緑陰で雌雄を競う白と黒

底辺に棲んでも米はコシヒカリ

小西 雄々

生かされて今年も暑中見舞書く  
余震まだ続くゆらいでいる卵  
背伸びした唯物論に陽を仰ぐ  
頭陀袋からとりだした夢ひとつ  
余命には何時かわからぬ電池切れ

斉藤 磊

風に乗り祈り続ける花の種  
人間を癒してくれている青葉  
こっそりと追肥見事な花をつけ  
近付くと父の匂いのする木の芽  
ふるさとの小川流れてくる童話

塩満 敏

妻の庭朝顔幾つ咲いたやら  
夏に入り帰郷のプラン立てて見る  
東北の熊蟬達よどうしてる  
着々と鶴彬忌の準備する  
年頃の孫よ青春しなさいよ

新家 完司

ダッシュボードにデジカメと免許証  
「行つてきまーす!」瞬間にはぐれ雲  
時速百キロおにぎりを食いながら  
時速百キロごく稀に佳句生まれ  
アドレナリン沸騰時速百五十キロ

恒松 叮紅

散らかしているから猫に覗かれる  
人名の誤字情けない気にさせる  
後期高齢知恵の輪も錆びてくる  
ペン先の老化人にはわからない  
辞典にはないから新語困らせる

津守 柳伸

ありがとう鈴蘭ほつと癒し系  
君子蘭ながあつても咲き競う  
被災地に咲く水仙のご根性  
タンポポの健気瓦礫に活入れる  
胡蝶蘭ずらりセレブのすまし顔

遠山 可住

春夏秋冬花鳥風月過疎に老い  
ジャンケンで納得をする大勝負  
だまされた方が悪いのも世間  
一人寝の耳栓で聞く浪花節  
手も足も出ない自然へただ祈り

都倉求芽

行先の流れを信じ花筏  
輪の中のライバルに貰っているパウ  
化粧に夢中無防備な膝まだ降りず  
痛いところ今日は顔出す歳のまま  
智は知らず体力だけで生きている

土橋 螢

残像になった空気を吸っている  
しあわせの漬物石が重くなり  
新聞を折った兜がよく似合う  
愛をつけたタオル真っ白に洗う  
美しい心を抱いている緑

中原 諷人

お気に召す詩人となれぬ日が流れ  
要介助おだやか系の日暮らしに  
前に踏み出る歩行器と凭れ合う  
視界から弧を描いてゆく海の弦  
陽の当たる渚も夏の音になる

西出 楓 菜

善人の顔して食べる卵焼き  
ポランテアの若者みんな美男美女  
カルチャーに来る人十歳は若い  
三隣亡どこへ電話をしても留守  
枯れすすき唄いみじめさ倍にする

仁部 四郎

八十路きて「させていただく」寺社まいり  
ヒナ壇で「させていただく」カンニング  
頼まぬに「させていただく」店じまい  
それはもう「させていただく」新入社  
謝罪ショー「させていただく」不嫁さ

林 瑞枝

山並みを散歩ちちちと小鳥鳴く  
親友の優しさ耳に癒す疵  
温故知新千里の道も手を繋ぎ  
世渡りも平気で早い鶴の足  
濃い目の情で明日は昇ろうあかね雲

前 たもつ

半袖の園児見守る鯉のぼり  
薫風にシーベルトなど似合わない  
GW見るだけでしたあべのキタ  
仙台大会エールを送る五七五  
脱出の道は険しい大試験

政岡 未延子

それぞれを緑に染めて初夏の景  
花も人も呼吸が乱れる牡丹園  
葉ざくらになってゆつくり老いの足  
不揃いに見え和やか気にも夫婦なり  
嬉しいことに合わせるように雲晴れる

## 番傘川柳本社八月句会 (46回 水府忌)

日時 平成23年8月6日(土)  
 開場 17時30分 締切 18時30分  
 会場 大阪業業会館 TEL06-6768-4451  
 大阪市中央区谷町6-5-4  
 地下鉄谷町線・谷町6丁目・  
 4号出口を出て左  
 お話 「男の川柳・女の川柳」  
 森中恵美子  
 宿題・選ぶ 選者名 当日発表  
 ・海 大楠 紀子 選  
 ・迷惑(詠み込み不可)  
 菱木 誠 選  
 ・ガイド 足立 淑子 選  
 ・緑(えん) 村上 玄也 選  
 ・平和 住田英比古 選  
 各題2句 席題なし  
 会費 1000円

私と瓜二つですモンタージュ  
 DNA鑑定おそれいりやした  
 疑われました第一発見者  
 顔を写さぬ条件の目撃者  
 人間でなさそう犯人の足跡

咲くのち散るいのちも句のうち  
 風だけが返事をくれる行きづまり  
 働いた両手に残る友の数  
 転んではならぬ命の替えがない  
 年金とぎりぎり使い切る面子

宮西弥生

三宅保州

## 温故知新

『菊澤小松園遺句集』より

人間と暫し争う仁王の眼  
 雲流るいま物言えば嘘になる  
 生々流転どの石ころも丸うなり  
 生きていれば何とかなるさ雲流る  
 雑草の役目だ目立つてはならず  
 運はないされど聖書は手放さず  
 我を焼く煙はさぞやどす黒い  
 父という立場で座る真四角  
 簡単にあやまることも生きる手か  
 能面の涙は腹の中へ落ち  
 死の覚悟出来て命を大事がり  
 人は善好んで遅刻などしない  
 よく光る星をみんなが危ながり  
 筆とれば墨は明治の艶となる  
 草書では判らず行書で物足らず  
 起承転結筆に命のある如く  
 褒めてほめて相手を思う壺に入れ  
 言訳の中に組まれてゆく喜劇  
 顔の皺こころの皺に気がつかず  
 癖のない人で皆から忘れられ



西 出 楓 楽 選

大阪府 神野 千恵子

お年寄今日も元気に医者通り  
平均値越えた我が身の生きる価値  
拗れてもお酒が溶かす蟻り

奈良市 大久保 真澄

日本国日本人を感じた日  
震災のなかで希望の芽となる子  
ペランダで季節知らせる律儀な芽  
目から鼻口へと木の芽和えの妙  
人間に年季足らぬと言う化石  
羞恥心どこかに置いてきた戦後

河内長野市 松岡 篤

飽きる程飲んでゐるのに飽きん酒  
あれするなこれもするなと好かん医者  
たくましく昭和でもてた肉食系  
いい出来だ自賛しながら上手くなり  
お試しと言つてちゃっかり稼いでる  
厨房でサマになつてるお父さん

三田市 雑賀 一 泉

御破算と言つて持病を無くしたい  
百均に先ず寄つてからお買物  
カーナビを買わず隣の妻だのみ

政治家が着ても汚れぬ作業服  
けつたいな人とゴチャゴチャして暮らす  
単身赴任お客になつて帰る家  
姑の顔立てて不出来な嫁でいる  
好奇心疼き三猿にはなれず  
試食中煮ても焼いても食えぬ人

鳥取県 加賀田 志延

席立った用がすつぱり抜け落ちる  
どうしても覚えられない探し物  
横道へそれた講演目が覚める  
勧誘の腕を一旦褒めておく  
節電は身近な支援痛み分け  
食いばしる歯のあるうちは頑張りう

篠山市 藤井 美智子

名案が後でひらめきチャンス逃げ

下手ながら脳を育てる五七五

くそまじめ嘘も方便よう言わず

それぞれに持味楽しい孫四人

同じならにこにこしている方が得

気の弱さ治らぬままに古希へ来た

和歌山市 坂部 かずみ

エンドウ豆籠一杯の便り来る

花吹雪この世の春を享受する

ゆっくり出来ぬブロッコリーが花になる

一撃を食らい人間遣り直す

竹の子が覗く地球を確かめに

軽装でひと足先のエコライフ

鳥取県 大塚 美代子

良い夢を見たいと枕変えて見る

イケメンに出合った春の散歩道

たんぼぼの道を選んで遠回り

麦畑ピーチクひばりの子が騒ぐ

道草の花を片手のランドセル

大の字になって蓮華の花匂う

米子市 後藤 美恵子

わが街に水と緑があふれてる

森林浴若づくりして夏帽子

新緑のエキスを浴びて皺のびる

都会客もてなし庭の山菜で

晩酌をジャコ山椒が急き立てる

被災の児どこで過ごすか子どもの日

松江市 松浦 登志子

筆まめな人のメールと納得し

筍と木の芽が匂をつれてくる

認定のその時ばかりかくしゃくと

モーツァルト聴いた母の自己主張

メガネかけしげしげと見る預金帳

コラーゲン飲んでひと花咲かそうか

唐津市 北村 松風

夢を追う路上ライブの若き歌手

無料です湧く名水に列ができ

当選の暁バツ頭がたかい

満月がカーテン締める手を止める

屋台押す夫婦に光る七ツ星

期待さえせねば落胆せずにする

河内長野市 針生 和代

こんなにも爪跡残しゆく自然

母を子を探し求めている家族

大自然の中で人とは小さきもの

義援金送る事しか出来なくて

不器用を結び直して金婚譜

土の無い街で情緒が枯れてゆく

被災地の桜一際美しい

鳥取市 近藤 秋星

着のみ着のまま逃げた人のみ助かった  
木々緑竹でば緑に染まりそう

母の日は母は死んでも母である  
プライドが時々老いの邪魔をする

鳥取市 坂本 とも湖

残り花土台残して風に散り

半日を老母を筆談する絆

半日は老母の歴史を聞いてやり  
泥くさい汗にも夢は盛つてある

卒業をしても出口に職がない

鳥取市 松原 ひとみ

立ち位置がこつちならいい意見です

パーベキュー幸せの声駆け回る

お手頃な好物でよく皿に乗る

御利益は千段先の琴平さま

ごめんねと言えず後味苦くする

鳥取市 山口 千代子

軋んでも先祖譲りの城の良さ

生きていられるうちに災害ないように

人事と思つた私卒寿過ぎ

ヒラメキが風呂から出たら句が逃げた  
ハンケチ小銭住所を入れて散歩する

只今の声に安堵の暮しぶり

倉吉市 前田 喜美子

被災地に懸ける希望の虹の橋

回覧板そしてついでの話

どうですかまあまあですの合言葉  
うるさいと言われてみたい一人者

米子市 生田 寒之

バーチャルとリアル犇めく中に居る

霊柩車すれ違うたびに運が向く

吉野家とすき家が並び春迷う

三・一一思い掛けないバースデー

心配を時々させる親孝行

米子市 加藤 正二

頼まれたことほど忘れやはり年

年毎に知恵の在庫が目減りする

老いの足黄信号が追いたてる

年金に命預けて今日も生き

あれこれと気を回すから生きづらい

米子市 竹村 紀の治

別腹も一杯になる謝恩会

半額に悲鳴を上げる冷凍庫

雨の日は休めと憎い万歩計

夜になると澁刺とする虫を飼う

不養生チクリと痛む採血日

米子市 中原 章子

短冊に復興願い込めて吊る  
流水で洗い流して傷手当  
胃カメラに自信を貰い気が軽い  
餅を背に曾孫這い這いお金とる  
連休も早寝早起きお留守番

米子市 成田 公一

メールでは届かぬ心ペンで書く  
水中ならしてやるお姫様だっこ  
銭やれば金菌を見せる獅子頭  
キャンパスに溢れる笑顔おめでとう  
趣味すべて心の傷に効く薬

米子市 野川 宣子

駆け抜けてそして二幕目どう引こう  
憎しみを捨てて人間枯れていく  
泣いて笑って生きた証の深い皺  
助かった命大事に生きて欲しい  
大声の家に悪人出て来ない

米子市 見山 温子

うぐいすは日に日に上手ホーホケキョウ  
早春の便りが届く杉花粉  
気まぐれな春の便りに雪の花  
雰囲気の読めぬジョークに冷めていく  
母が笑うあふれるほどの皺をよせ

米子市 山本 ふみ子

ありのまま見せ合ってから気を遣い  
ぐちきいてくれる友には感謝する  
することもなく家に居て疲れてる  
羨望が私の心掻きまわす  
母の日の手料理まずいとは言えず

米子市 湯浅 久司

水溜り映った空を飛び越える  
原発が長いトンネルひた走る  
ころころと変る天気の天の邪鬼  
聞き流す言葉が胸に突き刺さる  
魚釣り見物人も浮きを見る

鳥取県 田口 清帆

大津波日本沈没みるおもい  
政権の不支持も津波押し流せ  
みな一期一会の人ぞ老いて行く  
雑踏にまぎれ自分を確かめる  
取れかけのボタン心に持ったまま

松江市 相見 柳歩

目が覚める仏陀の言葉かみしめる  
古傷も自分の歴史なでてやる  
左手の葉指からまずつかむ  
十兔追う者は半分くらい得る  
ポランティア仏に一步近づいた

松江市 藤井寿代

雲南市 福岡博利

わくわくはいつも左のポケットに  
イケメンの大きな背中釘付けに  
赤鬼も年には勝てず丸くなる  
髪を切る恋も男も切り捨てる  
くどくどとその気にさせるほめ殺し

松江市 山根邦代

美作市 小林妻子

優しさの滲みでている両陛下  
押し黙る海は素知らぬ顔でいる  
平泉明るい光射して来る  
夏物に変えれば気持ち軽くなる  
あちこちが騒ぎ出して七十五

雲南市 菅田かつ子

広島市 岸本清

日の丸で送った日もあり無人駅  
巢立つ日に涙ぐんでる鬼瓦  
うきうきとして居た頃のハイヒール  
姑の名でここんところは目をつむり  
こんなとき忘れたことにして平和

雲南市 武島ちよえ

竹原市 國實力

聞く耳を持って平和な風の中  
待合で言葉交わしてからの縁  
お婆さん他人に言われたくはない  
日と曜日忘れていても無事暮れる  
後戻り出来ぬこの道急がない

二人連れ病院通いちちろ鳴く  
息子から生きる力の本が来る  
老人会九十歳の帰還兵  
道の駅妻と二人の五月晴れ  
墨の香が今日の私を元気づけ

連休のない百姓で終わりそう  
長生きをするとみんなではめてくれ  
冷蔵庫もこわれる程も買ってくる  
土蔵には昔ばかりが詰まってる  
ご馳走を食べて長生きせぬ積り

ボクサーの睨みを利かす名演技  
シャンブーの泡が歳ごと減ってくる  
アイライン人相までも変えさせる  
土足猫潔癖症に御法度だ  
天災に人知の無力思い知る

十五度前傾八十三の誕生日  
新婚の誓いに時効ないらしい  
子の臍をかじらずこの世終りたい  
綺麗だねウンきれいだね霊柩車  
自動ドア噂自由に出入する

竹原市 若年 幸子

大洲市 花岡 順子

蕨筍子等なつかしの笑顔あり

春の鬱友と分け合う花吹雪

遠慮ない音痴を聞くは野良の猫

森林浴若葉マークを着けに行く

遊びたい私引張る庭の草

竹原市 土井 輝 恵

紙マスク遣い捨てには出来ません

法要で夫婦喧嘩の話等

欲しかった本母の日にありがとう

来年の春は自立の特訓中

ポイントは二倍値札は二割高

阿波市 三浦 千津子

たんぼぼの笑顔に弾む万歩計

道草がとっても好きな春の靴

逝くまでは女でいたい難遊び

本音まで言わしてしまふ乗せ上手

売り言葉柳に風と受け流す

四国中央市 篠原 久

見慣れない顔だあなたは深海魚

遠回りしても愚直は捨てられず

口げんか勝負は妻が知って居る

穴あきのジーパン装うのも若さ

同県のよしみうちとけ合う足湯

言い訳をしないぶつきらぼうが好き

こぼれ種夢を育てているジョウロ

苦も楽も今子育ての真つ盛り

本当の敵は私の怠け癖

心の中に母の残したメモがある

今治市 渡邊 伊津志

あほらしいので叱られもせず笑い

節度ある速度で機械畳縫う

世渡りの一つに酒の飲み上手

魂が装填された筆の跡

句心は秋思そのもの頁繰る

香南市 桑名 孝雄

節電なら冷夏豊作なら猛暑

書齋などいらぬごろ寝ですむ読書

かすみ草行書A型らしく生き

免許更新さあてどこまでいけるやら

薄墨で寂しいだろなのう硯

北九州市 小松 紀子

家族旅行末期の夫とお花見を

桜吹雪末期の夫とどぶらせた

宝もの最期にくれたラブレター

苦勞は肥やしにしました七十路

生きることコッコッ努力だと思ふ

福岡県 本田 さくら

黄砂舞う満州に居た亡父をふと

芝桜畑いっぱい幸を蒔く

金せん花亡母の匂いを連れて咲く

山吹の花が道灌誘い出す

いらついた心癒やしてくれるバラ

山鹿市 米加田 恭代

耐えるより立ち向かってく方が好き

幸せは無い物ねだりやめた時

失つてはじめてわかる好きだった

必要とされているから頑張れる

死ぬときに後悔しないためのうそ

シドニー 坂上 のり子

チエルノブイリ他所事だったはずなのに

輸入禁止先ず味噌しょう油買い足そう

お気の毒と言いつつ遠ざける和食

今日も晴れ洗濯干せる幸せよ

ほとぼしる湯の出る家のありがたさ

札幌市 佐藤 登美子

被災地へ物見遊山の得手勝手

天災人災神のお灸がきき過ぎる

花粉症花の香りもうすぐ鼻

政界のドンへごますり出世欲  
フライパン喜怒哀楽を裏返す

弘前市 稲見 則彦

被災地に復興願う鯉のぼり

百年食堂 津軽の風が味をつけ

腐れ縁まだ断ち切れぬ影法師

子の手品驚くふりも一苦労

大型連休疲れましたと影の声

弘前市 高橋 洋子

ぱったりと疎遠になった人のなぞ

杖よりもステッキとよぶ粹な人

脳トレは孫のお下り歯が立たず

人間で残酷だなあ躍り食い

てんこ盛り上げ底でした 駅弁当

弘前市 高森 一吞

歯科内科曜日で走るポンコツ車

酒好きな主治医が酒をよせと言う

震災を癒してくれる観桜会

鎮魂の読経ガレキに祈する

静まらぬ原発事故の後遺症

塩竈市 木田 比呂朗

ネクタイの吐息聞こえるクールビズ

定年の延長戦か震災後

我が家でも補正予算を協議中

引き算の無い電卓が欲しくなる  
晩酌の口実にする愚痴吐息

東京都 井上 つよし

船をビルに登らせ嗟う大鯰  
お粗末な政治主導に春寒し  
学者政治家想定外の不勉強  
三・一一良きものと知るおともだち  
知事選に息子の様な当選者

東京都 高岡 弥生

凄じ揺れ3・11は忘れない  
次は来る東海地震覚悟決め  
進化する地球と共に生きていく  
献立をたまには誰か考えて  
ありのまま子供受け止め成長し

昭島市 野口 忠

みちのくへ思いやり連れボランティア  
震災が増税論を連れてくる  
樹木医の株は青葉が出て上がる  
通勤の道でスキップ夏木立  
先輩の忠告辞めてから分る

日野市 大竹 一良

被災者が教えてくれた強い意志  
花見席一升瓶がそつとあり  
新緑に春めどす志  
天災が人の心を一にして  
葉桜に生き抜く力槌の音

横浜市 巖田 かず枝

宮参り人生行路デビューする  
バス友が今日も乗ってて安堵する  
バス友の年も名前も知りません  
イケメンが今イケメンで平和です  
風邪の菌どうも私が好きらしい

富山市 有澤 嘉晃

キッチンにも神様がいると妻に言う  
今日は亀明日は兎になって生き  
走るだけなのにマラソン見飽きない  
スカイツリー子育ての目で見ています  
妥協して歩き夫婦として歩く

岐阜市 平野 あずま

ほんのりと酔って菩薩の相となる  
生き様を刻む十年日記帳  
古びたる鍬光らせて土に生き  
四季通じ旬を演じるハウスもの  
新聞で先ず確める日と曜日

静岡市 渡辺 芳子

招待で着物選びに花が咲く(孫結婚 5旬)  
人前でパールを上げてキスをする  
手をつなぐ事さえなかったその昔  
私もあんなドレスを着たかった  
父親の涙の謝辞で宴終る

江南市 脇田雅美

ダイエツトからだに合わせ歩く日々

四季通じ我が家の花壇色深し

ひと呼吸おいて相手の出方待つ

降りた駅子供と妻が待っている

ストレスをやりわり解すクリニツク

豊橋市 藤田千秋

おどり食い胃からきこえる断末魔

悪人が悪党面と限らない

柵に負けて曲がった方向舵

場違いの拍手が余韻拭い去る

思ひ出をすこし薄めて黄昏れる

京都市 清水英旺

張り替えた障子に希望の光さす

男の料理一品極め妻孝行

国難に何が出来よう不甲斐なし

三途の川に瀬もあり洩もあるそうな

身も心も虫干しをする五月晴れ

大阪市 安藤なつこ

くじけるな白寿の女の命文

楽しめと命の切符渡される

命ある限り美しいもの見よう

全身で全霊かけてネコの恋

グチを言う代りに感謝言ってみる

大阪市 太田としお

仰山の中で選んだ妻でした

人間を辞めたい時があるのです

人生観は顔に出るからおもしろい

情報通知りすぎていて不幸なり

高望みして転ぶこと多くあり

大阪市 小林 杖香

シヨツクから立ち直るには旅がいい

思案して踏み止まらず一歩出る

裂け目から愛洩れぬよう手をかざす

上品に言えばみんなおちよほ口

母の声みんな仲よく肝に置く

大阪市 高杉 力

脂身を包み隠したセール肉

円高を享受香港ニキユツパ

遊ぼうよ倍ほど生きる訳じやなし

マンシヨンの役員決めるあみだくじ

不器用を売り物にするしたたかさ

大阪市 西川 更紗

思いみな口に出したい一人言

張り合える友が居るから頑張れる

友のアドバイスは有難く感謝

わたくしを貧乏神がつけ狙い

病院の梯子たのしくバスを待つ

大阪市 前川善之

泉佐野市 稲葉洋

被災地のツバメに戻る家がない  
復興は日本力を示すとき

花見酒今年は遠慮がちに酌む

交付金もらったことを悔やむ町

健康法色々教えられ迷う

大阪市 吉川弘泰

乱れ打ち若者集め祭の夜

祇園さん鱧の洗いに冷やの酒

大輪に煌めく花火天神さん

山車の上若者踊る鉾ばやし

震災でクーラー使えぬ燃える夏

大阪市 吉田知之

政界は今日は盟友明日は敵

見得張ってすたすた歩きけつまずく

卒寿過ぎ妻と何処まで行けるやら

著名人相次ぐ他界昭和去る

羅針盤なくても戻る燕たち

池田市 上山堅坊

被災地を照らす朝日は凄かろう

被災地へお好み焼きを上げたいな

飲もうかと誘う気配はピンと来る

無理矢理に笑顔をつくる悔しい日

静電気中和している縄のれん

神の火も一つ違えば魔手となり  
未曾有って言えば免罪符になるか  
運命と悟るに恨み深すぎる

八十路坂苦楽の関を幾つ越え

道草も活かして老いの昨日今日

泉大津市 助川和美

青汁より酒で長生きしたいもの

高い服見え見えの見栄クラス会

戦争を知らぬ子が知る放射能

赤い服似合う母さん元気です

感謝状生きてる内に欲しいもの

柏原市 森吉留里恵

子が巣立ち小さくなったゴミ袋

常夜灯小さくつけて母の基地

ペンダコの固さを友と比べ合う

野の花に自然体でと教えられ

儘ならぬ命の重さとおしむ

河内長野市 梶原弘光

体重計乗ればとつさに息を止め

風評と言う化け物に苛められ

切れ目なく花粉黄砂に放射線

若者の跳躍力に賭けて見た

身の程という目盛り見ずジャンプする

河内長野市 木見谷 孝代

一家に一人にらみを効かす人が要る

実えんどうカラスに選つて食べられる

花束を包むやさしさかすみ草

言い分けをしない夫の方が勝ち

イケメンの子がいつの間に育メンに

河内長野市 谷 久美子

癌告知医師の言葉が突き刺さる

八時間家族が耐えた控え室

百度踏む母の祈りが通じた日

気持良く手足が伸びる仕舞い風呂

古き良き昭和が遠くなる地デジ

河内長野市 辻 村 ヒロ

反抗期背中を向けて返事する

甘い水呑んだ国技が叩かれる

半坪に四季を咲かせる母の庭

球根がもういいかいと地下で待つ

長寿など気にしないわとサプリ飲む

河内長野市 山 室 光 弘

痛くない腹を嫌みが又さぐる

衰えは手足と頭口以外

円卓で四角四面の会話する

隠れてた本音を酔いがつれてくる

浪費して脱原発を叫ぶ人

岸和田市 中 岡 香代

食欲を削ぎ取りたい更年期

横道に逸れる先生面白い

草むしり草の命もナンマイダ

眠れずに悩む朝には忘れてる

コンビニで生活できる都合よさ

岸和田市 増 田 隆 昭

健診の数値を下げた万歩計

要らぬこと言ってしまった自己嫌悪

お悔やみの手紙書き終え手を合わす

ピルの影見て方角を知る都心

古アルバム見ながら参加クラス会

堺市 近 藤 治 子

一日が早く感じた今日はまる

ありがとう言われ疲れが溶けてゆく

ダイエット今日はオフですバイキング

もともとと欲が顔出すバイキング

プーイング度胸を決めて受けてたつ

堺市 澤 井 敏 治

頑張れというしか能のないわたし

世界からエールが届く負けるなど

耳に舐舐できる話を聞く余裕

余裕ないから笑ったような顔しとく

毎日が休み言うのもちと辛い

堺市 内藤 憲彦

お願いがある時だけの両握手  
想定外生温かつただけである  
熱弁を振っているが嘘ばかり  
幸せはあの山でなくここに有る  
種のまま終るもんかと土を出る

堺市 羽田野 洋介

転んでも軟着陸で大過なく  
もういいかなそつと時計を確かめる  
ほんやりとつぶすに惜しいたまの暇  
クラス会母校の歴史蘇る  
夢だけは老いることなく喜寿迎え

吹田市 藏 田 光子

硯石心ひき締め筆を持つ  
お地藏さんまた新しいよだれ掛け  
石だたみ疲れますねとスニーカー  
つい覗く宝石店のウインドウ  
プライドは忘れて皆の輪の中へ

吹田市 二宮 栄子

子等帰り一人ぼっちの日にもどる  
胸底に開けてはならぬ窓がある  
病室に四人四色のドラマあり  
退院に空の青さが目にしみる  
義母手本まあるくなつて逝くつもり

高槻市 島 田 千鶴子

国難にせめて節電しています  
雑草に生きのびる術問うてみる  
老大国おとき話が目を覚ます  
営みを消された村にみどり萌え  
この先は無題で生きる事にする

高槻市 初代 正彦

ぶどう糖疲れた脳に活を入れ  
やりなはれ友のお酒に背を押され  
スーパードあれこれ買った妻の留守  
食べ過ぎとベルトの穴に叱られる  
無口でも酔いがまわると名調子

高槻市 田 中 由美子

笑い皺ふえて長寿の和に融ける  
アスファルト重量上げて草の勝ち  
寂しさの量だけ払う電話代  
寝る前にあしたも笑うネジを巻く  
酒たばこやめて長生きしてもなあ

豊中市 荒 巻 夢

泥をつきタンポ顔を覗かせる  
夢絶たれ泥にまみれたランドセル  
被災地に思いを馳せて聞く予報  
どう生きる問い迫り来る原発禍  
最後にはただ祈るのみ大津波

富田林市 山野寿之

頷いただけで荒波押し寄せる  
手が逸れた手毬は夢が掴めない  
愛ひとつ方程式が解けぬまま  
ふる里は津波がみんな連れてつた  
空白の青春時代火の匂い

寝屋川市 岡本勲

独りごとばあちゃん猫に話しかけ  
人気者にも松竹梅があると知り  
あの頃に突然もどる妻の愚痴  
花も実も枯れた二人が手をつなぐ  
のんびりと行くと決めてる我が余生

箕面市 寺井柳童

再建へ小さな一步ランドセル  
震災の都度思い出すポラントピア  
皇后の手にしつかりと黄水仙  
訥弁いらいらさせる名司会  
復興へ頑張れエール国あげて

八尾市 赤木妙子

被災地に届けとばかり花吹雪  
花見客静かに酒を汲み交わす  
耐えながら繋ぐ手を手に血が通う  
逆立ちしても番茶も出花とはいかぬ  
それなりに満ちたりた顔美人の湯

八尾市 山根妙子

ペランダの雀と話す玻璃戸越し  
CMに誘われ豌豆ごはん炊く  
新装のデパート親も迷子です  
乗り過ごし見られたように肩すくめ  
原発の知識を知って得た不安

大阪府 坂口公子

雑草まではしゃぎ出したり初夏の候  
あの日あの時ああだったなアと言うセンチ  
百までは行きつけそうと打つメール  
肝心な事は任して居ます娘や孫に  
啜われてもちよつとよう捨てない衣類

神戸市 木村忠義

新緑がくすりのように目を癒す  
鬱の字は見ても書いても鬱になる  
喜怒哀楽個々の字にその表情が  
義理事がだんだん減って老いを知る  
ありがとうございましたの増える老い

神戸市 輿水弘

妻にでも話せないこと二つ三つ  
食べ残しするなど叱る亡母想う  
子供には何も残さず逝くつもり  
にぎり飯伝わる温みありがとう  
打ち水の湿りに香る亡妻の花

神戸市 白川 淑子

復興の祈りイマジン時を越え  
来て欲しい花咲爺さん被災地へ  
好奇心胸の振り子が動き出す  
七十路をお年寄りとは言わせない  
川柳のピント本音をあぶり出す

神戸市 新保 登美子

明けぬ夜はないと耐えてる闇の中  
踏み出した一歩で揺れている決意  
水やりをすれば振り出す憎い雨  
うたた寝のように止まったオルゴール  
思い出し笑いこらえている窓辺

神戸市 山根 弘子

秘密ばれ孤独になってゆくわたし  
アルバムに笑顔残して友は逝き  
打ち解けず悲しみ残るちぎれ雲  
ここ一番やはり男の意地を見せ  
サクラサク電話の声もトーン上げ

尼崎市 市坪 武臣

切り取り線活用すれば光る趣味  
親鸞を漫画の本で読み直す  
相合傘なぜか僕だけびしょ濡れに  
僕の子想やっぱり当たり小気味よい  
路地裏の茶店友との秘密基地

尼崎市 田原 一兆

定年と言えども惜しい顔ならば  
遠いからこの言い訳で不義理する  
枯れてなお終きつく指を刺す  
持ち慣れぬ花束あやすいかつい手  
泣き言は国を出るとき置いてきた

加東市 安達 厚

不器用でへそくりなんか出来ません  
八十路きて昔の事を悔んでる  
生きているだけでも快拳八十路ゆく  
老いてなお明日を考え生きている  
猫ざらい猫も嫌いと逃げてゆく

篠山市 石田 久子

詐欺の手を次から次へと思いつき  
空缶が行ったり来たりバスの中  
散歩中浮かんだいい匂着けば消え  
屑籠に丸めた紙を又さがす  
墓石に報告に来る子の出世

篠山市 酒井 真由

傷ついたところへレモン一雫  
吊り橋を渡り意中の人が来る  
語り合う仲間と地酒あればよい  
韓流ドラマ佳境コマーシャルが邪魔  
かたくりの花は佳人によく似合う

篠山市 沢山啓子

兵庫県 上田ひとみ

藤の花添えて山菜お隣へ  
十字路は花の標へウインカー  
裏表無いまま沈む角砂糖  
大吉運ついにイケメン孫登場  
貧しさを隠す指輪がきつくなる

篠山市 谷田多美子

奈良市 前田弘恵

落煮ても筍煮ても亡母の味  
大正と昭和の眠る小引出し  
来世も子孫曾孫と暮らしたい  
絵手紙を折鶴にして被災地へ  
黄砂降る黄砂の向う気にかかる

宝塚市 丸山孔一

奈良市 矢野良一

カード増えポイント何がどれのやら  
非常食賞味期限が過ぎたまま  
田の蛙TPPを案じ出し  
蚊が言うた葉混ざりの血がまずい  
雨も良したまにはじつと我思う

西宮市 泉水牙子

和歌山市 磯部義雄

お笑いへいまいち乗ってこぬ気分  
見ただけでお腹をこわしそうユッケ  
日常がこんなに脆い津波跡  
今だれが総理なつても叩かれる  
東北を小松左京はどう描く

雨しきり言い訳ばかり考えて  
こんな時明るい方へ行つてみる  
君のこととつと知ろうと浮上する  
本音なら鞆の隅に置いておく  
よく笑うあなたとよく眠る私  
法要に正座崩さぬ足褒める  
親娘旅背を流し合う至福どき  
親よりも大きな子の背を流す  
笑い皺大きな顔で人に見せ  
微笑みを受けて和らぐ初対面  
見え見えのおべんちやらでもいい気分  
付き合いが良すぎていつも午前様  
ゆる鉄で至福にふれる独り旅  
風物詩と言つてられない魔の黄砂  
山里に昔を偲ぶ暮煙立つ

妻となら死んでもいいと言いつれぬ  
遅すぎた汚染原発まずい処理  
非常食猫も杓子も買っている  
ワンコイン妻が差し出すおこづかい  
ありがたやまた期限切れ非常食

和歌山市 福井 菜摘

定位位置でのんびり暮らすダンゴ虫  
笛太鼓日本の心鳴りひびく  
波被る覚悟の眉を凜と描く  
ライバルに見せる尻尾はスマートに  
ノーマイク今日は私の休演日

岩出市 藤原 ほか

ふつふつと溢れる思い詩にする  
ほとばしる汗に至福の時を知る  
決断ができずに心揺れている  
まあまあでいいよと言われ深呼吸  
廃坑の街にも初夏の光射す

海南市 小谷 小雪

生傷はそつとしておくのが礼儀  
節電に二割カットの電気料  
それなりに古自転車も風を切る  
寒と暖薄いベストの微調整  
花よりも葉桜が好きほつとする

紀の川市 宇野 幹子

一步引く心が返し針にある  
ポケットの拳が明日の夢を抱く  
反抗期不意に遮断機降りてくる  
振り向けば鬼に似ていた影法師  
梵鐘の余韻心の棘を抜く

紀の川市 北山 絹子

山彦が緑の風に乗ってくる  
節くれの指にも自尊心がある  
子が巢立ち時の流れが早くなる  
土出した土器に時代の顔がある  
百度石踏んで祈りがまだ続く

紀の川市 辻内 次根

白い雲昔の夢が乗っている  
疲れたと言わないように一呼吸  
幸せと思うひと時花疲れ  
目が冴えて明日の手順を組み立てる  
最小の単位は同じ屋根の下

橋本市 石田 隆彦

ほめことば一番好きな人の耳  
今日の汗ふわりと包む風呂の湯気  
体重が邪魔して出来ぬ逆上り  
バランスについつい嘘もこぼれ出る  
四十五度目で探り合う打者と捕手

和歌山県 森下 よりこ

ご近所で年上の人指を折る  
思い出の心つないでくれる歌  
噛み付き亀とあだながついたおばあちゃん  
無罪放免雨が降るので寝ています  
私なりの田舎ぐらしの処世術

出雲市 黒目英男

渋滞に思案投げ首疲れ出る  
意味深で一人善がりの遠花火  
山並が黄砂でかすむ五月晴れ  
野菜苗ところ狭しと並べられ

松江市 錦織禮子

美辞麗句少しはあつて有り難い  
くどくどは楽しい席に似合わない  
拝啓の文字もでっかい熱血漢  
春の陽が園児に散歩誘つて

竹原市 六田半徳

携帯で写真撮り方孫に請い  
どうしたの昼日中から酒飲んで  
小半時昼寝でやつと疲れ取れ  
生肉のあいまい基準命取り

宇部市 高山清子

人の道札束邪魔し踏みはずす  
連休でパパ仕事よりクツクタク  
最悪の事態は言わぬ責任者  
名前だけ貸して難儀な役が来る

福岡県 豊田愛

無駄骨をやめておいでと娘のメール  
胸の刺抜きに茶のみの友が来る  
誰にでも好かれる四季の花咲かす  
頑張りが介護の支援はずされた

唐津市 岩崎實

立夏です気象庁よりご案内  
三冊の植物図鑑ワレモコウ  
隣の児草刈る吾をマンガにし  
もらい物非売品とて棚飾り

唐津市 吉富節子

久し振り洗車したのに黄砂攻め  
金ないと睨みもきかず寄りつかず  
わが余生柳句と苦楽共にする  
学歴を聞いて見る目が変化する

山鹿市 三谷たん吉

この国が無法地帯となる予感  
何もかも三流以下だこの国は  
どこ行けば探す出口にぶつかるか  
喜寿迎え他人の話しに耳かさず

メルボルン 藤原ポン吉

耐えに耐え国をつくるは瓦礫の子  
節電の対策実施母昼寝  
被曝した政府はすでにメルトダウン  
マイククロやミリで測れる政治力

福島県 七ツ森客山

放射線降つて花に蝶が舞う  
弛んでる蛇口のように漏れる愚痴  
立ち退けと有無を言わせぬ放射線  
月明り姉が沈んだ海照らす

佐渡市 高野不二

今日は来る会誌朝から待つている

相統税変るそうだと無関心

電池切れやっぱり頼る広辞苑

ケイタイを借りて習った使い方

八幡市 今井万紗子

咲くまではゆっくり待とう反抗期

お花見にうかれ上手が一人いる

くちはしが黄色いうちは黙るとき

雲間から恋のうわさが風にのり

大阪市 浅井公平

夫婦とは近くて遠いそれもよし

バス時刻だんご運転客は泣く

震度九聞いただけでも腰抜けた

死にみやげ川柳だけをもって行く

大阪市 笠嶋惠美

新しいカバンに詰める計画書

テレビから枝垂桜がおいでする

三婆に自分重ねて見る喜劇

厄落し五月人形出し飾る

大阪市 平井露芳

厚化粧せんでも結構きれいのに

星三つ昔は上等兵だった

テパートは手っ取り早いウォーキング

自然には勝てぬ悲しい想定外

大阪市 松田 聰

中尊寺被災にめげぬたたずまい

大震災日本の力ためされる

一瞬の津波に散った無念さよ

世界中の温い心を知りました

河内長野市 内海綾乃

後何回見られるだろう桜待つ

八重桜花弁重くて下を向く

弁天池噴水の音ひびいてる

冬眠からさめ亀がのんびり日光浴

河内長野市 木太久正一

竹藪にウグイスの声散歩道

四枚切りやっぱり少し重すぎる

妻よりは先に死ねない理由があり

この町に住んでよかった水清き

河内長野市 八木加修子

もてなしの新茶にいやす旅疲れ

あの世ともこの世ともなく蓮開く

君が代を素直に歌い卒業す

ビー玉が転がっていく安普請

河内長野市 山本エミ

四畳半隅のホコリに陽が届き

転んだら涙流した膝小僧

幸せを運んでくれた軽い風

座布団四角丸い心が正座する

岸和田市 藤原 昭

原発は人が背負った罪と知る  
自然と一緒だから優しい日本人  
アナログで神デジタルで進化論  
仙人もオヤジも同じ夢を見る

堺市 増田 和幸

世界から称讃うけた被災者だ  
原発に想定外とはそりあないよ  
ポランテア日本の未来明るいよ  
大津浪なかつたように桜咲き

豊中市 石橋 優明

音のせぬウォークマンに耳すます  
芝居はね魂抜けた木偶二つ  
口角を上げるも女ほほえまず  
崖のさわバランスとってケンケンパッ

豊中市 貝塚 正子

ヒゲ面にとつても似合うイヤリング  
再会でいつしか溶けたわだかまり  
ほけぬよにわざと意地悪しています  
つきあてても捨てられぬこの一着

豊中市 源田 啓生

デジカメに今年の夏を撮りに出る  
温泉の粉を入れても家庭風呂  
気に障る話ジョークと告げておく  
行き来せぬ友と昼間の長電話

富田林市 関 よしみ

玄関に揃えた靴に見る躰  
梅雨明けを日傘とわたし待ち望む  
つば広の帽子選んで夏の音  
空蟬の声きく刻に哀と楽

寝屋川市 小谷 滋彦

春球音ルルンの域無限大  
自粛解きみちのくの酒足して飲む  
飲む友の耳朵にほんのり艶をみる  
念入りに儀打ころがして今がある

羽曳野市 磯本 洋一

青葉濡れ夕立土産のピース玉  
桜散り俺の出番と山つつじ  
電話鳴る墓地の案内今日も又  
旅をする何時もの連れは赤い杖

羽曳野市 宇都宮 ちづる

時差ボケの頭は宙に浮いている  
イギリスで見つけた義援金の箱  
庭の花咲き揃い待つ春の留守  
百均は安いと言って無駄も買ひ

羽曳野市 安本 美喜

この暑さ凶器と化して熱中症  
向日葵や球児一途に球を追う  
働くも生きるも死ぬもみんないや  
額縁も箱も値打ちと骨董屋

東大阪市 西田 いくひろ

母の日はケーキで感謝しています  
時間内に収めて司会ほつとする  
塾通いする子に母はパートする  
売り込みの電話と知って通話切る

枚方市 小川 良吉

震災で賢治の詩がよみがえる  
震災で生命の不思議祈るだけ  
とむらつた鯉の生命みすゞの詩  
傘寿超え愚かさ重ねまだ生きる

枚方市 河田 洋子

花粉症食事支度も苦勞する  
雨の日はほつとしてます花粉症  
古希過ぎてまだこれからの夢がある  
お誘いがあればこれから何処へでも

枚方市 坂本 ミヨノ

野菜汁まずいが飲んで白寿まで  
パツと散る葉さくら残るもう八十路  
若者のメニューが変る外来語  
長寿の輪笑顔で歌う人気者

八尾市 田邊 浩三

花見の日初の大役場所取りに  
耐えたのはあたしオレだと孫を抱く  
子らも来ぬ里に今年もツバメ来る  
上げ幅がそろそろ覗く消費税

八尾市 前田 紀雄

明るいニュース英国のウエディング  
今年のメーデー復興の字が躍る  
目に見えず音も聞こえぬ放射能  
夏野菜微風吹いて燥いでる

大阪府 小栢 こずえ

散歩して脳に酸素を送りこむ  
子は巢立ち増築の部屋空いてます  
草も木も芽吹く音して峽動く  
大家族とりどり干して夏が来る

大阪府 高木 道子

財布の鈴足らん足らんと喚く日々  
大腸菌O111も角を出す  
古き良き昭和へしがみ付くハート  
ゆっくりと喋れば通じる日本語

大阪府 西川 冷子

下駄箱の真ん中にいるスニーカー  
風薫る夏苗植えて雨を待つ  
さ緑に化粧直して藤の花  
蒸気霧山ひだ包み這い登る

大阪府 畑中 節子

揚羽舞う機械じかけのごとく浮く  
忘れずに巢作り楽しむ燕つばき  
土筆摘み一人の夕餉豊かにす  
庭の草ひと雨ごとに背伸びする

大阪府 若月祐作

与野党のかけひき競う気が知れぬ

大震災気持ちを込めて義援金

花を愛で歌をうたって春の風

足腰にもつと歩けと風が押す

尼崎市 小池幸子

お節介助け舟をと早合点

羞恥心衰え気付く八十路坂

身の危険老いには勝てぬ杖をつく

蟠り捨てて明日の彩を選ぶ

加東市 岩本美緒子

髪カット娘がしてくれる儲けもの

トリートメントグレイのお洒落わたし髪

シヨッピン娘にメモ渡し付いて行く

まだ画ける脚は脆いが手は自在

加東市 黒崎美紗子

咲いた梅実るたのしみ待っている

表彰の思い出のこる晴れの席

温もりを深くうけとめ感謝する

母の日のおもいやりかな届く品

川西市 日野岡和之

泣き笑い合わせて暮し支え合い

ご破算を何度重ねて古希の坂

時として呆けと叡智を使い分け

仰ぎ見る被災の桜重い胸

篠山市 永井かほる

今年こそ思う菜園頑張れる

この雨で野菜も草もぐつと伸び

年をとる程なつかしいクラス会

叱られた思い出楽しクラス会

三田市 尾崎一子

風さやかフツフツと湧く好奇心

晩学で笑顔授かる残り福

被災地へ神の手宿るボランティア

大震災生きる厳しさ人の価値

三田市 辻開子

なにもかも平均でよい元気なら

いざ本番人の字のんで客の前

涙腺のゆるさ亡母似で善し悪し

年月が介護疲れを重くする

西宮市 株元玲子

悲しみも花の色香に諭される

ニュース見て涙の数はとめどなく

しなやかな心意気胸がキュンとなり

情の花寒い心を包み込む

三木市 山口久子

杖ついてやつと歩けた記念の日

同病が枕ならべて慰める

寝たつきり五体働かず口達者

点滴の痛さ動けぬつらさです

奈良市 尾畑 なを江

つつましいシンブルライフ板につき

内緒事あつて存在感も増す

雲水の素足にまとう桜花

心にもないこと言わぬ儀儀者

奈良県 谷川 憲

家電品壊れ出したら皆壊れ

GPSは妻の手綱と心得る

淡色に染め鎮魂の桜花

ロボットが休みをくれと言い出した

和歌山市 土屋 起世子

おもいきり好きなことした昭和っ子

同じように育て個性のある進路

願望の悪女になれぬ孫見てる

へそくりはもう止めました一人住む

岩出市 村中 悦男

余生なら楽しみながら積む積木

前向いて歩けば過去が消えて行く

引き落とし吸い上げられて行く怖さ

愛煙家遠慮しがちにうまそうに

田辺市 大峠 可動

人の世の無情西日に落ちてゆく

切り捨て御免運命線に罪いくつ

天の意のまま風の意のまま鬼ごっこ

追伸のように余震がまだ続く

鳥取市 大前 安子

ごぞを敷き家族ごっこの昔今

初夏近い不揃いの苗個性出る

こいのほり風に合わせた泳ぎ方

空返事まずいと気付く苦いお茶

鳥取市 津村 律子

買物かごに露や竹の子旬を盛る

買う物を控えて出たに買い忘れ

一発で家計簿合っつていいお風呂

いい知らせ兎年の子五人です

倉吉市 藤井 美津恵

招かざる黄砂はるばる飛んでくる

どっこいしょ同じ言葉の同級生

朝起きの早いすずめに目を覚ます

山藤が咲いて色どる初夏の色

境港市 中井 虎尾

昭和せひ思い出して昭和の日

蜜もとめ花から花へ渡り蝶

コンビニで目をキョロキョロと昼ごはん

原発は民には言えぬ恐さあり

米子市 小塩 智加恵

深呼吸して震災の写経書く

同窓会それぞれ悩み胸に抱き

子や孫と洋食コース昭和の日

ダイヤアナの面影をみるウイリアム

米子市 後藤 宏之

四苦八苦ほめるところがみつからぬ  
悪口をわざと聞こえるように言い  
恵まれている方がなとがまんする  
上みたらきりが無いぞと子をさとす

米子市 田村 周子

川柳の友と笑えば若がり  
生きる力子供の元気みてみんさい  
新緑が芽ぶいてくれば山が呼ぶ  
水一滴粗末に出来ぬ震災だ

鳥取県 飯野 菖子

待っていた過疎の村にも桜咲く  
宇宙行きキップ手にするまで生きる  
被災地の暮らしが浮かぶ寒い春  
春の陽が奇妙に心ゆすります

鳥取県 岡村 孝明

健康になれよとチラシ今日もくる  
雪が去りそして山やま大笑い  
手入れた花園心洗われる  
本堂にお経の満ちて極楽へ

鳥取県 下田 茂登子

八十路来て親の権威をまだ揮う  
怒鳴ること再々あって八十路坂  
年金日待っているのはおばあさん  
六十年暮らして夫婦まだ揉める

鳥取県 橋谷 静江

母の日へ花が私の部屋を攻め  
約束をカレンダーにも書き忘れ  
良い曲だトイレの神の歌が好き  
励ましていた人今は励まされ



(つづき)

鳥根県 伊藤 寿美

淋しくて胸の空気を入れ換える  
片隅に咲きひたむきに生きてゆく  
わたくしの射程に夕陽の湖がある  
力にもなれず一緒に泣いただけ  
汚染の街で相馬野馬追唄消える

### 第125回 大阪川柳の会

日時 8月1日(月)午後5時開場 午後6時締切  
会場 ホテルコムズ大阪 地下1階 アーバンホール  
宿題と △花 火・矢沢 和女 △朝 ・天根 夢草  
選者 △和 式・北野 哲男 △空 氣・磯野いさむ  
各題二句。席題はありません

会費 千円 欠席投句7月30日まで 本田 智彦 宛  
〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4 706  
電話 06・63303・7297

# 麻生路郎句抄

(句集『旅人とその後の作品』から)

不死鳥

旅つれづれ

山中温泉にて  
だしぬけに鐘の鳴るのも旅のこと

緑丸にて別府に向ふ

船を忘れるほど人妻の帯赤く  
人の世の船も別府へまではつき

旅愁

遠く来てあらしの窓に子を思ひ

宿の二階今来た船の腹を見せ

朝霧の中を出て来た旅の人

一人旅流れるように立ってゆく

亀の井にて

みち足れる人へあふれる別府の湯

大和飛鳥にて

あすか川これかと思ふ川の幅

久方のその香久山の小さすぎ

むかしむかし明日香にちりし桜散る

南紀田辺

田辺節二燈一線で船がつき

五明樓まだ揺れている気で泊まり

宝塚

旧温泉指さすだけで引きかへし

長谷寺

一匣べったり白粉やけをしまさずや

玄賓庵

無造作に脱げば玄賓瘦せてる

吉野山にて

吉野山散るてふことを教へられ

吉野皇居址

舞台人なし桜が散るばかり

勝手神社にて

心ここにあらず静は舞ひおさめ

吉水院

色々威落人に派手すぎて

生々荘(山中湖畔)

襲ね着で聴くはうぐひすほととぎす

道後

丹前は坊つちやん団子のぞきこみ

堺水族館

水族館に雀鮫にもされず生き

水族館おこぜと鼻をつき合はせ

大安寺

二十六羽描かねばただの居候



## 追悼 岡本久峰さん

米田 恭昌

久しくあの筆まめな久峰さんからの便りがないので案じていましたが、五月七日ご息女から、四月三十日に亡くなられたとの訃報を受けました。享年九十二歳。本名岡本久三、大正九年十一月四日農家に生まれ、小学校高等科を出てすぐ村医の家に住み込みの書生となり、専検合格を目指して勉学に励んでおられた。ポケットに白秋の詩集を秘めながら……

### 裸電球向学心に燃えた日々

「この句は亡妻が最も好み飾っていた私の一句です。」(21・12・4)。しかし二〇歳で徴兵にとられ衛生兵となり、やがて北満へ、野戦病院を転々とし、昭和廿年終戦時は廿七歳、「……零下四〇度のシベリヤに抑留され、食も電気も薬もなく風と同居して重労働、毎日七、八名が死に、雪中に葬るのが日課でした。」(22・2・3)

### 天駆けて帰れ凍土に眠る戦友

「そして昭和廿三年骨と皮三五キロの瘦身で郷里の土を踏みました。」(17・12・18) 当時三〇歳、道修町の上野製薬に入り活躍される。

その頃、男みな阿呆に見えて売れ残りの句で有名な同人の皮フ科医山川阿茶さんに可愛がられたとか。「岡本は一寸注射してんか、血液入れたらあかんで」と白いお尻をむけられた。こちらは衛生兵の筋金入り「よろしおま」とブスリー懐かしいですな、お色気は全く感じませんでした。」(19・2・22)

やがて独立、岡久薬品を設立、代表となり社の発展に尽くされました。川柳を初められたのは平成に入ってから。翠洋会は当時三共の戦友、山本憲太郎氏(番傘)に教えられて四年八月入会、七十三歳の時で、足腰弱っておられたが、当時、谷四での本社句会、玉造の翠洋会に自転車までおられた。

十一年正月生駒聖天さんの石段下で上げられ友人の下りてくるのを待つておられた久峰さんに偶然お会いたったのも、昨日のように思われます。この頃から同じ薬屋で、私が会長という事もあり文通が始まった。入選の喜び八十路若返るとなにわ柳壇薫風選の初入選として、コピーが送られてきたのはこの年の

六月十九日。

難民が水一滴を手で受ける

薫風先生をお悼み申上げる気持ちで自勵していましたが投句をまた始める気になり……そして楓楽選で一席に抜いて頂きました。

天秤に掛けて本心裏返す

思いもよらぬ紙面に感激を覚え今は亡き薫風先生のご恩をかみしめています。」(18・1・23) そして

人柄を買われてのびる小商い

の句が翌年の川柳塔まつりで「……幸い好きな句が人位に入り満足しております」(19・10・9)と。

十四年六月に社を閉じられ「……これから人間らしい暮らしを考えると考え、ぜひ出席致します。」(14・6・2)とありましたが、足腰だけでなく、心臓も悪くされ、翠洋会もとんと出席されず、便りのみ増えてきました。

うかうかと人の情に胸が小る老い(19・9・12)

生かされた感謝を胸に小るい(19・11・19)

信用の他に取柄のないのれん(19・12・8)

平成廿一年七月心筋梗塞の為日赤入院手術

メス捌きにか細く命救われる(21・8・4)

「百歳まで現役で、シベリア体験記書き上げるまでは死ねません。ただ焦るのみ。」

(19・7・7)と言っておられた久峰さんでした

が——心からご冥福お祈り致します。

合 掌

# 『川柳の

## 理論と実践』

新家 完司 著

栗原道夫

「川柳マガジン」に三年七ヶ月、四十三回にわたって「入門講座」として連載され、好評を博した「川柳の理論と実践」が、一本にまとまった（平成23年3月14日発行・新葉館出版・B6判・326頁・一六〇〇円十税）。

内容は、I 川柳を作る理由と心構え、II 作句の心得、III 作句力アップのための表現と表記、IV いろいろな川柳の取り組み方、V 作句力と選句力―総合力のアップ、の五部構成で、全四十四章からなる。

「I 川柳を作る理由と心構え」の「はじめに」の章で、著者は、「句を作るといふことは、『自分の姿、自分の想いを表現すること』であると、自己の川柳観を明示している。そして、そのような川柳観に基づいて、

著者長年の川柳生活から体得された理論と実践が具体的に明快に述べられている。初心者  
が川柳に対して疑問に思ふ点、また陥りやすい点への配慮も行き届いていて、それらが分かりやすく説明されているのである。

具体例を二点だけ挙げておこう。

問題点を箇条書きで示し、それについて考察を加えた書き方が分かりやすい。例えば、「II 作句の心得」の「定型以外のリズム」の章では、破調の句が生まれる原因について、箇条書きで次のように示している。

①定型を重視していない。あるいは否定している。／②破調の句を斬新で格好いと思っている。／③散文の感覚で余分な助詞などを入れていく。／④音数を数え間違えている。／⑤素材にした名詞などの音数が多すぎた。／⑥定型を尊重しているが、形式よりも想いを優先させた。」

このように、考えられる限りの原因を挙げて、それぞれの原因について著者の経験から体得された考察を加えているので、説得力があり分かりやすいのである。

作句の上で陥りやすい点についても、鋭い指摘がなされている。例えば、「III 作句力アップのための表現と表記」の「自分を詠う」

と「他人を詠う」の章では、次のような著者独自の見解が示されている。

「午前二時男がたまたま紅を拭く」のように、主語がなく主観を述べている句を「自分を詠う形」と呼ぶ。実はこの句の作者は男性。つまり、「自分を詠う形」で他人を詠ってしまっていることになる。対して「おととしの話で妻が責め立てる」のように、「妻」という主語が明らかにされている句を「他人を詠う形」と呼ぶ。実はこの句の作者は女性。つまり、「他人を詠う形」で自分を詠ってしまっていることになる。

著者は、このような句を良しとしない。なぜなら、「句を作るといふことは、『自分の姿、自分の想いを表現すること』である」という筆者の川柳観に反するからである。

著者は、「はじめに」の章で、芸術や文芸に絶対的に正しい指針などというものはなく、この講座もあくまで参考にしてもらいたいと言いつつ切っている。本書で述べられている一つ一つについて、読者は、自分で考え検証することによって、各自の現在の川柳観を確認することができるだろう。その意味でも、本書は、初心者だけではなく中級者やベテランにも有用な一冊であるといえる。



同人・誌友参加

# 路郎忌特集 麻生路郎この一句

(順不同)

子よ妻よ

ばらばらになれば浄土なり

路郎

麻生 葭 乃

少年時代から川柳、川柳と言って暮らしていた路郎は結婚後も川柳は忘れなかった。

「番傘」同人辞退後は川上日車氏等と新傾向の川柳を「雪」へ毎号発表していた。これを新短歌と称していた。「雪」は評論あり、絵画あり、俳句あり、短歌ありの文芸総合誌であって、画伯小出楳重氏なども同人の一人であった。

新短歌なるものはあまりにも尖端を走っていたので、当時の柳界にいられず、異端者扱いをされていたが、歌壇の一部ではこの新し

い芽生えを推奨し問題にしていた事もあった。

然し一般に川柳は文壇の下積みになっていた。川柳はもつと地位の向上を計らねばならぬ。伝統だの、革新だのと互いに小さくひしめき合っている時ではない、先ずさきに社会への進出をめざさねばならぬと考えた路郎は自己独特の句風を暫く断念する事にした。「川柳雑誌」の誕生はそれがためであった。

その後全国中学の国語教官を訪ねて従来のあやまれる川柳観をただし、学生にも川柳を作らせた。北支蒙疆への川柳行脚、川柳人協会の設立と企画は次々と運ばれ、遂に川柳職業人を宣言して立った。

激しい性格の路郎は平坦な道を好まなかった。平穩無事な生活の単調さに堪えるよりは喘ぎながらも苦難の道を切り開くことに生甲斐を感じていた。過去何十年間の彼の生活は川柳の理想郷いまだ遠しの焦燥と資本の不足との闘いであった。

それでも彼は借金はしなかった。借金はなかなか返済できぬものであると知っていたからである。晩年彼は図書館の一室へ短詩文芸文庫を創って貰い、古今東西の名著を網羅する野望に燃えていた。じりじりと衰えて行く彼のヴァイタリティーはそれさえも見送らねばならなかった。誰しも逃れぬことの出来ぬ人生の黄昏を彼はどんなに淋しくみつめたことであろう。

ある時は、ふと家族のものを巻ぎえにしたかのように思われた日もあったであろう。娶らざりしならば、子を持たざりしならばと悔やまれる日もあったであろう。私よりも子煩悩である筈の彼は、唯の一度も子供の頭を撫でてやる暇もなく世を去った。今は父であり夫である因縁から解放されて、はじめて安住の地を得た彼である。残されたこの一句を抱きしめて、心の限り祝福してあげたい気持ちでいっぱいである。(「川柳塔」昭和44年7月号)

旅行吟

十和田湖よみな酒になれ旅人へ

路郎

橘 高 薫 風

路郎先生の句集「旅人」のはしがきに「旅を詠んだ句は私に思い出の数々を再演してくれて忘れ難いものではあるが、私と同じ環境に置かれていない人達にとっては興味が半減されることを思い、身近なものをホンの僅かばかり発表したのに過ぎなかった。」という一節がある。旅行吟、前書のある句は、「川柳の邪道」と見る向きが川柳人に多い理由の一端がここにかがえるようだ。旅行吟は確かに難しい。

この句は路郎先生に随行して男女さんと共に東奥日報社主催の川柳大会に出席した時のもので、十和田湖畔の陛下がお立ちになった展望台で湖水を見るかき、遊覧船に乗って涼風を味わった。路郎先生は自然の風景より人間関係方面の関心が強いので、楽焼をたのしんだり、大町桂月の墓で写真を撮ったりした時の方がご機嫌だった。私も数句作句はし

たが、路郎先生がメモに走り書きされたのを案内の工藤甲吉さんに渡され、それが先生の談話とともに凸版印刷で翌日の新聞に掲載された時は、事実讃嘆させられた。

「礼を尽くし礼を失し師と旅にあり」と先生の思いに近づこうと心を尽してお供をしていた私に、旅の句を作るについての何か深い無言の教示を受けたような感慨を抱かせた。

帰阪後、ある先輩にこの句を示したら「路郎先生の悪い一面であるハツタリ性が出た句で感心出来ない。」と酷評されたが、私はそ

古稀はよし弟子に孫弟子

ひまご弟子 路郎

西 出 楓 楽

今、川柳塔で絶滅危惧種になっている「ナマク」路郎師に会ったことのある人のひとは私なのである。

昭和三十年代後半、病弱だった義母の付き添いで私は千日前の自安寺や、以和貴荘の本社句会に出ていた。その席上、気難しい顔で辺りを睥睨しておられた路郎師の姿

の當時も、今もそうとは思わない。先生は健康が最上とはいえない状態で、青森の繁華街の一角で脳貧血を起され、葉局へ走ったり、仙台までの寝台車でも、冷房の故障した車にそのまま乗せられて、「冷えない方が僕にはいいんだ。」と仰言ったりしていたのだが、或いは心を遊ばせ、或いは心を凝らして、旅の景観と心を結びつける作句の要諦である精神力は、まだまだ旺盛でいらした。私が旅に出るとき、この句に接した時の感慨が必ず甦るのである。〔川柳塔〕昭和44年7月号

がうつすら記憶にある。

また、義母たちが中心になって、近所の信用金庫で開催していた玉造川柳会へも、たまにお招きしていたようであった。私にもつばら会場の段取りやお茶くみのために参加していた。そして、句会中は皆さんの邪魔にならないように、編み物や手芸をして句やお話は上の空で時間を潰すのが常だった。

当時全く川柳に興味がなかった二十代の私にとって、見るからに頑固そうなお年寄りに、何で周りがあんなにビリビリするかと合点がゆかぬばかりであった。

何の用事であったのかは記憶にないが、路  
郎師が我が家に見えた時、例によって義母の  
気遣いは傍目にも大変なことが窺えた。緊張  
をしながらしずしずとお茶とお菓子を持って  
出た私に、義母は「ちがう、ちがう。お酒や。  
一升瓶のままお持ちして」という。それをコ  
ップでちびりちびり飲まれ、残りを壇のまま  
当時いつも同行されていた林花子さんに持た  
せてご機嫌で帰られた。路郎師がごよなくお  
酒を愛されていたことをその時知り、ちよっ  
ぱり親近感を抱いた。

あの頃から川柳を始めて弟子にでももらっ  
ていたら、私の川柳はもつと変わっていたか  
も——と、苦吟続きの昨今、悔やむことしきり  
なのである。

### 人類は悲しからずや左派と右派

路郎

小西雄々

ソ連が崩壊する日までの米ソ間の問題で私  
達は多くのものを学んできた。やれやれと思  
いきや今度は中国が経済大国、軍事大国とし

て頭を出してきました。

一方、国内の政治の問題でも現在は多少鎮  
静化しているが、左右の対立に過去には激し  
いものがありました。また、戦域においても  
当局と労働組合の間で、主義主張に隔たりに  
大きいものがあり、前記の句から学ぶものが  
多く難問題を仕掛けられても、絶えず平常心  
で現場協議や団体交渉で解決するよう、誠意  
をもつて臨んだことを覚えていきます。昭和二  
十八年の作品で、私には教訓の一句です。

さて、川柳雑誌では毎号、路郎先生が  
「公・私・雑・記」と題し、いろいろ記述さ  
れていましたが、昭和三十年四月号（No.335）  
に、「私は三月六日に米子の皆生温泉で開か  
れる米子支部主催の山陰川柳大会へ前日に出  
かけ、駅前の花輪の前で支部の人達に迎えら  
れた。スターの乗込みといったかたちだ。す  
ぐ皆生温泉へクルマを走らせた。美笑君、  
雄々君と温泉に浸った。美笑君を中心に雄々  
、戯耕の両君が大車輪で支部の人達をうごか  
し、六日の大会を迎えた。出席者七〇名、盛  
会だった。」と述べておられます。私は繰返  
して読み、忘れることはできません。  
路郎先生からいただいたお褒めのお言葉  
を、今も噛みしめています。

### 酒とろりとろり大空のころか

路郎

伊達郁夫

ほんと膝を叩いてしまいました。こんな句  
が何時になったら作れるかと心の底から羨ま  
しく思いました。その《穿ち》の奥底には未  
熟な私には、到底届きませんが、私なりに感  
銘の渦の中にあります。

時あたかも、法然上人八百回忌展、親鸞聖  
人七百五十回忌展が京都で開催されていま  
す。五木寛之著「他力」には、神や仏を信じ  
る者、信じない者も、目に見えない世界を認  
める者、認めない者も、世界中の民族・国籍  
を超えて非常時に生きる私たちを強く揺さぶ  
るエネルギーが他力という言葉の中にある。  
この他力の世界こそ今私たちが無意識に求め  
ている《何か》ではないかと思つのです。と。  
そして、この思想こそ法然・親鸞が説いた世  
界である。

路郎のこの句にはその世界が底辺にすつし  
りと横たわっているように思えてならないの  
です。川柳のこの奥深さと、廣大さに、心を

打たれるのは私だけではないと思います。この五・七・五の中に凝縮された人生哲学・世界観に脱帽しています。

因みに、五木寛之著の『他力』は世界各国にて翻訳され、ベストセラーになっています。

## だしぬけに

### 鐘が鳴るのも旅のこと 路郎

楽原道夫

初出は、「川柳雑誌」No.7 (大13・8・15)の巻頭言「北陸の旅より」。路郎が「川柳雑誌」を創刊したのは、大正13年2月。同年7月31日(木)、夜行で金沢へ旅立った。「川柳雑誌」を広めるために訪れたのだと思われる。翌日午後六時から北都川柳社による歓迎句会と懇親会が開かれ、散会は夜の十二時過ぎ。明くる日は、山中温泉で遊んだ。「百萬石」9月号の「山中温泉から麻生路郎」に、「(略)宿の女に連れられて黒谷橋のあたりをそぞろ歩きました。丑の日(8月2日)筆者註」だといふので大変な客です。(略)だしぬけに鐘が鳴るのも旅のこと」とある。

ところが、句集『旅人』では次の形に改められた。

だしぬけに

鐘の鳴るのも

旅のこと

三行書きにすると、「の」の韻の踏み様が美しく見えるが、もとの「鐘が」の方がいい。大野晋によれば、「が」の前には、「誰が山田さんですか」「私が山田です」のように、未知の内容がくる。つまり、「鐘が」の方が、だしぬけに鳴る鐘にふさわしいのである。「川柳雑誌」発展のために多忙な日々を過ごしていた路郎が、ほんの束の間だが味わった旅情。旅の本質をとらえた作品である。

### あきらめを持つ花嫁のしんし針

路郎

江見見清

「後の葉柳」一号 大正八年六月号より  
路郎三十一歳の時の句。大正三年にヨシノと挙式しているので、ここの花嫁は近所の方だろう。私の母が大正十三年に結婚している

のでこの句の主人公と時代は近い。

私の子供の頃、母が洗い張り(しんし針)をしていた事を思い出す。沢山のしんし針でピンと張られた幾つもの布を庭に干し、しんし針を外すお手伝いをさせられていた。七人の子育てをしながらも着物を洗うための縫い替えの仕事は、当時の主婦としては当然やらねばならぬ日常の、主要な仕事だったと思われる。

冒頭の句の「あきらめを持つ」の言葉からこの「花嫁」は不本意なまま嫁いで来たことそして「持つ」の言葉は、嫁いだ今でも嫁いで来た運命をあきらめきれず、悶々とした気持ち強く表している。しかし花嫁はもう洗い張りを始めている。おそらくこの着物は花嫁の着物ではなくお姑さんのものだろう。路郎はしんし針を張っている花嫁をこのように見ている。一本一本しんし針を張っている長い時間、花嫁は「あきらめ」ねばならぬと反芻し、心に強く言いかけながらも「しんし針」という、これから一生しななければならぬ家事を続けている。

当時の女性の社会的地位、花嫁の心情を「しんし針」の言葉で、それを見事に鋭く言い表している。

おれに似よ俺に似るなど

子をおもひ 路 郎

青雲のこころに密柑まだ青く

薫風子

梶 元 世 津

短冊二枚が並んで入る額には、句集『師弟』の名の如く、お二人の短冊をと思い、我が家に掲げ、毎日懐かしんでおります。と申しましても、私自身が川柳作句に励み始めたのが平成四年頃からですので、それまでは父・梶元紋太を介しての川柳の世界に浸っていたということになり、懐かしむという心易い言葉は変かも知れないのですが、とにかくお二人は懐かしいお方なのです。

路郎師とは句集『旅人』や、大会でのアルバムより、確かに苦虫を噛みつぶしたようなお顔の印象ではありますが、旅人の句に魂は揺さぶられる思いがいたします。

そして薫風子さんと気安くお呼びさせていただいていた昭和四十年代頃、父の病臥へ度々見舞って下さり、母と私も親しく雑談のひとつとを過ぎ、濃やかなお人柄に惹かれま

した。想い出は書きつくされぬほどあります。川柳雑誌四月号「橋高薫風の世界」を拝読、薫風子さんとお呼びさせていただいたお方の生涯を深く知ることが出来、心が熱くなりました。

短冊二枚師弟を仰ぐ額のあり 世 津

老人におもちゃなしバラの

前に立つ 路 郎

山 田 耕 治

『旅人』『旅人その後の作品』あらためて読みました。あの有名な数々の句がここにあったのかと思ひながら。また同時に、何度も見聞きたこれらの句を私は正しく理解しているのか、表面的なものだけを見て長い間解ったような気持ちになっていたのではないか。深いところにあるものを読み取ろうとしたのかという思いに迫られました。

この句は、NHK学園で薫風先生に頂いたテキスト「名句のかおり」に採られていたものです。路郎の句ですから、先生から十分にご説明いただいたと思ひますが、いま見ればテキストに書込みはありません。その時は解

った気になっていたのでしょうか。この句に出会うたびに、解らないままになっている数多くの句の中のひとつだとの思いがします。

「老人におもちゃなし」とは、老人には夢中になれるもの、心ときめくものはない。

「バラの前に立つ」は、美しく咲いたバラの木（花瓶のバラではないと思う）と対峙しているということでしょうか。老人には、もう心ひかれるものはない、たとえ美しく咲いている赤い花を見ても……という、寂寞とした心境を詠まれたものか、或いは、おもちゃのように心奪われるものはないが、世の中の美しいもの美しさをしっかりと味わうことだ、ということでしょうか。或いは別の暗喩があるのか、教を乞いたいと思っております。

子を死なし学校に子の多いこと

路 郎

森 本 弘 風

確か川柳を始めて一年位の時に薫風先生にお誘いを受け、川柳ねやがわの句会へ参加させて貰った時、川柳塔社刊の夫婦句集「旅人・福寿草」を初参加の記念にと頂戴した。

何も分らないまま早速読ませて頂いた。

私事で恐縮だが私も次女を小学四年生で亡くし、その時は二〇年程がたった。しかし、当時は路郎先生の人となりも知らなかったし、句の良し悪しは勿論分らなかったが、この句がジーンと私の胸を打った。

路郎先生は妻、葎乃さんとの間に四男五女、九人の子宝に恵まれているが、その内四人を亡くしている。その悲しさは推して知るべしであつたらう。それを表に出さずに我慢し父親の威厳を保っていたのだが、学校の隣に居を構え、聞こえて来る学童の嬌声には、死んだ子供の事をふつふつと思ひ出し、明治男の矜持もこれまでと、思わず出た嘆息の句だと思ふ。

特に本人の幼児時代の体験から、家庭の温もりを人一倍大事にしていたと思ふ。

例えば長男ロンドンの一周忌には亡き子に

お父さんはやはり川柳々々云つてるよと語りかけ、更に

湯さめするまでお前と話そ夢に来よと詠んでいる。

最後に路郎先生の思ひは次の句に尽きるだらうと思ふ。

子よ妻よばらばらになれば浄土なり

雲の峰という手もあり

さらばさらばです 路郎

太田 昭

路郎先生が大正十三年に川柳の社会運動に合わせ、初心者指導と川柳研究を目標に、川柳雑誌を刊行して以来叫び続けた「いのちのある句を創れ」はわれわれ川柳塔のみならず川柳家達の心の中に今なお息づいている。

路郎先生の句は、羽ばたくような大きさと読む人々を包み込むような大らかさと温かみの中に、凛とした強靱さを感じられる。

路郎先生自らが「川柳を一言でいうならば一七音子を基底としたリズムを持つ批判詩である」と述べている様に、作品には決して基本を見失う事のない厳しさを感ずる。それだけに師の作品には魅かれるものが多い。

雲の峰という手もありさらばさらばです

この句は路郎先生の辞世の句であるが、雲の峰は、単なる積乱雲ではなく、巨大な入道雲がむくむくと盛り上がり、峰や塔のようにそびえ立つ様をあらわした盛夏の雲である。

路郎先生が亡くなられた七月はおそらく峰の如くそびえ立つ入道雲が、あたかも路郎先

生自身にも見えて来たに違いない。

「さらばさらばです」葎乃夫人と子沢山の暮らしに耐え、悪戦苦闘の川柳一筋の六十一年間を過ごし、ウイルス性肝炎で柳友とも家族とも別れていった巨星、麻生路郎先生の最期の叫びが聞こえるような気がする。

薫風先生の辞世の句となつたのは、「昼寝覚めポトリと極楽へ墜ちる」であるが路郎と薫風の師弟の句を双方合わせ読む時、やはりそこには「いのちのある句」を感じさせる。

只一句超生活の句を遺し

路郎

石橋 優明

麻生路郎の句には、路郎という人間がくつきりと刻印されていると言ふことができる。彼は自身の句について、「たゞ苦しいから吐き出す排泄物に過ぎません」と言ふ。また、「私は川柳に對して多くの悩みがありました。苦しみ抜いた揚句の果てが實生活のうめき聲を川柳の上に盛ろうとすると、ころまで發達した」とも（麻生路郎氏の書翰）以下路郎の言葉は「麻生路郎読本」より引用。

路郎は実生活における自己の全存在を川柳

にぶつけていた。本誌四月号の柴原道夫さんの薫風論「強靱な抒情」に倣うなら、路郎の句に刻まれているのは「強靱な生活者」とでもいべき彼の姿だと言えろ。しかし路郎は自己の句境に安住しようとは思わなかつたろう。「川柳の向上發展」(「作家と環境」)を願う、「自らの句境を深く掘り下げて行け」(「川柳作家十五戒」)と主張する路郎だ。自分は発達深化の途上にあると常に意識していたに違いない。

そういう目で見ると、「一句を遺せ」と川柳家に檄を飛ばした路郎が、冒頭の句を残しているのは示唆的だ。「實生活」を掘り下げた先にある「超生活」の句とはどのようなものなのか。それを問うことは、路郎の到達点を出発点として捉え返すことを意味する。それによって我々は広大な川柳の沃野に立つことができないのではないだろうか。

### 古稀はよし弟子に孫弟子

ひまご弟子 路郎

三宅 保州

路郎師が古稀の時の作で有名ですが、記念

に屬子にして弟子達に配られたそうです。

その古稀の頃、路郎師は現在の和歌山三幸川柳会の前身である「七面川柳研究会」に和歌山まで時々お越しいただき、ご指導を賜つたと当時の同会主幹の中筋三幸氏が柳誌等で述べています。いわば路郎師の弟子であった三幸主幹をはじめ、往時の会員が路郎師に直々の薫陶を受けるといふ光栄に浴していたのです。こうして路郎師から薫陶を受けた同会は發展して、現在は会員が二百名を越すまでに成り、「和歌山三幸川柳会」として、明年には創立五十周年を迎えるまでに成長して参りました。当時の中筋三幸主幹から数えて、はからずも私は四代目の主幹を務めさせていただきます。三幸主幹は「底辺を掘り起こして川柳の普及を図り、川柳人は命ある句を創れ」ということを標榜していましたが、これはまさに路郎師の教えそのものであり、現在も両先生の教えが脈々として当会に受け継がれているところであります。その意味において現在の私達も、路郎師の曾孫弟子から鶴の弟子、亀の弟子の末席であるという、いささかの自負をもって精進しているところで

は路郎作品のパソコン入力の一部をさせていただきます、キーボードを通じて師の句が鶴龜の弟子にまで脈打っている畏敬に打たれました。

をかしきは鯨の靴に豚の靴

路郎

吉岡 修

戦時中、重要物資は軍に優先だったので、一般人には物の無い時代で、靴なども代用品で作られたのがあった記憶がある。物の不自由な暗い時代を、それでもをかしきはと、笑ってしまうのが川柳の根性かも知れぬと、心ひかれる。

私は終戦の年の五月、現役で入営した。終戦が八月で、軍から解放される十月までのごく短い間の兵隊さんだったが、一部の装備の貧弱なことにはびっくりした。例えば水筒だ。ゴムのようなだった。これに水を入れて炎天下の行軍でもあった、苦くて苦くて飲めたものではない。こんな装備で外地へ出されたらどうなることやらという思いがした。こんな物しか無い日本力だとなると、戦争の行方！？

という気がしてくるのだ。

時は移り、今はもう物不足を言う人はいないが、原発事故というとんでもない人災が発生し、電力不足で物が作れない事態が出ている。早速節電が話題になって、飲みものの販売機を二十四時間電力消費のまま置いておいたなどは、直ぐ減らせると槍玉に上がっていたが、こうした魔女狩りも盛になるのだろうか。一転、計画停電とか配給だとか、昭和の悪夢がまたぞろやってくる気配を感じる。

掲句にならない「今」を川柳にして、稚拙ながら一句残しておきたいと思う。

### 聖書一冊菊一輪の二階也

路 郎

前 たもつ

麻生路郎先生については、定年後、平成から川柳を始めた者には全く面識のないのあたりまえであるが、薫風先生から約十年間にわたり、路郎作品だけでなく、先生の生き方まで学んだことは、川柳を志す者にとって掛け替えのない財産である。

### 聖書一冊菊一輪の二階也

この句は川柳教室の資料に何回も出ている。また、薫風先生の著書、『なにわ川柳』のこの一句。川柳句集『師弟』の中にも入っている。

「なにわ川柳」この一句から、名文を今一度紹介したい。

「書齋が兼用になっている二階の机の上にはいつも一冊の聖書が置いてある。今は菊の季節として、白菊一輪端正に活けてあるのみ。黒い皮の表紙の厚重な本と鶴首に挿された真白い菊、この簡潔な取り合せに作者の高潔な心を余すなく示す。一冊・一輪の効果。」

私がこの句に興味を持ったのは、路郎先生はクリスチャンであった葭乃夫人からのような影響を受けたのかということであった。

『路郎物語』を開いてみた。「ここで路郎夫妻の洗礼名をあげておく。路郎のクリスチャンネームはヨハネ。葭乃はルツである。路郎は図らずもこのようなイエスの輪環の下にいたのはもとより花嫁の影響である。」と東野大八さんは書く。

この句は戦後の作であると薫風先生は言う。路郎先生にとつて、戦後になつても、聖書は教養としての書だけではなかつたようである。

### 寝転べば畳一帖ふさぐのみ

路 郎

源 田 啓 生

畳一帖をやつとふさぐ人間の身体で一体何をそんなに思い悩んでいるんだ、と麻生路郎師に諭されているような句だ。

思い出せば山陰の片田舎から青春の夢や悩みを、小さなポストンバッグに詰め込んで大阪駅に降り立つて以来、不安や悩みは尽きない。そんな時ふつと出合った川柳は「番傘」だったと思う。その時はただ読むだけに過したが、子供が大きくなった頃に朝日柳壇の川柳に投稿してみたりした。

しばらくして橋高薫風先生に師事して、麻生路郎川柳を紹介された。その川柳は平易な言葉で綴られているのだが、何回も読んでみると奥の深い味わいがある、それでいて御自身は内に厳しい闘志をお持ちで、それを川柳には表されなかつた人だつたと思つている。それなくしては友と袂を分つてまで、川柳誌を新しく発刊することなど出来なかつたのではないか。川柳の新しい潮流を目指して舟出

した決意は並大抵ではなかった筈だ。「行く末はどうあろうとも火の如し」にその心情がチラツと顔を出しているようだ。その他にも私の好きな句がある。それは

われ老いしか千代紙を美しと見る

雲の峯という手もありさらばさらばです  
私も老年になつたせい、それまで余り興味はなかつた能狂言なども最近好きになつてきた。そして出来ることならば、苦しまずこの地球とさらばとしたいと願っている。

見渡すとユダのころを

みんな持ち 路 郎

藤 井 則 彦

定年を終えた平成十三年四月、齢はもう十六歳になろうとしていましたが、川柳を学びたいとの強い思いから、あるカルチャーセンターの門をくぐりました。講師の橋高薫風先生の滋味溢れるお話の中でよく教えていただいたのが麻生路郎師の句で、その時の師を仰ぎ見られる先生のお顔が何とも素晴らしく、印象的でした。資料として先生から頂戴した「麻生路郎抄」という印刷物の二句目に

載っていたのが冒頭の句で、川柳には新米ながらも私の胸を強く打つたのを覚えています。

その後、イタリアのミラノでレオナルド・ダ・ヴィンチの名作『最後の晚餐』を実際に見る機会がありました。路郎師の句を思い浮かべながらこの絵をじっと見つめていたことです。キリストは、十二人の弟子たちと最後の夕食をしているとき、「あなた方のうちの一人が私を裏切ろうとしている」と、恐ろしい言葉を述べる。思わず弟子たちの間に衝撃と動揺が走る、その劇的な一瞬を大画面に見事に描いてみせたレオナルドの傑作がこの絵なのです。

路郎師の「見渡すとユダのころをみんな持ち」は的を射た人間観察の要諦を言い得て妙であり、先ほどのキリストの言葉に勝るとも劣らない、奥深さと力強さのある名句だと思います。

颱風のあんな力が欲しくなり

路 郎

上 山 堅 坊

台風へ念仏も出ぬあわてやう

台風と学者相撲にならんんだ  
台風も聖火も通りやことわれず

『麻生路郎読本』から台風の恐ろしさを詠った句を拾ってみるとこの四句です。先生の住まいは大阪市内ですから、昭和九年（先生四六歳）の室戸台風（死者行方不明者三〇三六名、昭和五年（六二歳）のジェーン台風（五三九名）昭和三六年（七三歳）の第一室戸台風（二〇二名）と、大きな台風とそれに伴う高潮の災害を経験された筈です。

最近の句会では東日本大震災の句が多く作られていますから、先生も台風災害の句をたくさん作られたと思いますが、消えてしまつたのですね。時事吟の運命でしょうか。

私は大阪府に就職して台風時の高潮や大雨による洪水への対策事業に携わつてきました。その技術者が言うのは辛いのですが、海岸や川の堤防は、川柳的に言えば、切れるためにあります。ある目標を決めて堤防等を作っていますから、それ以上の雨や台風には逃げていただく以外に方法はありません。

皆さんはお住まいの近くを流れている大きな川をご存知ですか。その川の堤防の高さより住宅の方が高いところにありますか。ちょっと不安な方は市役所に堤防が切れた場合の

浸水区域の想定図があると思いますので、確認されたらいかがでしょうか。

## 吉野山散るてふことを教へられ

路郎

水野 黒兎

日本人には桜を待つという遺伝子が組み込まれている。三月になるとその遺伝子とはみに活発になり三分咲き、八分咲き、満開などと日々刻々とその咲き具合を楽しみ、散り初めとか落花のさまざまにまた鑑賞の対象になる。

人生のあらゆる慶事に桜の咲くことが結びつけられる。例えば合格の喜びをさくら咲くと寿ぐ。逆に散るにつけてはその潔さ、無常さが人生の一場面に「散り際のいい人だった」などと当てはめて考えられる。

詩人には吉野に行かずとも桜の散るさまは勿論わかっていた。しかし上から降るように散り、下から舞い上がるように散るその圧倒的なさまは、吉野において初めて実感されたのかも知れない。百人一首に収載の

久方の光のどけき春の日にしづ心なく  
花の散るらむ

と紀友則が詠んだその「しづ心なき」心情を路郎師もあらためて感じ取られたに違いない。後年薫風師が

桜かてすかつと散ったわけでなし

と詠まれ、「かて」に万感の思いを込められたのと同じく、「散るてふこと」に過ぎ去った日々の事、これから先の事など種種の思いをここに凝縮したものであろう。芭蕉のさまざまの事おもひ出す桜哉  
の「さまざま」な事もまた同様であらう。

## 寄り添へと云はぬばかりに

風が吹く 路郎

森 松 まつお

「旅人」でこの句を見つけた時、懐かしい一場面がよみがえってきた。

バイト先で知り合った彼女を映画に誘ったのは初冬の頃。OKの返事にワクワクしながらデートプランを練って、映画→食事→喫茶

店→御堂筋を腕を組んで歩く（あくまでも希望）に決定した。

当日、待ち合わせの戎橋に早々と到着し、待つ事三十分。それでも約束の時間より十分も早く彼女は来てくれ、プラン1すぐ映画館へ向かう。彼女の意見を取り入れ「007は殺しの番号」を観る事に。スピード感溢れるスクリーンにドキドキしながら見入っていた二人。

さて、プラン2の食事は、これも彼女の意見を入れてお好み焼屋さんへ。プラン3の喫茶店で今観た映画の話や、本の話など、とりとめのない話に二時間がアツと言う間に過ぎていた。プランは順調に進み、いよいよ待望の最終プラン御堂筋へ。難波から淀屋橋までの間で、早い時期に達成したいと願っているが言い出すチャンスがない。本町あたりに差しかけ「ダメか」と諦めかけた時、真冬を思わすような冷たい風がビルの谷間を吹きぬけていった。「寒いわ」「腕でも組むか」（声が少しうわずっていた。「少したためた後、スツと腕を組んで来た彼女。もちろん淀屋橋から難波へ折り返し歩いた。

戀人の匂ひ香水だけでなし

路郎

人生を暗いところで探りあて

路 郎

澤 井 敏 治

エッセイ「妻を語る」を通じて、心に残っているものはたくさんあるが、世に言う秀句については同人の方に譲り、路郎先生の一句を選ぶにあたり、誌友一年半の身としては今回、「麻生路郎読本」の「旅人&旅人その後」の作品」を読み直して選ばせていただいた。

クリスチャンの奥様との新婚時代のもの、子供さんを詠まれたものなど、あれもこれもとレ点が付く。再読して百句を下らない。迷いに迷った挙句、辿り着いたのが、「読本」の七十八頁のこの一句である。

私は七十二歳の定年を前になって川柳を始め、嵌まり込んでしまった。日ごと「ぼつくり逝くのが理想」と言っていた昨年、青天霹靂の出来事があった。「念のため」と思って検査した胃カメラが「胃がん」を発見した。超早期ということで、内視鏡による胃内粘膜炎切除と相成った。経験の先輩は「そんなもん、胃がんの内に入らへん」と慰めてくださったも

の、手術の病床では消灯ともなると、妄想が暗い森の中から手招きする。

「読本」を頂戴したのは十月十日は手術の2ヵ月後であり、食い込んだ。路郎先生は職業川柳人として、ご家族と共に断崖に立ち厳しい人生を旅行された。煌めく青春時代ではなく、人生の終章にあたり、感じ得られただことではなからうか。その人生の悟りの如き句として、私の心を揺さ振って已まない。

俺に似よ俺に似るなと子をおもひ

路 郎

井 上 桂 作

相変わらず川柳ブームが続いています。川柳もすっかり人々の生活の中に定着してきましたように思います。「誹諧は老後の楽しみ」と言ったのは芭蕉でしたが、現在高齢化社会の日本において川柳の愛好者は、ますます増えていくことになるでしょう。

私事で誠に恐縮ですが、昨年の川柳塔の記念大会に、皆さんに読んでいただければ幸いです。路郎先生を始め七人の先生方のことを「私の尊敬する川柳人」という題名で書きあ

げる直前に脑梗塞で倒れ、雑誌の発刊ができなくなりました。資料収集で御迷惑をおかけした方々に、深くお詫び申し上げます。

さて路郎先生の名句の中でも「寝転べば畳一帖ふさぐのみ」と「俺に似よ俺に似るなと子」を思ひ」の句を読んで、すっかり川柳の虜となった思いがあります。俳句などでは表現できない川柳の醍醐味でした。

人間わずか五尺の命、いくらもがいてもどうにもならない。私も息せき切って働いていましたが、畳の句を読んで以来じたばたするのをすっかり諦めました。

身は職業川柳人として、自信を持つてたれた先生の作品は、当然他の追従を許さないはず。この川柳ブーム、時代性が濃厚で、難解な作品に川柳家の関心が集中しているように思われてなりません。

その点、路郎の句は分かりやすく、上質な作品は今日の我々にも何かを教え、訴えてくれるものがあります。



# マーケティングの 眼で川柳を見る

吉 村 久仁雄

かつて従事していたマーケティングをベールに私はいま、NPO法人で中小企業の支援活動を行っています。

マーケティングは、「ターゲット」と「競合」を設定したうえ、「製品の優位性」を戦略的・戦術的に検討し、実施することを基本にしています。

マーケティングの発想で川柳をとらえるとうなるか。川柳の隆盛を目標に置き、試してみましよう。

まず「ターゲット」です。川柳のポリリウム層は熟年の人たちで、核となるこの層の獲得を普段に努めなければなりません。各地の川柳会は、会員増の努力の一つとして、初心者向けの欄や教室などを積極的に用意し、川柳に興味を持っている人が気軽にトライアルできるようにすべきでしょう。

加えて、川柳の将来のために、若年層の理解・関心を高める必要があります。出前授業を行う、川柳大会でのジュニア部門を設けるなどを通じて、最終的には授業・教科書に取り上げられることを目指すべきです。

次に「競合」です。直接的な競合は同じ七音字の俳句ですが、川柳には大きな問題を抱えています。駄洒落や語呂合わせ、言葉遊びが川柳だという誤解があり、いまだに払拭されていません。俳句と同じ位置に立つには、地道に活動することでこの誤解を解くしかありません。

更に、生涯学習という面から、絵画その他すべての趣味と競合します。その中からいかに多くの人に川柳を選択してもらうか。生涯学習講座などに川柳も積極的に参加する必要があります。

そして「製品の優位性」です。川柳には他とは違うという優れた点があるのか。

川柳は、紙と鉛筆があればよく、俳句と違って季語に縛られず、口語体で短文を作るという気軽さがあります。誰でも何処でも、安価に気軽に取り組むことができる、この気軽さが川柳の大きな特徴の一つです。

更に重要な特徴は、川柳は人間を詠むという点です。俳句と違い、川柳は人間を対象

とし、人間の喜怒哀楽、人情の機微を簡潔に描く。川柳を通じて、己を知り、自我を磨き、人格を高めることができます。川柳はまさに「人間陶冶」の詩であることが最大のアピールポイントといえます。他の趣味にはないこの特徴は、自分を見失いがちな今の混迷の時代、多くの人々に大きな魅力になると考えます。

心を洗濯する川柳。生き方を教える川柳。

では、川柳の隆盛のために今何をすべきか。俳句では、芭蕉や一茶などの句が世間によく知られています。ならば川柳においても、例えば六巨頭の句の中から川柳界がいくつかを選定し、川柳普及のための代表句とすることが考えられないでしょうか。それらの句を機会あることに川柳人すべてが一致してアピールする。そうすることで、川柳のすばらしさを具体的に強力に訴えることができ、川柳への誤解を解くことに直接的につながると考えます。いずれにしろ、こうした息の長い活動を川柳界が団結して行うことが必要ではないでしょうか。

麻生路郎師の言葉「人間陶冶」をど真ん中に置いて、川柳の隆盛のための戦略・戦術を推進するとするなら、その先頭に立つのは川柳塔であることはいうまでもありません。

# 愛染帖

新家 完司 選

福島県 七ツ森客山  
さわさわと朝の窓打つ放射線

(評)爽やかな初夏の朝。明るい光と共に屈く不気味な放射線。歴史的大事件の現場から生まれた、川柳史に残るであろう戦慄の一句。

鳥取県 細田 裕花  
パフォーマンスだから汚れぬ作業服

(評)瓦礫の片付けはしない。「皆さんと共に、私も頑張っています」と表明したいだけの大匠たちの作業服。半年着ていても汚れない。

和歌山市 木本 朱夏  
神さまがくすくすったので山笑う

(評)暖かい南風に命じて、麓からくすくすぐらせたのだらう。「斉に芽を吹いた木々が明るくさんざめく」「山笑うが如き」最高の季節。

浜松市 岡田 史郎  
腰痛にあまり効かない若葉風

(評)マイナス思考には効果のある若葉風も腰痛には効かないか。絶好の行楽シーズンというのに残念なことである。おだいじに！

高槻市 左右田泰雄  
暇だから郵便受けをまた覗く

(評)さつき覗いたばかりだけど…。ひよっとしたら、もう行ってしまったのかも知れない。郵便物が何もない日は、ちよっと寂しい。

高槻市 片山かずお  
夫婦げんかでもしなれば間が持たぬ

(評)一日中顔を突き合わせていたら誰だって喧嘩する。散歩に出るとか、図書館へ行くとか「亭主元気で留守がいい」を実行しよう。

三田市 田中 章子  
すれ違つ友の夫を見定める

(評)「はあ、この人が御主人だったのか」「うちの亭主のほうがちよっとマシかも」などとしげしげ。川柳作家は好奇心旺盛。

和歌山市 牛尾 緑良  
同窓会解散 記念樹の前で

(評)記念樹を植えた日は、前途洋々の笑顔ばかりだったが…。一人逝き二人逝き、とうとう解散となつてしまった。寂しい限りである。

大阪市 柴本ばつは  
死度度してからなんともう十年

(評)「いつ死んでも悔いはない」と覚悟を決めた日から、早くも十年過ぎてしまった。この調子だと、あと十年は大丈夫のよう。

岸和田市 増田 隆昭  
享年で違う葬儀の気の毒さ

(評)百歳の葬儀にも、礼儀として「ご愁傷さ

ま」と言うが、「気の毒」とは思わない。さて、何歳以下なら、そのように思うのだろうか。

堺市 大隅 克博  
娘らはいい匂いして嫁に行く

寝屋川市 森 茜  
屋上から見渡しあくびして帰る

海南市 三宅 保州  
五百円貨小銭にしては重すぎる

鳥取県 石谷美恵子  
子宝の湯にはおばさんばかり浮き

弘前市 稲見 則彦  
こいのぼり酸いも甘いも呑み込んだ

奈良県 渡辺 富子  
喪服にもはやりがあつて買い換える

札幌市 三浦 強一  
スーパリーの竹の子ニハオと笑顔

海南市 小谷 小雪  
退職の音しみじみと若葉風

鳥取県 加賀田志延  
薬膳に負けぬ山菜田舎めし

三田市 雑賀 一泉  
珍味でも喉もと通るまでの味

藤井寺市 太田扶美代  
横文字が度たびわたし傷つける

東大阪市 西田いくろ  
義援金の箱が回覧板と来る

枚方市 伊達 郁夫  
募金箱素通りをした今日の鬱

櫻 市 村上 玄也  
一週間間違っていた予定表  
標準語喋ろうとして舌縄れ

西宮市 吉井菜々子  
身のうちに毒が足りないからお酒  
デイズニーの愛と涙は苦手です

豊中市 水野 黒兎  
黄砂来る乾く地球の咳である  
縄飛びに富士を巻き込む威勢良さ

橿原市 居合真理子  
タレントの誰にも似ないいい顔だ  
口紅がしたりそっとなおべんちゃら

島取市 中宇地秀四  
村祭り呑んで歌って喧嘩して  
誕生日邪魔な人まで来て呉れる

藤井寺市 鴨谷瑠美子  
ワンタツチばかりで退化する両手  
少少だけ恋という字に誘われる

枚方市 丹後屋 肇  
三回忌蝶一匹が飛んでくる  
大阪市 谷口 義

枚方市 海老池 洋  
肩の力抜きすぎ風邪を引きました  
すぐ分かり直ぐに忘れる電子辞書

島取市 吉田 弘子  
国の為です少々の無駄づかい  
熊本県 高野 宵草

小言いう妻を茶化して老い楽し

和歌山市 田中 みね  
世の不辛ひとり背負つて様な愚痴  
浮かぬ日もこの食欲を何とせん

三田市 堀 正和  
肩書きが増えるとか刺刺くれる人  
ニュースでは笑えないから落語聞く

豊中市 松尾美智代  
余る程あった時間もあと少し  
恥かいた事きつちりと書いておく

米子市 加藤 正二  
新しい生き方論す地のうねり  
年金が目減りしたただけ髪伸ばはず

高知市 小川てるみ  
日本は広いと思う旅三日  
褒め言葉少しは欲しいフルムーン

西宮市 藤本 直  
復興の裏に湧きたす利権族  
コンパスの通り飛ばない放射能

富田林市 片岡智恵子  
東北弁心にじんわりと響く  
投票の依頼に返事しとくだだけ

島取市 土橋はるお  
坊さんも町内会の消防士  
凸凹の頭も中味良けりやよい

三田市 上垣キヨミ  
お葬式誰も次とは思わない  
階段は多いか聞いてから参加

弘前市 高瀬 霜石  
ぼーっとした人が神輿の上にいる  
どうやって食っているのだろう無職

八尾市 高杉 千歩  
スキップも出来ないせて春の唄  
よれよれのお札近頃見かけない

米子市 後藤 宏之  
切り替えたらずと憎しみ消え去った  
冷めたままこれがふだんの夫婦仲

京都市 高島 啓子  
菌科医院増えて案内状がくる  
紙一枚さわらぬ夫の机

鳥取県 平木 公子  
母の日はやっぱり期待してしまふ  
山菜が届きメニユーは変更

唐津市 山口 高明  
ポックリと逝くほど善人でもないか  
草餅の人工色が気に入らぬ

西宮市 緒方美津子  
絵馬だつてお礼まいりを待っている  
静けさや一筆書きの達磨の絵

姫路市 古川 奮水  
墓参り新地の燗役立てる  
笑わない猫も馴染へ気をゆるす

和歌山市 古久保和子  
いまさらにお名前聞けぬお付き合い  
藤井寺市 鈴木いさお

ピンラインだけではないぞテロリスト

河内長野市 松岡 篤  
邪魔だなあ帰りの道の立ち飲み屋

河内長野市 村上 直樹  
縄のれんようようとうと指定席

橿原市 安土 理恵  
繋がっていようよ酒あり詩もある

弘前市 高森 一吞  
寂しさは酒を吞んでも変わらない

大阪市 井丸 昌紀  
ほろり酔うつもりが尻に根が生えて

米子市 後藤美恵子  
飲み過ぎをトイレの神に見られてた

香南市 桑名 孝雄  
歳だから酔ったと言わぬのが酒道

弘前市 福士 慕情  
失敗も伝説にする大酒豪

松江市 三島 淑丘  
人並を超えた遊びに悔いはない

奈良市 尾畑なを江  
エプロンも要らぬ独りのお晩酌

神戸市 山口 光久  
見た目には裕福そうなビール腹

豊中市 安藤寿美子  
大鳥とび立ち電線がゆれる

松江市 石橋 芳山  
おごそかに笹の吹き口から宮家

鳥取市 武田 帆雀  
講演を聴いて半熟卵になる

大阪市 小泉ひさ乃  
ジェラシーを忘れてしまっほど生きる

唐津市 坂本 蜂朗  
アツハツハばたんと嘘に蓋をする

羽曳野市 吉川 寿美  
豆腐屋のラッパに気合かけられる

大和郡山市 坊農 柳弘  
処女のまま月に帰ったかぐや姫

三田市 上田ひとみ  
ダイエツトまだあきらめた訳じゃない

鳥取市 夏目 一粋  
カマキリが生きた姿で枯れている

岸和田市 雪本 珠子  
シナリオになかった人と暮らしてる

羽曳野市 吉村久仁雄  
融通無碍いや核心が僕に無い

藤井寺市 俣野登志子  
専業主婦する事だけはして遊ぶ

大阪市 岩崎 公誠  
エンジンに余力はないがまだ遊ぶ

堺市 奥 時雄  
バイキング孫は安物でんご盛り

大阪市 古今堂穂子  
養毛剤 個人差あると小さい字

鳥取市 田村 邦昭  
貧乏を味わってから世がわかり

柏原市 森吉留里恵  
ウォーキング地球一周するつもり

神戸市 輿水 弘  
病床の妻を明るく照らす月

米子市 中原 章子  
暦年から十五を引いて闊歩する

枚方市 寺川 弘一  
老化とはゆるみ始める部分品

大阪府 米澤 俣子  
転がった丸い葉に噛われる

鳥取市 土橋 螢  
遺伝子をゆすつて母を思いだす

和歌山市 福本 英子  
ぶつぶつと心の中を吐いている

河内長野市 坂上 淳司  
原発の事故は想定外ですか

鳥取市 坂本とも湖  
復興のリード総理が生ぬるい

米子市 生田 寒之  
政治主導と空念仏が陸奥路行く

八尾市 前田 紀雄  
困難に政党助成廃止せよ

西宮市 泉水 冴子  
原発記事オール電化にした矢先

鳥取市 春木圭一郎  
被災地に悪いが酒肴旨すぎる

和歌山県 森下よりこ  
東北の町の名前をみなおぼえ

東大阪市 北村 賢子  
わが家で食べて寝られることが幸

和歌山市 柏原 夕湖  
パチンコ屋君を忘れるために行く

堺市 澤井 敏治  
ニイハオとレンタルパンダ笹を食む

鳥取県 斉尾くにこ  
長話はいといいえで切り抜ける

京都市 坪井 孝一  
妻からの真面目な話身構える

長岡京市 山田 葉子  
頼まれたことだけやって距離たもつ

尼崎市 春城 年代  
孫ほどの子に眉のかたちを褒められる

青森県 松山 芳生  
しあわせになるまで便座磨いてる

和歌山市 喜田 准一  
丸くなり過ぎたと思う昨日今日

堺市 西村りつえ  
手際よく仕事が進む夫の留守

奈良市 矢野 良一  
丸い顔丸い目をした孫が来る

大阪市 大川 桃花  
裏無地の広告捨てぬエコライフ

堺市 荻野 象山  
住みついた猫に女房乗っ取られ

倉吉市 山中 康子  
辛いにお元氣そうはむとする

四條畷市 吉岡 修  
華やかに送ってくれたけど左遷

茨木市 藤井 正雄  
二度の職薄い酸素を我慢する

鳥取県 岩崎 和子  
眉毛足し顔の造作まあまか

寝屋川市 岡本 勲  
年金が生きてますかと聞いてくる

塩竈市 木田比呂朗  
年金で見当つけるエピソード

河内長野市 木見谷孝代  
ダイヤ買ってお金歯医者につきまんだ

橋本市 石田 隆彦  
余裕があるとは限らない金持ち

鳥取県 山下 節子  
整理券持っても並ぶ癖がある

大阪市 坂 裕之  
ほんとかない丁寧すぎるご挨拶

大洲市 花岡 順子  
悪人が悪人らしい時代劇

富田林市 山野 寿之  
褒め言葉たくさん詰めておく弔辞

堺市 近藤 治子  
溝さらい近所総出の社交場

米子市 小塩智加恵  
また今度言えはまたねと言つてはし

堺市 羽田野洋介  
自分史のいやな想い出断捨離へ

高槻市 乙倉 武史  
断捨離は向かぬ私は未練派で

松江市 松浦登志子  
毛虫にも都合あるけどこつちにも

堺市 山本 半銭  
石段の下で御利益考える

鳥取市 有沢せつ子  
日々多忙日記の文字が徐々に減る

河内長野市 辻村 ヒロ  
花吹雪女優の顔で歩き抜く

高槻市 初代 正彦  
メール癖か手紙の時もつい簡素

日高市 根岸 方子  
風薫るテニス日焼けもなんのその

米子市 高田 振作  
昔へチマ今はゴーヤの夏すだれ

三田市 石原 歳子  
乾燥の肌へごくごく水を飲む

箕面市 出口セツ子  
観光客減った実感無い洗濯

宇部市 平田 実男  
原因は加齢内科に歯科眼科

米子市 白根 ふみ  
人間に泣かされ人間に救われる

河内長野市 梶原 弘光  
しかるべき時は突然やって来る

鳥取県 大塚美代子  
少子化に老いの意見は疎まれる

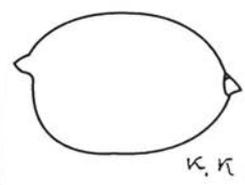
高槻市 安田 忠子  
遠方の友より新茶届き初夏

共選欄

檸檬抄

(薰風書、カットとも)

(投句 七六八句)



「不揃い」 三宅保州選

不揃いの声で原發大丈夫  
 政府発表不揃いだからよく分かる  
 大津波をどう躲したかボラの群れ  
 堪えている戦後を噛んだ乱杭菌  
 憲法がまだ不揃いに噛まれてる  
 不揃いは平和の証かも知れぬ  
 不揃いでジャムに変身した苺  
 胡瓜もみするのに形問いませぬ  
 豆を撰るいびつを母は捨てきれず  
 田の草も混じる老母の春野菜  
 不揃いを承知で貰う雨宿り  
 不揃いの茄子一山でさらす首  
 不揃いのリングが今も出て行かぬ  
 不揃いのてるてる坊主雨飛ばす  
 不揃いの胡瓜に愛をもう一度

西宮市 片山 忠  
 堺市 加島 由一  
 堺市 柿花 和夫  
 紀の川市 辻内 次根  
 唐津市 仁部 四郎  
 東かがわ市 川崎ひかり  
 高槻市 島田千鶴子  
 大阪市 川端 一步  
 美作市 福原 悦子  
 神戸市 山崎 武彦  
 鳥取市 土橋 睦子  
 三田市 久保田千代  
 松江市 石橋 芳山  
 枚方市 小林 わこ  
 豊中市 源田 啓生

「不揃い」 山本希久子選

不揃いでございませすけど自分の齒  
 仲の良い駄馬に駿馬の子沢山  
 不揃いの茶碗家族の愛をもる  
 食卓へ誰かが欠ける大家族  
 不揃いのリングそれぞれでかい夢  
 三世代違う時計の暮らし向き  
 価値観が揃わないからおもしろい  
 不揃いの皿から妻は投けている  
 しがらみを濾過して不揃いを糺す  
 不揃いの家族が集う盆と暮れ  
 不揃いも個性と言えば光り出す  
 身も蓋も不揃いですが仲が良い  
 同じ人二人と居ない神の技  
 紙幣硬貨混じる市民の義援金  
 不揃いの靴に躓を問われてる

樺原市 居合真理子  
 堺市 志田 千代  
 出雲市 小白金房子  
 堺市 羽田野洋介  
 弘前市 今 愁女  
 柏原市 森吉留里恵  
 鳥取市 土橋 螢  
 橋本市 石田 隆彦  
 大和郡山市 坊農 柳弘  
 豊中市 松尾美智代  
 鳥取市 春木圭一郎  
 大阪市 柴本ばつは  
 西宮市 亀岡 哲子  
 岐阜市 平野あずま  
 神戸市 山崎 武彦

|   |                |
|---|----------------|
| 不揃いの皿だが愛が盛つてある<br>肩出してシヨートスカート長ブーツ<br>バスツアー靴が片方違つてる | 和歌山市<br>福井 菜摘  |
| 不揃いの靴を揃えるさりげなさ                                      | 東京都<br>岸野あやめ   |
| 不揃いの靴下も履く子沢山  | 東京都<br>若松 雅枝   |
| 孫去ぬと手書きの駒がまた増える                                     | 鳥取県<br>齊尾くにこ   |
| まちまちに踊る園児のしたり顔                                      | 姫路市<br>古川 奮水   |
| 不揃いの箸で味見をする夫  | 岸和田市<br>藤原 昭   |
| 突っこんでばけていつしかタイヤ婚                                    | 田辺市<br>岡本 昇    |
| 三世代連う時計の暮し向き  | 紀の川市<br>北山 絹子  |
| 同じ腹痛の出来る子出来ない子                                      | 河内長野市<br>村上 直樹 |
| 出来不出来どの子もお腹痛めた子                                     | 柏原市<br>森吉留里恵   |
| 不揃いのユニフォーム着る草野球                                     | 和歌山市<br>福本 英子  |
| 敵ながらアツパレ受けた変化球                                      | 羽曳野市<br>吉川 寿美  |
| 不揃いでオールスターとからかわれ                                    | 京都市<br>清水 英旺   |
| 積ん読の中に漫画や哲学書  | 犬山市<br>吉田 幸子   |
| 礼服も平服もいて温かい   | 堺港市<br>中井 虎尾   |
| 不揃いを合わせて石垣の見事                                       | 西宮市<br>泉水 牙子   |
| キグチコヘイが下手で足並み揃わない                                   | 三田市<br>堀 正和    |
| 不揃いの文字わたくしの負け惜しみ                                    | 羽曳野市<br>徳山みつこ  |
| 身も蓋も不揃いですが仲が良い                                      | 鳥根県<br>伊藤 寿美   |
| 同じ人二人と居ない神の技  | 藤井寺市<br>太田扶美代  |
| 価値観が揃わないからおもしろい                                     | 大阪市<br>柴本ばつは   |
|   | 西宮市<br>柴本ばつは   |
|   | 鳥取市<br>土橋 螢    |

|                   |                |
|-------------------|----------------|
| 六地藏個性が有つて有難い      | 鳥取市<br>森山 盛桜   |
| 不揃いの真珠ブライド捨てられぬ   | 大阪市<br>笠嶋 恵美   |
| 不揃いの碗でも温いお味噌汁     | 和歌山市<br>福本 英子  |
| 頭髮は不揃いだけど同期生      | 大阪市<br>鶴田 遠野   |
| 不揃いもいいね羅漢に癒される    | 大洲市<br>中居 善信   |
| 抜け駆けはしないが迎合もしない   | 河内長野市<br>山岡富美子 |
| 不揃いがなくなるように世界地図   | 尼崎市<br>藤井 宏造   |
| 男と女の視線は揃わない       | さいたま市<br>星野 育子 |
| 不揃いを競い合つてる抽象画     | 京都市<br>坪井 孝一   |
| 不揃いがファッションになる軽い街  | 八尾市<br>高杉 千歩   |
| 団地から十人十色灯が点る      | 和歌山市<br>土屋起世子  |
| 不揃いの右と左が助け合う      | 寝屋川市<br>富山ルイ子  |
| はみだした君の個性が光りだす    | 篠山市<br>酒井 真由   |
| 不揃いが心ひとつにボランテニア   | 香芝市<br>大内 朝子   |
| 正論がひとり交じつて苦い酒     | 米子市<br>竹村紀の治   |
| ぎこちないかたちが温いにぎりめし  | 青森県<br>松山 芳生   |
| 不揃いのパーツだけと味な顔     | 鳥取県<br>細田 裕花   |
| キグチコヘイが下手で足並み揃わない | 鳥根県<br>伊藤 寿美   |
| 各論になると足並み揃わない     | 堺市<br>村上 玄也    |
| 不揃いの方が絵になる夏野菜     | 三田市<br>上垣キヨミ   |
| 不揃いの楽器が紡ぐハーモニー    | 豊中市<br>藤井 則彦   |
| DNAのいたずらだろう姉妹     | 香南市<br>桑名 孝雄   |
| 不揃いなファッション調和さす若さ  | 京都市<br>榎本 宏子   |

行く先も終りも違う人の旅

大阪府 岡本 花匠

不揃いと言わず個性と言いたいね

福島県 七ツ森客山

不揃いの個性引きだすのが教師

鳥取市 夏目 一粋

不揃いの右と左が助け合う

富山県 富山ルイ子

不揃いが円陣組んで大拍手

富田林市 関 よしみ

どんぐりのてんでんばらばらに転ぶ

海南市 小谷 小雪

各論になると足並み揃わない

堺市 村上 玄也

歩が揃わなくて税が上がらない

西予市 黒田 茂代

駆り立てるものあり普段着で走る

河内長野市 山岡富美子

アシンメトリーな花器で床の間お洒落さす

海南市 堂上 泰女

千枚田千の形を見て飽きず

鳥取市 岸本 宏章

遅咲きもいいものですよ花便り

弘前市 高瀬 霜石

男と女の視線は揃わない

さいたま市 星野 育子

ちくはぐな言葉を戻す胸の内

大阪狭山市 矢野 梓

しがらみを濾過して不揃いを糺す

大和郡山市 坊農 柳弘

不揃いな指で明日を受け止める

松江市 松本 文字

不揃いのりんご人間やめられぬ

神戸市 白川 淑子

休耕が目立ち田毎の月かける

日高市 根岸 方子

不揃いでいい 兵隊にはさせぬ

橿原市 居谷真理子

好きな色から順ぐりに減る絵の具

大阪府 米澤 俣子

バラバラの意見まとめて串に刺す

河内長野市 梶原 弘光

ばらばらな家族束ねた大地震

塩竈市 木田比呂朗

秀句

フクシマ産不揃いですが召し上がれ

大阪府 近藤 正

肩出してショートスカート長ブーツ

東京都 岸野あやめ

不揃いの初音を聞きに万歩計

和泉市 横山 捷也

バラバラの意見まとめて串に刺す

河内長野市 梶原 弘光

不揃いな指で明日を受け止める

松江市 松本 文字

定年は一緒おくやみ揃わない

鳥取市 竹信 照彦

不揃いながら幸せ送ってきた夫婦

尼崎市 春城 年代

揃わない足音不満あるらしい

出雲市 伊藤 玲子

胡瓜もみするのに形問いません

大阪市 川端 一步

不揃いの新芽伸びたい方を向く

長岡京市 山田 葉子

親友と言っても揃わない歩幅

八王子市 播本 充子

粒揃いの子等では無いが元気でず

河内長野市 針生 和代

不揃いの合唱老いの気は若い

米子市 生田 寒之

不揃いを束ねるリーグアの個性

豊中市 江見 見清

休耕が目立ち田毎の月かける

日高市 根岸 方子

キラキラの個性まぶしいランドセル

高知市 小川てるみ

不揃いなトマト胡瓜の健康美

東京都 井上つよし

我が家では妻も野菜も規格外

大阪府 寺井 弘子

千枚田千の形を見て飽きず

鳥取市 岸本 宏章

不揃いの十指それぞれ役がある

京都市 高島 啓子

人生のライندگانが揃わない

大阪市 岩崎 公誠

不揃いを合わせて石垣の見事

羽曳野市 徳山みつこ

秀句

# 人物しまね文学館

— 尼 緑之助 —

竹 治 ちかし

全国各地に数多くの句碑が建っている。しかし国立公園内に建立されているのは少ないのではないだろうか。大山・隠岐国立公園内に建つ緑之助の句碑、これは緑之助の人徳であり、人脈の結果である。

出雲大社の稲佐の浜から、日御崎に通じる奇岩や絶壁の続く島根半島西部の美しい海岸、そこに石積みでは東洋一の高さといわれる灯台がそそり立つ。そこから天然記念物のウミネコの繁殖地、経島に通じる散歩道を行くと、途中に石碑（昭和四十八年五月十三日建立）は建っている。ちょうど古くから出雲の地に語り継がれてきた出雲神話を、抱き寄せるがごとく、夕陽に向かつて建っている。句碑には、昭和四十六年の川柳塔の最優秀作品、路郎賞を受けた句が緑之助の直筆で刻まれている。

燈台の夕陽神話を抱きよせる

緑之助は、明治四十年六月十一日、簸川郡

高松村（現の出雲市）の伊藤家で生まれ、大正十五年、地元村役場へ勤める。同年の十月、尾添雷相と共に「たかせ会」を興し本県の川柳界に清新の気を注入、期待される人材としての評価を得る。その後、現代川柳界の六大川柳作家と呼ばれる一人、麻生路郎主宰の「川柳雑誌社」に入り才覚を認められ、同人に推され同社の簸川支部長となり昭和二年、何もかも捧げたようにバラ散りぬ

すべて絵にもなき月の小川なる

の秀作を発表。持ち前の豊かな詩情を川柳に投入、逞しく成長の過程を示すに至る。

昭和六年、尼家に入り尼緑之助として、翌七年には不朽の佳吟と言われる

雪降る——出雲製織株式会社

を発表、並々ならぬ資質の高さ、豊かさを注目される。

以来、麻生路郎の「川柳は人間陶冶の詩である」、「命ある句を作れ」、の訓を遵守。昭和四十六年県川柳協会発足に伴って副会長に推され、また県文芸協会の理事に就任する。会長の柴田午朗と共に、川柳協会の会員の指導育成に努める。自ら主宰する「川柳いずも」によって、多くの後進に川柳を指導する。そして麻生路郎の十哲の一人として数えられ

る。昭和五十九年句文集「生かされて」を上梓、書中の随所に高風かつ誠実な人柄があふれている。

「真実

は昔も今も変わらない。率直に人間らしさを詠めば、人の心を打つ句になる」と語り、初心のみずみずしい心を常に維持する。昭和六十二年十月十八日には、出雲市文化奨励賞を、ついで同月二十三日、県教育委員会より文化功労賞の表彰を受ける。

その後も、後進の指導育成に、また創作にと、川柳活動に東奔西走し、県内の各地に川柳会を興させると。常に謙虚で、父祖の地を愛し、家庭を愛し、人を愛し、川柳を愛し続けてきた緑之助は老成枯淡の道を歩いて行く。

その中において、代表的な

人は皆善なり向かい合ったとき

の句も発表する。

昭和六十三年四月、享年八十一歳にて逝去。



# 誹風柳多留一篇研究 71

伊吹和男・山田昭夫  
増田忠彦・山口由昭

小栗清吾

清 博美

554 毬もつきあきると屋根へ投げてみる

伊吹 あまり長く鞠突きをしていると飽きてきて、何か変わったことがしたくなり、その鞠を屋根に投げてみる。

椽類を娘のいざる松の内

傍三六

小栗 日常よくある光景を細かく観察した句、というやつですか。

清 賛。

555 八朔を逃れて偏の無いをくい

伊吹 遊女からの誘いを断り、紋日の八朔に登楼せずに済んだと思ったのに、十五夜や十三夜の月の紋日を断りきれず、結局は散財す

る破目となつた。「朔」の字の旁の「月」を食らつたと表現した句作。

八朔を喰ぬと篇の無いを喰イ

一四二・三三

あまり間の無いハ白無垢お月様

拾七・二四

清 賛。

556 黒猫にとうくするめ引かせたり

伊吹 労咳（結核）の患者が黒猫を飼うと、病に効ありと信じられていた。また労咳は、思春期の気鬱症だと思われていた。だから黒猫の飼い主とその恋人の婚約が成立したというのが句意。鯛引かせるは、結納の品の中の一つである鯛を引き寄せる。猫が鯛を啜えて逃げたという表現を借りている。

烏猫めでたく喰ふハするめ也

四九・二六

清 賛。 御目出たいするめを喰た烏猫 二二四別19

557 御寵愛外へハつうんとする

伊吹 殿様だけには心底尽すけれども、そのご寵愛をいいことに、その他の奥様や家中のものたちには、取澄まして無愛想な態度を示すお妾さま。

おめかけの威勢ハ股で風を切り

二六・二六

清 賛。

558 古市の前ン日石がものをいふ

伊吹 言葉や音をよく反響させる鸚鵡石の句。伊勢国度会郡一ノ瀬郷中村（現在の度会町）のが有名。「伊勢参宮名所図会」巻之四に「石は山の半腹に偃然たり。その高さ十余丈ばかりにて青黒なり。その右手百間も有るべき所に甍などしき、その岩の上に居て言ひひ、あるいは弦歌鼓吹の声にも、石中に物有りて答ふるがごとし」などとある。伊勢参りの途次、古市に到着する前日に鸚鵡石の前を通ると、石が言葉を反響しているのを聞くことになる。

晩ハ古市だと石がものをい、

三二・一五

清 以前、わざわざ見に行つたことがありますが、さもない岩ですネ。

559 土筆売り姉八田楽やいて居る

伊吹 野掛けなどしている人たちを客とする土筆売りの姉は、これも同じような人たちに売るため、田楽を焼いている。恐らく幼い姉妹が柿弟であろう。

あどけない商人筆をおつ付ける 二三四  
田楽を焼うち拾ふさくらんば 傍四四

清 贊

560 借ツ金も三年やらぬ孝の道

伊吹 『論語』卷第一学而第一と卷第二里仁第四にある、父が亡くなつてから三年間は父の方針に従うという意味の「三年、父の道を改むること無きを、孝と謂うべし」からの句作。それなら借金も、父の死から三年しないのが、親孝行であると。

座頭へも三年なきぬ孝の道

傍三四

山口 「やらぬ」は「しない」の意ではなく「遣らぬ」ではないか。父親が借金を払つていないので、孝の道に従つて俸も三年は払わないという滑稽では。

小栗 山口説の方が面白い。例句も同じような意味でしょう。

清 山口説です。

361 それた毬取にくる迄けて笑ひ

伊吹 下手の蹴鞠、下五の訓みは「げて笑ひ」か。とても飛んで来そうにない所から鞠がきたので、拾い手は鞠の持主が取りに来るまで、大笑いをしている。

どつくと笑ふを見れば下手のまり

明八七一

増田 「下五」は「蹴て笑い」でもよいか。

山口 同右。「蹴て笑い」と讀まないと意味が通じない。

小栗 同右。

それた鞠取りに来る迄蹴て遊び 二二二四

は、焼直しましょうか。

清 贊。

562 うまそうに煮るをみれば木綿也

伊吹 よその家で何かうまそうに煮ていると思つてよく見てみると、汚れを落すため灰汁で木綿を煮ていた。

うまそうに何やらにへる雨やとり 九三六

もめんになる音をとなりてうまく聞キ

拾九二五

小栗 贊。精練あるいは染色の過程で、灰汁で煮る手法が使われたようですね。

清 贊。

564 尻まくりくらとハあらい哥がるた

山田 女同士の歌がるた。着物を着ているから、勢いよく札を取ろうとすると、着物の裾が大きく乱れる。それがあたかも、尻を捲りくらしをしているようだというのだろう。活発な女性たちのようだが、そこに男でも加わつて居たら、そのような光景とはならないであろう。

哥がるたおれが先だとおしたおす

明六鶴二

小栗 よくわからぬが、荒っぽい札の取り方をしたために、札が一枚行方不明になつてしまったので、お互いに裾のまくりくらしをして探している光景ではどうか。

哥がるた乳母がおいどを度々せんぎ

安四義五

清 礎稿贊。本格的なカルタ取りは、かなりハードな格闘技のようである。

歌がるたにも美しい意地が有り 宝九義



中流の意識も所詮泡だった  
不用意な発言会を泡立てる  
小気味よくひと泡吹かす王手飛車  
マニフェストどうやら泡と消えそつな  
焦らされるのは嫌泡もわたくしも  
後生大事に抱いていたのはあぶく  
まっ白な泡まっ黒をさらし出す

宏章  
玄也  
正雄

泡粒のような疑念が胸を刺す  
飲むごとに泡を透かして見たラムネ  
ぬるま湯のボディソープは泡立たぬ  
洗つても洗つても泡立たぬ顔  
泡たてて私の彩が抜けてゆく  
泡沫の恋におんなを解き放つ  
泡でいい一縷の望み賭けてみる  
遺言の伏せ字に泡が浮いている

美津子  
ミツ子  
小雪

冥土まで泡立つものを持ってゆく  
おだたられ奥の手ちよっと泡を吹く  
泡ふいて蟹は月夜に爪を低く  
鯉呼吸できてわたしも管理職  
ゲルニカよ黒く叫んで蟹の泡

高 明  
俣 子  
くにこ  
志 千 代  
美 惠 子

泡立つもの沈めゆつくり無に還る  
熟成中泡は雑念吐いている  
千年の泡を吹かせる大鯨

裕 花  
富 子  
芳 山

軸  
天  
今 愁 女

千 子  
一 風  
雅 明  
霜 石  
富 子

佳  
慕 情  
光 久  
朝 子  
光 久

干 子  
一 風  
雅 明  
霜 石  
富 子

佳  
慕 情  
光 久  
朝 子  
光 久

干 子  
一 風  
雅 明  
霜 石  
富 子

ライン

樋口 輝夫 選



蝸牛光るラインで自己主張  
下馬評は当確ラインだった筈  
一線を引いたおんなの言葉じり  
アイライン妻も驚く若返り  
アイライン強めに入れて散る火花  
ウエストのくびれ想像するラムネ  
右左洞が峠陣を張る  
祝福の目を集めてるマタニティ  
ラインから外れ男の背が丸い  
数々の名曲生んだライン川  
泳ごうとしない渚の曲線美  
二つ目のお化けのようなアイライン  
生と死の境界線でふるうメス  
赤線を引いて覚えたコンサイス  
どの線も当たりと思わせるアマミダ  
塾かばん親のラインが子に重い  
救助隊指揮系統が命綱  
寝られない当落線にある候補  
ここまでは津波がきたというライン  
一線に並ぶとフツフツ湧く闘志  
棒線を引き出すつばり諦める  
復興の狼煙三陸ラインから

親の敷くレール走らぬ子に育ち  
応援歌涙で溶けたアイライン  
ラインダンス清く正しく脚高く  
スタートのラインを知らぬ七光り  
一線を引いて同居の嫁姑  
ボディーライン年々崩れていく恐さ  
社長まで続くラインへ汗と運  
大道芸先ず半円のチョーク引き  
嘘泣きをしても落ちないアイライン  
合格のラインに遠い塾通い  
ラインから外れ気ままな影法師  
スタートライン口をへの字に結ぶ子等  
出発のラインは同じランドセル  
センターライン越えねばならぬ時がある  
ボーダーラインすれすれですと検診値

弘 子  
高 明  
正 彦  
俣 子  
蜂 朗  
寿 之  
東 吉  
古 拙  
千 恵 子  
光 久  
ま み 子  
和 郎  
キヨミ  
勝 視  
としお  
と し お

勇  
高 明  
正 彦  
俣 子  
蜂 朗  
寿 之  
東 吉  
古 拙  
千 恵 子  
光 久  
ま み 子  
和 郎  
キヨミ  
勝 視  
としお  
と し お

おんなを解き放つ  
泡でいい一縷の望み賭けてみる  
遺言の伏せ字に泡が浮いている

朝 子  
光 久  
慕 情

おんなを解き放つ  
泡でいい一縷の望み賭けてみる  
遺言の伏せ字に泡が浮いている

朝 子  
光 久  
慕 情

おんなを解き放つ  
泡でいい一縷の望み賭けてみる  
遺言の伏せ字に泡が浮いている

朝 子  
光 久  
慕 情

おんなを解き放つ  
泡でいい一縷の望み賭けてみる  
遺言の伏せ字に泡が浮いている

朝 子  
光 久  
慕 情

おんなを解き放つ  
泡でいい一縷の望み賭けてみる  
遺言の伏せ字に泡が浮いている

朝 子  
光 久  
慕 情

おんなを解き放つ  
泡でいい一縷の望み賭けてみる  
遺言の伏せ字に泡が浮いている

おんなを解き放つ  
泡でいい一縷の望み賭けてみる  
遺言の伏せ字に泡が浮いている

# 初歩教室

題 — ますい

鈴木公弘

「二であり次は二であり三である」  
これは「句」です。説明句の典型的なパターンです。このたびも散見されました。

## 【推こう不足の句】

原 顔をむけ口つむぐ老母味ますい とも湖  
添 不味くてもますいと言わぬ老母であり  
原 味付けうすいと思ふ馴れないと 綾乃

添 うす味の味噌汁ますいかもしれぬ  
原 旅行先まずい人にバツタリと 宏之  
添 旅行先気まずい人にバツタリと

原 まずいなあこんな事言う我が宰相 加修子  
添 まずいなあ立場を知らぬわが総理  
原 支持率もまずい一言上下する 正二  
添 まずいこと言つて支持率下げている

支持率が上がるのは通常、よいことです。  
原 祖父食すますいとおかわりも 山久子  
添 ますいとお代りをして食べる  
句としては「祖父」でなくともいいです。

原 初舞台まずい芸でも先き楽し 孝明

添 初舞台今まずくても先がある  
原 花が咲き話長びきバスが来る こそえ  
添 バスを待つ間に花が咲いて散る  
原 ゆつくりと監視カメラが増えてる 志延  
添 一つづつ監視カメラが増えてゆく

原 点眼の手もとくるうや老ますい 宮俊子  
添 点眼の手元くるうって泣き続け  
原 古い一人まずい粗食で古稀のみち 勝治  
添 古い一人まずい食事の古稀のみち

「ますい」と「粗食」は似た言葉ですね。  
【もう工夫ほしかった句】  
原 あれ以来あれこれ言わず食べてます 弘  
添 叱られてあれこれ言わず食べてます  
原 マジックショー観客席で種明かす 起世子  
添 マジックショー観客席が種明かす

原 こつそりと粗品に連れられた返事 エミ  
添 欲深し粗品に釣られ返事する 清  
原 まずいかこ全部わすれて立ちあがる  
添 まずい過去すべて忘れて立ちあがる

原 まずい事も吞んでくれます太つ腹 朗宣子  
添 まずいこと吞んでくれます太つ腹

【入選句】  
旨いとか不味いと言える平和知る ちづる  
下5を「平和です」にしてもOKです。  
ますいなと言えは食事にありつけぬ 温子  
今月も没の山です 一行詩

あらずい破いた書類裏張りに 妙子  
登美子

盗み酒うつかり顔が証明す 和幸  
下5を「ほえんだ」でもいいでしょう。  
気まずさに耐えてた正座悲鳴上げ 安子  
訪問のまずい時間に出くわした 美紗子  
お食事中でした…?

顔かたちまずい自画像腕のせい 一泉  
「あつまずい」帰路に気が付く不携帯 備則彦  
運転免許証？ ケータイ？

まずくてもこちそうだった幼き日 眞砂子  
思い出せば泣けてきますよね…。  
原発のまずい報道風評呼び 弘泰

下5が重いので「風を呼び」でいいです。  
新妻のなれぬ手料理まずくても 開子  
効能に引かれてますいジュース飲む 堅坊  
元カノ女裁判員と並んでる 憲彦  
ホントですか…そりゃ有罪ですわ。

達筆の夫逝きまずい字がばれる (後)美恵子  
手持ちをすべて公開してしまいました。説明調になるので、ますいですよ。  
逆鱗に触れて互いにまずいまま (中)章子  
不揃いなメロンの甘味まずくない ミヨノ

遊園地ママと思えばニューハーフ (白)淑子  
検査前晩酌のない夕ご飯 篤  
美味いだろ言われ無言で食べるのみ 敏治  
悲しみの深さ証明味覚なし 冷子

中ですが「深さに届く」としたらどうでしょうか？

取り返しつかぬ原子炉始末劇

のり子

思い切つて糾弾する句を書いてください  
カロリーなど言うからまずくなるお酒

菜摘

こりやまずい口と心が喧嘩する  
葛藤するシーンですね。

孔一

まずい事あつても親子許しあう  
まずいとは口に出せない居候

惠美

名案も後手に回ればまずくなる  
故郷にまずいものなし瀬戸の海

滋彦

一言が足らず会話がまずくなる  
まずくても口に出せない嫁の前

美知江

少し前の句に類想があります。「居候」と  
「嫁の前」だけの違いです。今回は両没にせ

ふみ子

ず、必ず同想・類想が出るということを知つ  
てはしくて、あえて採っています。

松風

ラブレター入れる相手を間違えた  
慣れぬ味にまずいと言えぬ裏事情

一兆

上は「慣れぬ味」でよいと思います。  
大きめの傘が隠した不味い仲

弘光

女房に聞かれてまずい話です  
おだてられその気になったおとし穴

秋星

その気になったのが「おとし穴」の方だと  
考えたら、とても面白い句になります。

一子

霜降りの和牛だまずいはずがない  
かわいそう不味いと言えぬレポーター

治子

食べ物がまずいのか、中継・録画の場面に  
不具合が生じたのか、しっかりと述べてくださ

宏造

い。

被災地を思えばまずい等言えぬ  
まずいかも南下している震源地

律子

まずい面絶えて踏んばる松島や  
夫婦喧嘩義母が居た事忘れてた

高弥生

本音言いしらつとさせた披露宴  
にここに一言居士がやつて来る

武臣

空腹のグルメにまずい物は無い  
手の込んだ料理まずいと言えませず

道子

嘘つけぬ舌がまずいと言っている  
口げんか気まずい朝の膳につく

寒之

やるべきを最後に回す悪いくせ  
だんまりが続いてマグマ満ちてくる

智加恵

原発が壊れてまずい国となり  
迷彩服似あう日本になってゆく

孝代

感情のほとばしるまま主語が消え  
ここだけの話がライブに漏れる

よしみ

【今月の推せん句】  
調合がまずいか愛が育たない

森吉留里恵

どんな場面にも適用できる素晴らしい句で  
す。それなのに推薦句の最初に持ってきたの

紀雄

には理由があります。「まずいか…」とい  
う部分が気になったためです。川柳には俳句

子

のように切れ字によって余韻を出す方法をと  
らないのが一般的だと言われてきました。そ

子

の代わり(?)に「…か」という疑問のかた  
ちを探り入れる句も少なくありません。これ

久美子

ではなく疑問の「…か」は、余韻創出上のテ  
クニックというより、作者の気持ちがあつまつ

ひとみ

ていない状態、とも考えられます。その点を  
注意して句作されるよう、ご検討ください。

真由

情景が見え、速射の顔が見えます。実は次  
の一手(言動)が至難の業というところでは  
よう。黙殺するか詫びを入れるか…。それは、  
この句を詠んだ皆様の「人間性」にかかって  
きます。どうなさいますか。  
本人がいた蔭口の輪のうしろ 大久保真澄  
感性抜群の句に出合いました。思わずうな  
つてしまいました。感性というものは皆様に  
等しくあるのですが、それがキラキラと湧  
きだす時と、巨岩のようになってビクともし  
ない時とがあるはず。サラサラと浅い句  
を作るべきではありません。自分を信じまし  
よう。ただし、日常の眼力養成と視野の拡大  
だけはお忘れになりませんように。  
【私の句】  
傍の目を気にしてまずいこと言わず  
気がつけば他人の駅に降りていた  
(登載漏れ方は役員が添削して返却します)

# 秀句鑑賞

同人吟 喜田准 一

—6月号から

川柳を始めたのは、定年退職後、四年間の

嘱託暮らしの時。元来、体育系の私、物事を深く掘り下げ、分類、整理することは苦手でせつかなタイプ。某紙時事川柳欄に投句し掲載されたのが動機。私の川柳は、思いつきが多く、軽いと思っている。早速秀句鑑賞に移りたい。作者の意に反するコメントは平にご容赦の程を。

守りたいものがあるから嘘をつく

高瀬 霜 石

人としてこれだけは守り抜きたいと思うものがある。肩肘張らずふんわりと柔軟に包み込む人間関係と、明るい嘘で人の幅を広げたものだ。

田空仏みんな集めて笑いあう

牛尾 緑 良

世界は一つ。宇宙は一つ。平和に楽しく生きる原点はみんなの笑いにある。職場で地域で国で笑いの輪を繋げたい。被災した東北の人々にも、心からの笑いが生まれますように。

桜さくら観ているうちに泣けてくる

木本 朱夏

桜を見事に謳いあげた六句の中の一句。いつもながらの言葉の豊かさ、深さに句づくりの教材が増え嬉しく思う。物の見方とその切口、周りとの関係性など胸に響く教材だ。

道の駅やさしくくれる春キャベツ

米澤 俣子

紀勢線のとある駅が道の駅として知られている。駅舎の中で近辺の新鮮な野菜が並べられている。ゆったりと長閑な春の景が浮ぶ。

原子炉へ挑む勇者へ手を合わす

堂上 泰女

使命感に溢れ、防護服に身を固めた作業員の勇姿は、テレビで何度も放映された。目に見えぬ放射線の危険を顧みず、業務を遂行する誇りある日本人に合掌したい。

もう隠せないベクレルシーベルト

播本 充子

表向き情報は全て公開という政府。しかし、

都合の悪いデータや数値は、隠したいのが本音。今回の震災でその実体が表面化した。これからの注目したい。

居酒屋で聞く人生に嘘はない

早川 遯行

五時から男の出番。飲む程に、酔う程に、生の人生経験を語り合うひと時に、喜びが溢れて来る。その生き様に嘘はない。

雑魚だけ選挙で思い届けます

西村 益子

初志を忘れて慣れ合い政治に浸る金パツジ。国民を置き去りに赤絨緞を闊歩している。いつか来る国政選挙で雑魚の思い知らせて見せるとの有権者に共感。

良い話並べられると身構える

小谷 集一

暗いニュースの多い昨今。嬉しい話に思わず乗せられそう。でも待てよもしかしてと、むべなるかなの時代を感じさせる。

ワイルドに生きるフランスパン齧り

山本 希久子

物事に小さくこだわる事なく、野性味豊かに時代を切り抜く婦人像が浮ぶ頼もしい思い。ひきかえ、型に嵌りスケールの小さい男が増えている現実が寂しい。

疑問符を捨てると案になるこの世

籠島 恵子

問題解決へ一つひとつ疑問に照らし、理屈付けしないと気が済まぬ人も見かける。周りの空気も固くなる。もつと気楽に生きれば？との作者の呼び掛けに共感。

耳打ちをされた会議で右になる

徳山 みつこ

あるあるそんな事。喉元まで出た反論も、先刻「ちよつと話が……」と耳打ちされた根回しを思い出し、ぐつと堪えて石になり貝になる。日常あり勝ちな光景。

回り道すこし痺れている右手

伊達 郁夫

夜の裏街をあちこち回り道。行きつけの屋台、スナックの梯子酒。汲み交わす盃を持つ右手が痺れ、足元よろよろ午前様。でも翌朝はしゃきつとご出勤。思い出しますご同輩。

お茶コーヒ容れて友達帰さない

太田 扶美代

話は佳境。腰が浮き掛ける友。今帰られると互いの意志が通じないままになりそう。大人の知恵であの手この手の引止め策。祈！成功。

この国に命預ける不安感

出口 セツ子

日本丸の舵取りたる総理の右顧左眈。国民として政治を託し命預けるには心もと無い心理を率直に詠んだ時事吟。

薬飲むまでが私のフルコース

古久保 和子

腕に選り掛けて作った夕食。おいしく頂き御馳走さまでは終わらない。締めは、お決まりの数種類の薬が欠かせない。フルコースの表現が利いている。

逆鱗に触れて左遷地さまよつた

夏目 一粹

宮仕えでその合わない上司と部下の関係に生れる人間模様の句。命ぜられるままに、唯唯諾諾勤めあげれば善ない。されど男一匹、そんな生き方は己が許さない。現役にも、O Bにも思い当りのある句。

脱線をしたがる僕の影法師

両川 無限

歓送迎会の一次会も恙なくお開き。それぞれ馴染みの店へと繰り込んだ。一軒で帰ると決めた筈なのに、もう一軒、あと一軒と急ぎ立てる。もう止まらない。もう一人の自分の影がよろよろの千鳥足。トホホ。

七坂を越えて苦楽の味を知る

三島 淑丘

宮仕えの悲哀に耐え、家族を守り抜き、男の人生七坂を歯を食いしばり越えて来た。定年を迎え、今更にその苦楽の味をしみじみなつかしく思い出す。平凡なサラリーマン万歳の句。

修羅の顔して仏壇に手を合わす

松本文子

職場でも、家庭でも、近所でも、笑顔で過す日もあれば、トラブルに巻き込まれ、腹の虫が収まらぬ事がある。その時の顔は、さぞ怖く引き吊つたままかも。仏様も凡夫の常と苦笑して許されよう。

その他、心に残った秀句：。

浮き袋つけて溺れる人もいる

小沢 淳

被災地の背中押す手が世界から

古今堂 蕉子

汗いっぱいあれが原点なんだろう

岩佐 ダン吉

欠点の一つをバネにとんでみる

清川 玲子

計算ドリルなんぼか落ちた脳の錆

福士 慕情

気遣ってひっそりと咲く花街道

山岡 富美子

水煙抄

秀句鑑賞

— 6月号から

三浦 強 一

目に見えぬ敵に怯えるシーベルト

山室 光弘

東日本大震災からの一句。地震・津波・原発事故の三重苦の災害。特に原発事故は発生の二か月後も解決の見通しが立っていない。原発の洗礼を受けた国が、再び放射能に怯えるとは。憎つくきはシーベルトである。

世渡りが下手でまあるい握り飯

高森 一 吞

握り飯は器用に握った三角形でなくてもいいのです。三角のはコンビニへ行けば売っています。それより愛情が握ったまあるい握り飯がうまいのです。

深呼吸わたしが徐々によみがえる

上田 ひとみ

公園の朝のラジオ体操。新鮮な空気を胸いっぱい吸い込む心地よさ。細胞もすっきりと目覚め、ファイトも湧いて来ますね。

こんがりと幸せ色にパンが焼け

福井 菜摘

こんがりとパンが狐色に焼け、熱いコーヒーの香りが漂う。幸せな一日を予感させられる朝のひと餉。

いよいよとなつて地デジと御対面

磯部 義雄

頑張りましたね。アナログで何の不便も感じなかったのに。アナログ廃止ぎりぎりまで意地で代えなかったんですね。もったいないの時代を生きた者たちの納得の一句。

支援するためにどんちゃん騒ぎする

生田 寒之

金を使えば企業が儲かり、国の税収が増え、被災地への支援もスムーズになると、三段論法でできましたか。黙祷は忘れずに。

折れそうな心に副木して生きる

山本 ふみ子

心の副木、それは川柳ですね。柳友同士が互いに副木となつて、励まし合いながら明るく人生を送りましょう。

客扱いせぬ持て成しが温かい

三浦 千津子

心を開いた振る舞いに、客もリラックスして、心が通じあうものです。こんな持て成しなら受けたいです。

酔っ払い無口な父が壺を切る

佐藤 登美子

普段寡黙の父も、時には酒で上癮嫌となり、喋るわ喋るわ。家中が明るくなり、家族の幸せのひと時。下五が利いている。

ブリ大根昔話を入れて煮る

有澤 嘉晃

里の母が上手であったブリ大根の煮つけ。まだ母の味には及ばないが、昔を偲んで煮ている様子が中七から窺われます。

襦袢には和服の君がよく似合う

澤井 敏治

橘高薫風先生の恋人の膝は襦袢のまるさかなの句がすぐ浮かんだ。女性が正座した時の襦袢のまるい膝はやはり和服ですね。

逃げぬようケータイ持たせ放し飼ひ

岡本 勲

カルチャーへ、女子会へと翔んでいる奥さん。放し飼ひしていると言うが、実は逃げられはせぬかと心配でケータイという鎖をつけているのです。ああ、弱者よ。

まつてや死ぬ時言うて愛してる

助川 和美

思わず吹き出した一句。最後にありがとうという句には食傷気味であるが、愛してるには脱帽。ユーモアがいい。



## 大震災をどのように詠うか？

地震の主な原因は、「地下の岩盤のずれ」であることは、地球物理学の研究結果として広く知られています。念を押すまでもなく、人間の所業とは無関係の自然現象です。

にもかかわらず、このたびの東日本大震災に対しては、「驕り高ぶった人間への天罰」とか、原発を生んだ「科学万能に対する大自然の報復」などという声が、しばしば聞かれます。某知事がそのようなことを口走って、後ほど陳謝したのもご承知の通りです。

普段は論理的に考えている人でも、人智では制御できない巨大な自然現象に対しては「大いなるものの仕事ではないか？」と、理屈に合わないことを考えるのは、人間の弱いところですが。想像を絶する甚大な被害を前にして、揺らぎ過ぎた感情が理性を押しやってしまうのでしょうか。

このような「天罰」とか「大自然の報復」という想いは、誰にも多少はあります。それは、自らを戒める「自省」であり、科学万能などという驕りを糺し、謙虚さに繋がるのであれば、胸中にある限りは否定することもありません。

しかし、その「胸中の想い」を外に出すときには、慎重に配慮しなければなりません。津波で親を失った子供たちや、家屋を流された人たちが、その原因が「天罰」であると言われたなら、どれほど悲しいことでしょうか。

もしも、「天罰」と言うのであれば、「なぜ、私ではなく、あなたがたが罰を受けなければならないのか」を、論理的

に説明しなければなりません。もちろん、それは不可能ですから、「天罰」とか「自然の報復」等とは、軽はずみに言うべきことはありません。では、次の句はどうでしょうか。

大地震神の試練は容赦なし

人間よ驕るなかれと大地震

侮った人間嗚う大津波

平和ボケ治してくれた放射能

右の作者それぞれ、「被災者に言っているのではなく、自分の想いを述べただけ」でしょう。「想いを述べる」のが現代川柳ですから、間違った詠い方ではないはずですが。

しかし、被災者からは「何と非情な……」「私たちの悲しみが分かっていない」と非難される恐れが多分にあります。

作者としては、被災者を傷つける気持など毛頭ないのに、なぜ、被災者から見ると「非情な句」になるのでしょうか。

それは、作者が実際に被害に遭ったわけではなく、ニュースの映像を見て感じたことを述べているだけだからです。何の被害もない平和な茶の間で、いくら被災者の状況を推定しても「客観的で現実離れした想い」しか浮かんできません。もしも、作者が津波で肉親を失った立場であれば、右四句のような想いは絶対に浮かんで来ないでしょう。

「震災は詠わない。それが被災者への私の想いだ」と言う人もいます。それも一つの見識でしょう。しかし、川柳を表現手段とする私たちとしては、「川柳によって大震災に対する自分の想いを残したい」という気持も理解できます。ただ、その場合は、「この句を被災者が読んで、どう感じるか？」と慎重に見直す必要があります。



# 高瀬 霜石の津軽おむら景色

奇数月の連載になります。

## ぶとぶの巻 ④

「一番じゃなければ駄目なんですか？ 2番じゃ駄目なんですか？」の質問で、世の響を買った女性議員がいた。

美人の彼女は、確か大学の後輩なので、悪口は言いたくないが、2番でいいやなんて思ったら、3番や4番は勿論、上位もおぼつかなくなるのが現実だろう。

我が弘前市には、自他共に認める「日本一の桜」がある。「川柳塔みちのく」の記念大会に来て、それを実感して下さいた柳友諸兄が沢山おられるはずだ。

ただねえ。全国に桜の名所はわんさどあるので、絶対的な1番——死ぬまでに必ず行ってみたいという程のインパクトには残念がらならない。それが残念なところ。

日本一の桜が咲き乱れる弘前公園は、起伏に富み、広さは皇居の半分ほどもある。津軽人の99%は、天下の三大名園にするものと、心の底では思っている。

昔のまんまの三重の堀が現存し、こぶりが「本物のお城」を誇りに思っても、国宝の姫路、彦根、松本、犬山の前ではかたなした。鉄筋コンクリートのくせに、妙に威張っている大阪、名古屋、熊本などは、緑高に格段の差があるから頭が上がないのが悔しい。因みに、弘前藩は10万石。

最近の売りは「洋館とフレンチ」なのだが、これも正直、洋館となると函館、横浜、神戸、長崎などの足元に遠く及ばない。かくも、1番は難しく、道は遠い。

一般に、青森といつて思い浮かぶのは「ねぶた」だろう。詳しく書くと、青森市のあの跳ねて賑やかな祭りが「ねぶた」。弘前の方は「ねぶた」といい、もつとお「そか」。

よく言えば勇壮・優雅。悪く言えば、地味で金太郎飴。そんなこんなで、知名度も集客力も、青森市には負ける。

最近では、派手な五所川原市（立ちネプタ）も人気があるので、ノホンとはしてられない。2番でいいやなんて思っていると、寝首をかかれるのが世の常だ。

長い間、弘前ねぶたの鏡絵に描かれてきたのは「三国志」と「水滸伝」である。日本列島の北の果てに、血沸き肉踊る中国の2大ドラマが、今も賑々と息づいているのだから面白い。企画次第では、弘前はこの2つの物語のメッカ（聖地）になれるかもだ。そうなれば、しめたもの。すぐに「1番」になれるではないか。ハ、ハ、ハ。

「三国志」最大の戦いである「赤壁の戦い」を描いたハリウッド大作、劉備、関羽、張飛、孔明たちの活躍が眩しかった「レッド・クリフ」の記憶はまだ新しい。加えて、「水滸伝」のヒーロー、豹子頭林沖、九紋竜史進、花和尚魯智深たちが、長年に渡って津軽の夏の夜空を焦がし続けていることを、世の「三国志」「水滸伝」ファンは知っているのだろうか。きっと知らないだろうなあ。

8月初旬。青森県は燃えに燃える。今年は大震災の影響で、例年ほど混まないはずだから、宿も多分大丈夫。

どうですこの際、思い切って「ねぶた」と「ねぶた」のハシゴをしてみても？ 弘前は、僕が案内しますよ。

## 第35回 全日本川柳2011年仙台大会

表記大会は6月12日、仙台国際センターで開催、事前投句一六〇二名、ジュニア五〇八五名、当日出席六二五名の中から選考され受賞句が決定した。

### 〈一般の部〉

各論をまとめ和解の鍋にする

### 文部科学大臣賞

魚跳ねる何と平和な音だろ

岡山 福力 明良

オカリナを吹く被災地の毒舌家

鳥取 稲村 遊子

### 参議院議長賞

海の匂いだ復興のトンネルだ

青森 千島 鉄男

毒舌を聖書のごとく聞いている

岩手 石川 檀

### 川柳大賞

復興へ小さな声を束にする

福島 織田 順子

もう一度青葉のように生きてみる

宮崎 中武 弓

### 大会賞

ゆっくりと母を抱いたわ笑ったわ

秋田 藤 咲子

毒舌を青いバットで打ち返す

宮城 澁谷 博

ふたたびの七夕赤い下駄を買う

宮城 中條 節子

総まとめ介護の母と四つに組む

宮城 今野 昭吾

アナログな人と三時のお茶にする

宮城 大沼 和子

光明へ俺の出口は俺が掘る

宮城 石川 洋之

### 〈ジュニアの部〉

#### 宮城県知事賞

ばくの手をずっと握っている家族

兵庫 港西小5 吉野 寿樹

#### 仙台市長賞

おさかなはきれいなうみとおともだち

山口 川上小4 溝部 瑞月

#### 宮城県教育長賞

ありがとう魚の命ひきつぐよ

広島 佐方小6 藤原 梨緒

#### 全日本川柳協会会長賞

明日があるだからゆっくり歩こうよ

福岡 大谷中3 小林 美季

にぎるとねほくにほのおがわいてくる

広島 大竹小3 作本 海都

うちゅうでも魚は育つすごいんだ

広島 玖波小4 中石 竜太郎

#### 教育新聞社賞

のんびりと歩くふるさとあったかい

山口 口大井中2 松尾 一希

せかいいちのんびりできる母のひび

広島 佐方小2 かしばこうしろう

こわいよといえた気もちをにぎってる

広島 玖波小2 有里 梨奈

# 本社六月句会

六月七日(火)午後五時  
アウイーナ大阪

史上一番目に早い梅雨入り、その真つ只中の七日、参加者106名(投句8名を含む)にて六月句会が開催された。句会に先立ち、先日亡くなられた同人、岡本久峰さんへ黙祷を捧げた。初参加は京都府の谷垣郁郎さん。

今月のお話は江見見清さん。「商品開発と川柳」と題して、見清さんの現役時代の経験をもとに、新商品を開発することと、川柳を作ることに類似点を七項目に亘って、お話しされた。ご本人の弁によれば若干こじつけ気味とのことであったが、木質フローリングの商品開発でのゴキブリとのやりとりなど、面白く聞くことが出来た。付録として、ゴキブリを詠んだ句を紹介してお話を締め括られた。

「ゴキブリを叩く女房に見る殺気」  
「床の間にゴキブリキヤツチある旅館」  
「ゴキブリの死因はきつと食中り」(いさお記)

月間賞は和歌山市の木本朱夏さん。  
(司会)美籠・善純(脇取り)恵子・蕉子  
(受付)美智代・りこ(清記)勝弘

## 席題 「呼ぶ」 井丸 昌紀選

ちゃん付けて呼ばれた途端少年期  
古里の風が渾名で呼び止める  
人間と呼ばれて少し恥ずかしい  
なんとお呼びしましょう落選のセンセイ  
メンバーの足りぬ時だけ呼びに来る  
口笛を僕を呼ぶのはやめてくれ  
福を呼ぶ僕の口癖ありがたう  
六階の窓からあなた忘れもの  
ケータイが極から鳴る通夜の席  
旧姓で呼ばれて胸がキュンとなる  
息子から呼ばれる度に泣く財布  
風呂沸いた機械が僕を呼んでくれ  
呼ばれたようでふり返つても風ばかり  
ソプラノで呼ばれその気になりました  
オイじやなくちゃんと名前でもよばなはれ  
ばあちゃんと呼ばれて耳が遠くなり  
呼んでいる飲み友達あの笑顔  
あらたまつて妻が呼ぶから身構える  
呼ぶほどの用も無いのにオイと言う  
真つ白になつて真夏を呼んでみる  
好きな子に呼ばれ私が発芽する  
妻を呼ぶといつも出てくるのはポチだ  
葬式に呼ばない筈の子がふたり  
ひと言が波紋を呼んで熱くなる  
絆創膏貼つた男も呼んである

淳司 寿美 ダン吉 求芽 俣子 公誠 好 耕治 哲男 恭昌 すみ子 希久子 月子 いさお 好 瑠美子 朝子 誠一 郁郎 郁夫 蘭幸 公誠 寿子 義

呼んで欲し誘つてほしい電話待つ  
おはんと呼んだら睨みつけられる  
呼ばれたらすぐハイハイと立つ亭主  
オイと呼ばれれ空気のようにつんと言う  
お局さんと呼ばれ緊張する課長  
呼んでない人が来ている祝賀会  
人の前強気で妻をオイと呼ぶ

住

舞夢 玄也 見清 哲子 楓楽 正雄 隆彦

わたくしが呼ぶと逃げだす人がいる  
呼べはハイそれで十分生きている  
べっぴんと呼ばれ買物足を止め  
子や孫を呼んで自腹で古希祝い  
妻の呼び声やさしい時は何かある

人

恵子 蕉子 遠野 いさお 善純

呼ぶ声は優しいですが顔は鬼  
地

日の出

呼ぶよりも誇れば奴は現れる  
天

克己

呼ばれても尻尾をふらぬ犬を飼う  
軸

唯教

パツチリと決めたが お呼び掛からない

## 兼題 「定食」 米澤 俣子選

定食の様に変わりのない小言  
マンネリのメニューに飽きた独り者  
定食を大盛りにする伸び盛り  
定食の評判よくて客並ぶ

准一 のん子 雅明 一風

定食のあとのデザートお待ちかね  
ホカ弁の定食続く妻の留守  
サンブルにいつわりがある和定食  
味噌汁とタクアン美味しい定食屋  
その昔出世払いの定食屋  
三ツ星に負けぬ自負持つ定食屋  
定食屋おかずは美人お内儀です  
定食を社長が食べる作業服  
定食のご飯お代り自由です  
おふくろの味が人気の定食屋  
切り干しの小鉢うれしい定食屋  
定食のようなふたりで飽きもせず  
学割りの定食食べて夜はパン  
昼の定食社長もおなじものを食べ  
手料理に定食のない有難さ  
野菜煮へほっこりとする定食屋  
日替わりのメニュー嬉しい和定食  
父定食母はホテルでフルコース  
学生にたっぷりと盛る定食屋  
定食のひじきオフク口出し  
帰っても昼定食の鯖味噌煮  
定食もあなたとならばフルコース  
胃袋がまたランチかと嘆く声  
好き嫌いへ定食よりもバイキング  
定食に一本付けて独り者  
定食を食べながら聞く無駄話  
晩酌に刺身定食老いの食

みつ子 恭昌 柳伸 りこ 久仁雄 楓楽 誠一 郁夫 美智代 時雄 真理子 直樹 奥五月 希久子 滋彦 堅坊 いさお 真理子 賢子 志千代 見清 朝子 公誠 光久 昭 則彦 光久

不可はなし定食並みの友がいる  
懐かしい亡母の味噌汁玉子焼き  
ひと通り食べて定食もう飽きた  
並んでも安い定食見逃せぬ  
被災地は未だおにぎりとパンづく  
別々の定食とって半分こ  
ふるりの味定食のところが汁  
単身赴任なじみになった定食屋  
定年日も定食だけで平社員  
定食屋聞かずに膳をポンと出す  
佳  
定食に飽きカツ麺おいしいな  
五時から居酒屋になる定食屋  
青い目の嫁も茶粥にお漬けもの  
和洋中定食めぐりするお昼  
先輩より高い定食遠慮する  
人  
仏さまご飯と水でくち言わず  
地  
キャットフード君も定食ばかりだな  
天  
コッペパンと脱脂粉乳だった頃  
軸  
漬物定食で締める京巡り  
兼題 「やっこ」 久保田千代選

ダン吉 善純 美智子 奥五月 勝弘 天笑 黒兔 理恵 公誠 敏治 月子 時雄 保州 哲男 見清 章子 ダン吉 保州

みちのくにやっど今年の遅い春  
仏様やっど仮設でまつれます  
仮設出来やっど笑顔が戻ります  
火傷してやっど自分をとり戻す  
八百長を載いてやっどふれ太鼓  
帰宅して名を思い出す同期会  
送別会やっど万歳して終わり  
触れないでやっど脱皮をしたところ  
躰糸やっどとほどいた娘の菓立ち  
平凡のありがたさ今やっど知る  
泣くものか涙こらえるのがやっど  
木はやっど忘れかけてた実を落とす  
やっど咲かせた薔薇一本を盗まれる  
基準値とやっどとの位置でせめぎあう  
無料バスやっどともらった医者通い  
お許しがやっどと出ました八分粥  
子が菓立ち夫のわがまま聞いたげる  
大事にしようやっどと見つけたひとつの  
三つ目の嘘でやっどと納得してくれる  
ねちっこい上司を帰し飲み直す  
本気だな顔にやる気がやっどと見え  
八起き目でやっどと男の顔になる  
タイガース一つ勝つのに二敗する  
姉ちゃんにやっどといいい人出来ました  
もう限界やっどと本音をぶちまける  
ほどほどをやっどと悟った胃の手術  
意地捨ててやっどと気分が楽になり

扶美代 紀子 紀雄 一步 隆彦 和夫 遠野 理恵 誠一 すみ子 扶美代 瑠美子 昭 富美子 耕治 朱夏 章子 俣子 求芽 時雄 寿之 公誠 勝弘 天笑 理恵 敏治 忠昭

悪い癖似てきてやつと親離れ

お説教昼のチャイムに救われる

ローン完済表札の文字太くする

一番星やつと出来たよ逆あがり

住

すべて転んでやつとはがれた目の鱗

紆余曲折僕の出番がやってくる

原発はあかん今ごろ言うている

三回忌の母にやつとの詫びができ

やつとこせ気合いかかけ生きてます

人

写経百巻やつと何かが見えてくる

地

まめに生きやつと終章目処がつく

天

どん底に落ちやつと知る人の情

軸

私でも抜けたよやつと呼名する

兼題 「筆まめ」

岩佐タン吉選

筆まめな人へ返事がくたびれる

花咲いたキュウリ取れたと日日便り

下手くそな字だが返事は直ぐに来る

筆まめはいいがも少し読める字を

筆まめな鉛筆かけっこが早い

筆まめな友に疲れる筆不精

絵手紙が昨日と違う花で来る

昌紀

時雄

遠野

朝子

楓楽

ダン吉

ダン吉

見清

義子

克己

公誠

楓楽

公誠

楓楽

准一

舞夢

玄也

恭昌

蕉子

ばっは

哲子

メールとは一味ちがう母の文

筆まめのノート戦争語り継ぐ

お返事が便箋五まいすぐに来る

筆まめに愛を交わしてまだ独り

三行でポイント纏め筆まめ派

筆まめな医者でカルテが長すぎる

無口でもわたしのペンはよう喋る

筆まめと口まめ庇いあうふたり

もう良いと神が言うまで書く手紙

ただ者でない筆まめな花便り

税務課に筆まめ一人居るらしい

筆まめの長い手紙に深呼吸吸

筆まめな妻の内助で繋ぐ緑

筆まめの友で温さが倍になる

貸した金だけはきつちり書く手帳

筆まめの辞書に手垢がびつしりと

口下手が筆まめだった無二の友

ブーメランの如く返事がすぐに来る

旅先からナンバー打って来るハガキ

私の筆まめ説得力が無い

筆まめな人から犬に見舞状

電話するたびに葉書を呉れる友

この角のポストは僕のためにある

筆まめは満点よりもスピードだ

筆まめの癖のある字が懐かしい

住

達筆で読めぬがうまい筆はこび

善純

まつお

紀子

郁郎

公誠

保州

理恵

直樹

日の出

唯教

遠野

堅坊

朝子

いわゑ

郁夫

志千代

なぎさ

たもつ

千代

紀雄

則彦

朋月

真理子

公誠

恭昌

五月

筆まめがいつもおんなじ誤字で来る

筆まめで無口が嘘のような人

筆まめの彼氏が鼻に付いてきた

筆まめが遺書を忘れて逝かかった

人

何度でも書こう平和という揮毫

地

顔ほどに筆まめの字は老けこまず

天

毛筆の自信が有無を言わせない

軸

冤罪を晴らした筆まめな男

兼題 「黒」

山岡富美子選

真つ黒になつて働く職がある

サンクラス外して見ても黒は黒

縁談にまたも黒星お節介

どうしても私を黒にしたい妻

補聴器で黒い噂を聞き分ける

黒髪を保つわたしの正念場

黒を着た今日の彼女に気おくれる

優しさについてほだされる黒い罨

冤罪をひっくり返す半世紀

喪の帯を解いて初めて泣きました

黒タイの出番めつきり増えて鬱

光りもの大好きですが黒衣です

黒塗りに乗って世間を遠くする

求芽

正雄

昌紀

柳伸

保州

見清

富美子

弘一

善純

昭

瑠美子

耕治

なぎさ

たもつ

真理子

直樹

寿之

誠一

鼻の穴真つ黒にした汽車ポツポ  
 まつ黒な奴でも焼けば白い骨  
 黒革の手帳は妻に見せられぬ  
 終電にすわる疲れた黒い影  
 自分史は黒く塗りたいたいとこばかり  
 黒揚羽未完の恋の化身かも  
 アリバイがないから黒だとは困る  
 悲しみの極致を黒と乗り越えた  
 船パンの躡ミッキーの目も丹波  
 限りなく黒い狸を泳がせる  
 漆黒の闇に希望と言うひかり  
 黒枠の父にあの世の住み心地  
 黒を黒単純なこと言えぬ義理  
 命名の硯の海は黒く風ぐ  
 どす黒い方の笑顔がホシだろう  
 黒猫のタンゴで喜寿を盛り上げる  
 真つ黒な顔が野菜の味つくる  
 黒豆の艶にすべった爪楊枝  
 黒で塗りつぶした文字の叫び聞く

賢子 俊宣 まつお 希久子 昌紀 楓楽 見清 扶美代 柳伸 保州 朝子 蕉子 正雄 倅子 天笑 則彦 勝弘 見清 正雄

地  
 黒幕が動き一本締めとなる  
 天  
 墨の香で一気に夏を書き上げる  
 軸  
 いささかのペーソスがある黒の自負  
 兼題 「誤解」 小島 蘭幸選

房子 のん子 真理子 柳伸 寿子 唯教 克己 寿美 隆彦 りこ 蕉子 能子 哲子 希久子 昭 ばっは 一歩 紀子 唯教

誤解さえ芸術にするだまし絵展 (長) 哲夫  
 凡人の脳を手品がもて遊ぶ 隆彦  
 義理チヨコの誤解が生んだウェディング 淳司  
 無愛想でいつも誤解をされてます 恭昌  
 誤解ないようかきかっこつけておく 希久子  
 流し目に万札が飛ぶ芝居小屋 俊宣  
 誤解したままで再会大笑い 一風  
 九条は平和誤解のないように ダン吉  
 愛は謎誤解のままで添いとげる 美籠  
 抱きしめてごらん誤解ならばとける 扶美代  
 原発の誤解を解いた大津波 善純  
 美しく誤解したいのです恋は 真理子  
 青天白日いざれ誤解はとけましょう (志) 千代

よしみ 恵子 保州 義子 一歩 保州 昌紀 木本朱夏

# 老也油壺

毎月24日締切・35句以内厳守  
掲載は原稿到着順となります。  
編集部

竹原川柳会(広島)

古田 太虚報

立志伝なお美しき茶うす山  
郷愁を感じ旅人山頭火  
山頭火もたずねた山よ青々と  
山頭火の足跡たずねて来た莊野  
眺めよし句碑もまたよし善明寺  
善明寺亡母に出会えた阿弥陀さま  
脈々と莊野の息吹平成へ  
賀茂川の土筆はばあちゃんの匂い  
金色の財布金運上がるかも  
あまる程の金は持たない方がいい  
笑つても泣いても年金だけはある  
怖いのは汗のおいのおいのお金  
鈴を振る数珠をくるにも金が必要  
人生いろいろお金はあった方がいい  
金の成る木にも毎日水をやる  
日向ほこ無の心境になつてくる  
半眼の無心になつてクイズ解く  
宇宙飛行無限大への繩梯子  
雲一つない大空よ今日の運

敬子 汎美 房子 慶子 年子 民恵 蘭幸 千枝 栄恵 規代 輝恵 不朽 笑子 静風 比呂子 半徳 幸子 一路

もう無芸大食などはやめにする  
良く見える無職になつたその日から  
無無無無無日本人の底力  
花の香がひとりの部屋を春にする  
優しさを学んでいますよ夫の背  
二匹目の鯉も元氣な笑顔です  
わかあゆ川柳会(鳥根) 松本はるみ報

うつむくな青い空には陽が昇る  
ありすぎるゆとりさみしい時がある  
楽をする方へ自然と足が向き  
まあまあとその場の空気包みこむ  
何も彼も明日という日に頼りきる  
糸口を見つけてくれた流れ星  
Uターンは裏の事情を知つたから  
明日は明日今日は今日だよ繩のれん  
一日一善未来の星に予約する

川柳塔打吹(鳥取) 野口 節子報

靴も無く戦後を耐えた母の足  
靴のひもしつかり結びゴールイン  
災害地靴音ないが手を繋ぐ  
ボ口靴で間違えられたことがない  
目を盗み誰と逃げたか僕の靴  
震災地靴が拾つて来る計報  
太平洋へ連れて行かれた赤い靴  
靴紐がすぐ解けたがる花蓆  
靴脱げば恋の余韻に蓋をする  
火のドラマ水のドラマもあつた靴

白狐 節夫 淑子 栄香 厚子 史子 英子 伸子 ちよえ かつ子 はるみ 好栄 惠美子 博利 清泉 道子 たけ代 恭子 玲坊 禎元 照彦 みち子 いさお 美ツ千

母と子がるるんん気分貰い物に  
ランドセル背中で歌う花の歌  
子供より親がはり切る七五三  
孫達とお風呂いっしょでるんるんだ  
補助輪も取れてるんるん親を抜く  
男気を出していつぱい損をした  
口下手でいつも損した五十年  
損得のない選挙権行使する  
損傷で国を揺るがす原子力  
損得で子ども育てる人はない  
バイキング二食分なら損はない  
春の陽は損得抜きで温かい  
散る花に損など無いと論される  
前向きに学んだ知識今光る  
無学だが真直ぐ生きて七十年  
呆けぬよう右脳ドリルを学んでる  
素直になつて孫から学ぶすみません  
サインコサイン学んだけれど使えない  
零戦の操縦桿を握らされ  
男と女学はない内嫁になる  
不器用な夫に介護学ばせる  
習い立て男ひとりの筑前煮  
学のない母から学ぶ人の道  
ピカドンは学べば学ぶほど怖い  
原発のメカ今更に学ばされ

悦子 克枝 公恵 義人 美代子 芳光 紀美恵 泰輔 龍枝 貴恵 滋 善江 三津子 久芽代 富恵 美美子 勝誉 美知江 螢 和子 勝憲 紀の治 重忠 石花菜 節子 碧報

和歌山三幸川柳会 武本 碧報  
シャッターを切つて一から出直そう  
シャッターが落ちずチーズが固くなる  
順一



一人旅男のロマン満たされる  
じつくりと煮込んでいます恋ころ  
曼陀羅をじつくり描き明日を踏む  
浄土へもロマン両手にさげてゆく  
六十路まで過去のロマンを懐かしむ  
ばあちゃんも十九があつた盆踊り  
ロマン抱き東京へ行く孫さみし  
じつくりへ手早い妻が舵を取る  
紙芝居昔話がよく似合う

川柳くだの会鳥取 岸本 宏章報

稠民 真由 啓子 多美子 開子 可住 かほる 幸子 美智子

大津波知らぬ顔して海静か  
思春期で部屋にラインが引いてある  
お遍路の鈴は情けを敷いていく  
多忙でもほいほい孫の無理をさく  
あぶく銭持つとやっぱり無駄を買う  
泥に生き泥の匂いを意識せず  
河川敷プロを目指した子等をみる  
シャンブーの泡が歳ごと減つてくる  
被災地の泡を想つて布団敷く  
虹抱いて泡が自分を主張する  
老い進み路肩の線に添い歩く

川柳塔みちのく(青森) 小寺 花峯報

富貴子 寿賀子 玲子 せつ子 孝子 大鯨 邦昭 清都 宏章 仁子

留守番の秘密を見てたくロッカス  
こつそりと耳打ちしたい人がいる  
留守番に追い討ちかける震度6  
ただいまとボチの写真に声かける  
熊肉の人氣が増える村の宿  
こつそりと神もいじめをするらしい

きよし 一湖 吞舟 信子 つとむ 柳子

被災地の子らの元気に救われる  
缶詰が瓦礫の下で生き延びる  
留守番に一番似合うにぎり飯  
こつそりとかくれんごでる愛煙家  
おだてられ炊事洗濯お留守番  
D51は大人のロマン離さない  
寅さんの人氣まだまだ生きてます  
留守番に俺だ俺だと太い奴  
留守番が太平洋にさらわれる  
余震まだ続き留守番させられず  
叱られて夕陽に泣いてから帰る  
人氣ある花から順に手折られる  
還暦は過ぎたが酒は五合燗  
「わさお」から元気を貰う港町  
こつそりと目くはせをする女郎ども  
津波にも耐えた一本松である

南大阪川柳会

吉川 寿美報

今だから語り継がねば黒い雨  
震災地疎開で世話になつた土地  
あの頃は妻に大事にされていた  
あの頃の話になるとうまが合う  
若い頃よく遊んだのも葉だ  
反抗期のあの頃父母も手こずつた  
愛された記憶の中の原爆忌  
広辞苑はろりと落ちた目の鱗  
夜桜へほろりほろり酔っている  
一杯でボクはほろりとなるんです  
アルバムにほろりと苦い顔がある  
初恋の花びらはろりホロリ散る

初枝 ひとし 芳生 隼人 則彦 一呑 ふさゑ 愁女 雅城 井蛙 黙人 岳水 花峯 慕情 一花 荔

一つの愛守りほろりと沙羅双樹  
さすがですほろりとさせる母の味  
筆箱に夢と希望を詰め学ぶ  
筆箱の消しゴム恋のキュービッド  
筆箱に孫の残したHB  
筆箱に明日を変ええる夢がある  
アト一点取れぬトラには慣れている  
住み馴れた三陸後にする無念  
飽食に慣れた親しんで飢餓知らず  
贅沢に馴れて飛べない鳥になる  
財産を問われてペンという彬  
やさしさが財産ころろ美人です  
ひと財産飲み潰したというお顔  
財よりも心の善を積み上げる  
財産はないので笑顔まき散らす  
分けるほど財産なくてよく眠る  
つい本音ほろりともらす露天風呂  
カバンと筆箱残し子攫いの津波  
財産は知識心の糧になる  
財産はないけど鍵をかけて出る  
親譲り歯性の良さが財産に  
頑張つた夫婦遺産は孫五人  
初任給くれた息子よありがとう

城北川柳会大阪

伊達 郁夫報

道半ば希望閉ざした春の海  
悪筆をIT機器に救われる  
老いの身も出来る限りの義援金  
くじけない努力へ明日が味方する  
高齢の果報はいつも湯の加減

あや子 弘泰 ルイ子 清 直子 一步 和雄 志華子 正春 楓春 ダン吉 克己 更紗 柳伸 昌紀 ばっは 寿美 栄夫 東吉 直樹 シマ子 千恵子 榮子 妻子 ひさ乃 とし子

あの日より浜辺に立つも胸さわぐ  
酔った振り彼の口説きを聞いてやる  
沢山の友に救われ今がある

できるだけ急かずに歳を重ねてる  
華やいだ気持ちで行こう春やもの  
いい人をやめると日日がバラダイス  
ぼちぼちとぶがぶが同居なわのれん  
リビングは春色こころ舞い上がる  
避難所にせめて一つは恋も咲け

カソのお君に似た孫でなくめない  
大臣のおまけのような作業服  
三・一一震災孤児にしじみ汁  
悲しみが折り重なって津波引く  
救いようのないバカだから放つとけぬ

復興の息吹きここにもサクランソウ  
ぼちぼちでいいよ試歩へ手を添える  
書き終えて一人愉快の缶ビール  
ごめんねと言える内なら救われる  
人面魚愉快な顔して餌ねだる

夢を持つ傘寿いっしょに蝶になる  
金払いが毒舌だけしか持っている  
ぼちぼちのリズムに合わす思い遣り  
アルコール脳内無菌です私  
悲しみのピエロが愉快な芸にする

上ばかり見ると心に穴があく  
ああ愉快な顔が抜けないチンドン屋  
人生もおまけの方が面白い  
ぼちぼちとぶれずに生きた汗の自負  
春の絵に命の跳ねている愉快

つらいから綺麗な花を買いました

縣 祚

郁 夫

ルイ子

勝 弘

美智子

義 昭

弘 風

葉 子

求 芽

かずお

和 夫

正 宏

克 己

直 樹

満洲夫

一 歩

野 鶴

たもつ

じゅんこ

川柳塔唐津佐賀

仁 部

四 郎 報

耳よりの話に乗って捨てた金  
着るものが年寄りだよと娘が咎め  
病む老いも冬来りたなば念じてる  
忘れ得ぬ人七人を教えあげ  
宅配が定時に届き日本です  
偽りの愛だとしても悔いはない

春風に聞かせとくれないため息よ  
テキストを黒く塗るのはもう御免  
泥くさいから人間の味がする  
日ん中ももたない妻の無言劇  
実践はテキストよりもよく解る  
非売品愛を盗んだのは誰だ  
独身のままだつみの海に散る  
泥くさい私ですがいいですか  
日ん中を会費払って何も得ず  
テキストに個人差ありと書いてある  
出題句日ん中からやつとでき  
独身とだまして女性もあそぶ  
テキストに想定外も入れておく  
金持ちが泥くさい事はかり言う  
ご自慢の才女独身友患知る  
独身は不自然人は雄と雌  
見たくても見えないものは腹の中  
日ん中の妻の行方が気にかかる  
また一二年を重ねて散るさくら  
テキストは見えないが読める般若経

川柳ふうもん吟社鳥取夏目

一 粹 報

洋々

清 毅

美恵子

節 子

無 限

一 京

行 男

美 雪

孝 男

凱 柳

振 作

孝 二

春 名

妻 子

テキストの通りに子供育たない  
日ん中で帰る積もりに酒が出る  
日ん中で田植えが済んで物足りぬ  
満月の雫をうけて蘭が咲く  
泥くさいけれどあんたのそこが好き  
テキストをあてにはしない臍曲がり  
テキスト通り子が育たなくママ悩む  
東京行つて抜けたか泥くささ  
春うら道の小花は笑つてるさ  
独身を謳歌するのは女性だけ  
津波来てテキストみんな流された  
農に生き泥くさいまま逝くつもり  
泥くさい人だが気持ち爽やかだ  
泥くさい嫁が姑の気に入られ  
テキストに人は騙すと書いてある

一隅を照らし続けるポランティア  
ひとしきり妻を照らしていたヨソ様  
被災地を大きな月が照らしてる  
優しきが命を照らすいっしょの世  
自然との会話若葉に照らされる  
満月におつむ照らされ歳がばれ  
被災地へ心を照らすひと情け  
炭化したヒト科よ八月の六日  
廃坑の街にも初夏の風薫る  
つらいのを我慢したのか炭爆ぜる  
炭火焼きグルメとなつて困り裏端  
消し炭の今も情熱持つている  
断ち切つた未練心にある火種

川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報

保 州

緑 良

克 己

よしこ

寿 子

佐 一

富美子

ダン吉

ほのか

小 雪

和 香

雅 女

地 佳 平

金 祥

とも 湖

大 鯨

由美子

善 夫

菊 香

隆 浩

はつ 江

重 忠

弘 康

蟹 郎

一 粹

ラーメン派うどん派君はさあどつち  
 鉦で割るように分別などできぬ  
 聞き分けがよくて心に雲がない  
 写メールでこの感動のおすそ分け  
 目葉をさして見分ける出来不出来  
 黒と白はつきり分けてから疎遠  
 ふつつつと奥でマグマの笑い声  
 ふつつつとエゴ戒めている地球  
 熟成のもろみふつつついい感じ  
 歓喜ふつつつ全身麻酔から覚めて  
 馬耳東風に生きてふつつつ湧く力  
 ふつつつと私の灰汁が目を覚ます

ほたる川柳同好会大阪 水野

震災で散り散りになる祭り笛  
 別の道行ったはずだが出会う人  
 今日別府あすは箱根の湯に入る  
 現実が別れた日から思い出に  
 告別式孫や曾孫の顔合わせ  
 別格と言われ敬遠されている  
 格別で迷う中身かお値段か  
 計り売り使用期限は要りません  
 両腕で計りきれずに仰ぐ杉  
 口先のよきに計らえ監視付き  
 増えて嘆き減って心配さす計り  
 突つかれて意中人の人をついぼろり  
 人生の仕上げはいまだ途中でず  
 婚活し途中で分かる女連  
 眼中に無かったはずが今の夫  
 一家難散朝を迎えた避難場所

大輪 あきこ  
 めぐみ  
 徑子  
 利治  
 准一  
 美子  
 紀久子  
 よりこ  
 泰女  
 登美代  
 輝子  
 黒兎報

春代  
 純子  
 正子  
 干治  
 美智代  
 康子  
 信男  
 黒兎  
 勝  
 見清  
 久子  
 桂子  
 長一  
 順子  
 柳童

中元と縁切れ笑顔差し上げる

川柳塔きやらほく鳥取 大塚 恵子報

ふきのとう先ずは天ぶら次はみそ  
 泣かないで恵み両手で差し上げる  
 大きなよろこび孫が私の背なを越す  
 恵まれしこの地に住めて有りがたい  
 三月十一日波は空から降ってきた  
 右腕を頼りし夫も椅子軽く  
 肖像画ボクに似てボクでない  
 大口を叩いて虎の優勝だ  
 ラ・テ版が真つ白今日はニュースだけ  
 仏縁が幾年ぶりの友と逢い  
 凄く夢なくてゆっくりバラを切る  
 喪に服して開かぬ花がやつと咲く  
 十本の指がそれぞれ自己主張  
 誰のためにヤングの歌う美の讃歌  
 むく鳥がやつと残した桃が咲く

春枝  
 てい子  
 恵子  
 蘭  
 瑞枝  
 ゆき

岬川柳会大阪 八十田洞庵報

浮ついた匂いが好きな週刊紙  
 八百長の匂いがしてたよ昔から  
 ふるりに匂いにじませくる便り  
 この世での使命果たされ逝く浄土  
 馥郁と匂うが如き人の舞  
 荒海の磯の香りに千鳥舞う  
 おお寒い灯油の匂い頼もしく  
 エレベーターに匂い残して去る美人  
 流れくる匂いでわかる妻料理  
 夏草や獣どもの爪の跡

貞夫  
 清一  
 富美  
 和香  
 桜琴  
 寛  
 茂平  
 蛙城  
 東吉  
 利武

即席の彼の草笛聞いた丘  
 外湯へと揃いのゆかた下駄の音  
 さよならも言わずに母は旅立つた

家族写真の花の笑顔を忘れない  
 それとなく本音句わす瞳に出会う  
 遠くまで匂い爽やかきんもくせい  
 猪の目こぼし貰う筍掘り  
 鞭持ったジヨッキ必死のゴール前  
 父の背な家族叩いた汗匂う  
 隣り屋も煽焼くらし換気せん  
 無事だよと二文字を待つ過疎の母  
 線香の匂いしみいる友の死よ

川柳塔まつえ吟社鳥根 相見 柳歩報

甲斐性と言った浮気も有りました  
 夫婦ではないと知つての箸糞袋  
 はかなさを残して浮気物語  
 穏やかに暮れて夕日へ感謝する  
 天と地感謝筍掘りなが  
 心から感謝の意志を示す人  
 お早うさん今朝も機嫌のいい嫁と  
 長命の日々へ感謝のいい笑顔  
 衣食住足りても感謝せぬ頑固  
 埃被った夫への感謝状  
 棟梁は我が子のように抱抱く  
 脛かじり削り取られて愚痴を出す  
 削られてやがて鋭い人になる  
 家計簿が削る余地など無いと言う  
 ビンラディン牛糞を削る手に力  
 どうしても削れぬ影をもっている

悦三  
 禮三  
 さくら  
 和美  
 年子  
 圭子  
 覚庵  
 峻史  
 富美子  
 洋子  
 令子  
 洞庵  
 茂美  
 桂子  
 芳山  
 叮紅  
 浜吉  
 長吉  
 幸代  
 ちえこ  
 涼子  
 寿代  
 禮子  
 注湖  
 柳歩  
 千里  
 すみこ

くどくどと言ひ訳をするボールペン  
くどくどは茶漬けでサツと流しこむ  
くどくどの中で泳いだ夢枕  
先生もくどくど言わぬ参観日  
くどくどは止そう若葉のいろさけい  
くどくどと空の小言か五月雨  
くどくどを逃れ五月の空泳ぐ  
黄昏の窓にいつかの鳥覗く  
俺達の山だ窓一杯に笑っている  
テレパシーください窓は開けておく  
苦しくて心の窓を開け放す  
あの方の音確かめる窓の月  
窓を閉め熱いハートを冷ましている  
愛をください空に大きな窓つくる

川柳塔なら 坊農 柳弘報

大津波これ神さんの意志ですか  
人類愛世界中から注がれる  
震災地祈り注いだ春の風  
愛の他僕には注ぐものが無い  
さびさびと新顔何処でも役に立ち  
越えられぬ試練の神は与えない  
火に油注いで愛の乱反射  
復興に神通力が通じない  
一心に注いだ愛が咲かず花  
神様に借りてる元氣ありがとう  
原発もポストモダンに含めよう  
愛情を注いだ子等に背かれる  
初孫は神がご褒美くれたよう  
情熱を注ぐものあり呆けられぬ

昌枝 ゆき 民子 芳恵 知恵子 左余 久枝 玲子 たくし 幸子 とも子 美智子 博一 賢子 とし子 将文 千梢 萌子 隆之 ふりこ 寿之 堅坊 勝弘 富子 弘風 修

新顔のキャリア隠している野心  
新顔が来て窓際に追いやられ  
新顔のナースの針が震えてる  
新顔が秀句さらって名を上げる  
何気なく注ぐ言葉が呼ぶ波瀾  
ありつたけの愛を被災地に注ぐ  
未消化のあなたへ注ぐ陽の光り  
傷ついた心に注ぐみつおの書  
雨の日は死んだ振りしているポスト  
目覚めよし注ぐ朝日に背伸びする  
時代屋の横にはつこり丸ポスト  
寸胴のポストと僕は同い年  
給料の下がるポストもあつたんだ  
ポスト迄日課にしてる万歩計  
神さまに札を言うたり憎んだり  
あれからは神を信じて拭くトイレ  
歳月の流れポストの貌にする  
瀬戸際で挿んだわりに神宿る  
宇宙見る新顔の目は無限大  
優しさを注ぐとやさしさが返る  
試されているのか新しいポスト

川柳塔すみよし(大阪) 岩崎 公誠報

朝掃り隣の犬に吠えられる  
ずうっとまゝ肩抱き合ったこともある  
宝にもがらくたにでもなる亭主  
友情は金で買えない宝もの  
ハイと言う返事が耳に心地よい  
傷心を抱いているから人恋し  
赤ん坊を抱くと命の重みある

恭昌 一風 比呂志 隆盛 惠美子 寿美 ばつは 道子 柳弘 理恵 眞理子 丹吉 完次 朝子 郁夫 國治 (中)勝弘 辰雄 良一 信子 正太郎 美世子 克博 五月 まつお 芳香 太郎

朝食がうまいな今日も頑張れる  
それなりの生き方もあるイエスマン  
本心が読めぬイエスとまた言えぬ  
鮮やかなシュートの男抱きあつて  
アンパンマンの歌が勇気を子に抱かせ  
鈍感力灰になるまで抱く炎  
あの時のイエスでスタート孫を見る  
子宝が巣立ち嬉しくまた淋し  
陽は昇る何があろうとなかろうと  
早寝して午前三時が僕の朝  
何気なくみる朝刊を配る人  
明日の朝目覚めると言う保証なし  
朝食の納豆からむ切り日  
覚悟する命を抱いて手術台  
神さまに貰う試練と言う宝  
水が出るガスも使える今朝の幸  
どんまいと向う気力は子の宝  
金輪際原子炉だけはYes拒否  
夢を抱き凭れあいつつ老いてゆく  
天災が一瞬に奪った宝  
夢抱いて都会の隅で生きている

川柳塔鹿野みか月(鳥取) 土橋 螢報

珍客に海のミルクでおもてなし  
風景になつて女が立つ岬  
雑草も夫婦の会話聞いている  
心も喉も渴きミルクを啗んで飲む  
穏やかな今日この頃の老景色  
千鳥足一本橋のいい風景  
山が笑う景色は初夏がよく似合う

かりん 半銭 のん子 定子 直子 柳弘 チエコ シマ子 温子 勝弘 裕之 昌紀 たかこ 日の出 朝子 賢子 美籠 たもつ 公誠 蕉子 遠野 螢報 幸枝 くに子 睦子 彩子 和子 照彦

風景に合わせた自画像だと思ふ男でも女でもない異風景

風景はいいが住めない過疎の村見慣れても年が明ければ初景色借景の山を自慢に長ばなし

夜桜の景にとけ込む影ふたつ二メートルの窓が世界とならぬよう一軒の草屋根がある風景画

変りない風景なのに子ら果立ち風景の中に田畑と溶けて入る被災地で頑張っているマスクとタオル

泣いた泣いたタオルを絞るほど泣いた大判のタオルが歩く風呂上がり

よいとまけのタオルは汗で真っ黒け便利です何処へ行ってもタオル持つ雑巾になってタオルの一生涯

よう喋るカラスに灸効かないか絵ごとの作業を止めてお喋り談義涼み台蚊のえさになりお喋り会

長電話あれも一種の電話魔だ産湯からタオルへ吾子と初対面

頑張れと染めぬきタオルおん見舞

川柳花の輪(大阪) 妻谷 重風報

盛桜

満 実満

孔美子 富久江

八重 永子

美ツ千 宣子

みさ子 節子

久枝 弘子

蟹郎 小鹿

露子 忠子

幸 昭好

病み癒えてはちばち杖と生きている脱サラで始めた店を子が継がぬ

店じまい全国展開夢だった国政をめつた斬りする屋台店

列つくる店より我が家の妻の味

八尾市民川柳会(大阪) 宮西 弥生報

泥にまみれた雑魚も明日へ生きている生きんかな一粒の種風に乗る

あなたの手帳にわたくしのイニシアル忙しい手帳がわたたく案じてる

古手帳確かに生きた証あり恋の風吹かせて見たい古希の坂

取つときの言葉手帳にもらつとく一本の葉を掴んだ日のドラマ

起き上る気力を試される憎しみなら風化愛は朱に染める

大空の下で一つになる絆笑わせるコツを掴んだ春の風

ミヨノ 勇太郎

楽鬼 敬子

耀一 朝子

あかり 扶美代

紀雄 一風

寿之 幸生

寿華 留里恵

柳伸 柳伸

欣之 秋子

和子 孝子

駄目な子はいない試験に弱いだけ気分変え心も弾む趣味の会

五月の空と君の笑顔が呼ぶツバメ車窓より花見してます出張中

花の風やさしく頬を撫でていく桜爛漫舞い散る水面花筏

無事帰る孫の笑み見てそつと抱く虎の皮着てこねている北の国

子の為に母は鬼にもなりもする新調の服が出たがる春日差

一杯のはずがついつい虎になり弓なりになって耐えている避難の身

ツバメ来た平和なとき有難さ苦勞した一つ一つが我が秘り

声掛けを嬉しいと言う風になる今日も行くネットで探す花名所

老人も悪くないなどお茶を飲む気付かない幸せきつと持っている

長柳会(大阪) 坂上 淳司報

ますみ 美代子

耀一 知佐子

博子 愛子

宏至 宏至

いつふみ 義明

正春 正春

妙子 俊子

はじむ 晴美

一風 淳司

弘光 正子

世代差の断層学ぶことばかり  
恋心少し覗かせ春を待つ  
避難所で手足伸ばしてさあ体操  
手も足も口も達者な妻が居る  
着陸に手足ふんばり絵空事  
学びたい意欲が気持ち若くする  
宅急便母のレシビが走り書き  
七回に風船飛ばし攻めるトラ  
攻めて攻めて攻めた自分中悔いはなし  
手も足も口も達者で老い楽し  
手指で足らず足指足した幼い日  
お先どうぞシルバーマーク背負つてる  
冬は雪春は津波と地震が攻め  
若者の手足指令を待ち切れず  
退職後妻の手足になり切つて  
手足腰口も負けまず母卒寿

青春の放物線は無敵大  
四方から攻めてくるので貝になる  
仕舞風呂手足広げている安堵  
責められぬように笑顔を忘れない  
学びたかつたらう津波禍のランドセル

富柳会大阪

古田 千華報

恙無い明日へ外す鉤括弧  
手間と暇かけた料理で謎を掛け  
真つ新たな気持で今日も生きていく  
ゼロからの向こうに見える剣ヶ峰  
手間賃もないまま主婦で生きている  
身の内に弾丸列車走らせる  
ライバルを騙したはずが裏かかれ

芳野 ヒロ もこ たけし 靖博 孝代 正博 光弘 直樹 敬二 久美子 一慧 篤 富美子 隆彦 和代 三和子 正美 佳子 七朗 壽峰 紅紫朗 登子 田鶴子 彦次

核ゼロへ少しあわててみませんか  
突然の指名言葉が出てこない  
放射冷却霜にあわてている新芽  
春うらら私の恋は視界ゼロ  
おふくろの愛と手間との煮ころがし  
裏切つた日から私も原点に  
満面の笑みで明日を翻す  
ゼロ歳児やがて日本を背負う日も  
覚悟したゼロから春が立ち上がる  
慌てても許してくれぬ砂時計  
愛憎をゼロにしましめお線香  
出て行けと言つて娘を探す父  
思い出のゼロにぼつんとみかん箱  
それぞれに亡母を想う蓮華草  
打楽器の音符に風の絵がたまる  
ゼロにはならぬ命のバトン渡すから  
偽善者の椅子の死角で読む聖書  
一生涯の夢を奪つた大震災  
二引く一絆がゼロを防いでる  
通帳ゼロの影に女が居たさうな  
原点は花一輪のころざし  
過去一つ夜汽車に乗せた午前二時  
手間かけたことは知らない赤い薔薇

川柳茶ばしら(愛知)

板山まみ子報

ハツとする幼い頃を覚えてる  
信号を無視してもいい救急車  
回復へ抜群旅のプラン立て  
名の連呼だけの人には入れぬ票  
単身の肥えた瘦せたが気にかかり

ダン吉 昌成 より子 和子 アキ 華 高鷲 千恵 澄子 武人 欣之 奏子 鬼焼 深雪 信子 千華 伸雄 晴美 よしみ 寿之 森子 雅美 遡行 幸子 美千代 かつ子

なるようにしかならない金が要る まみ子  
はびきの市民川柳会大阪 徳山みつこ報

父さんの椅子は立派な髭をもつ  
手を焼かせた子に押されてる車椅子  
被災地で支援待つてる車椅子  
泣きなきい笑いなきいと手話で言う  
新学期本もノートもピッカピカ  
古女房愚痴は毎日新しい  
新米が届くだろうかこの秋は  
瓦礫から新芽が拳あげている  
ざりざりにとびこんできて列乱し  
責任を一切負つた補佐の役  
避難所の不満奥歯をすり減らす  
政治には不満だらけの人がいる  
お互いの不満収めて五十年  
イエスマンにならぬ私に不満顔  
不平不満盛つて落葉に火をつける  
生きさまは不満の二字で終りそう  
笑顔出てハッスルしたす退院日  
仕事中はりきり過ぎてミス多発  
ハッスルも程程孫に気遣われ  
おばちゃんに敵うわけなとおまへんな  
あと二キロ萎えた脚にも声かける  
被災地の桜も負けず春を告ぐ

豊中もくせい川柳会大阪 藤井 則彦報

髭そっていつもの朝の顔になる  
掬つても指間を漏れていく思い  
赤飯で祝うわが家のめでたい日

ヨシ枝 泰子 いさお 美喜 フジ 一壺 悦子 みつこ 千鶴子 猿沓 六点 敏 喜久子 登志子 扶美代 美代子 りつて 雄太 庸佑 光男 ダン吉 久仁子 萬の 紀乃 庸佑 則彦報

青い目も跳ねるねぶたの襷掛け  
断捨離が老いの我が身にふりかかる  
素顔から漏れる本音にうそはない  
元日とダブリ日陰の誕生日

〇型の妻はいつでもケセラセラ  
いつもの事と軽くあしわれたカラス  
石蹴つて違う世界を見せてやる  
身構えてしゅうこれまで平気だった揺れ

満点だと夫の家事を誉めておく  
即席のカレーにいつも助けられ  
若者の丸いお尻の頼もしさ  
ただ起きて寝る祝日も平日も

満月に守られ恋のフルコース  
良いも悪いも孫から漏れる三世代  
尖る日はせめて優しい服を着る  
紙ばんつ素直にはいたおとうさん

微笑んで本音は漏らさないピエロ  
古里はいつもの若い顔のまま  
一歩引いて中心点を見定める  
一日だけならばいい人にはなれる

少年の目に満点の母がいる  
母の日もやはりいつものお味噌汁  
祝日は原発不安消えた時

あかつき川柳会(大阪) 宮嶋シマ子報

避難所の陽は西に傾いたまま  
燦々と輝る太陽に嘘はない  
太陽に真つ向勝負燃え尽きる  
この辺でおいとましますと太陽

向日葵のポリシー太陽を齧る

肇 勲

歌留多 幹治

きらり 永玲子

佳恵 千恵子

堅坊 夢

求芽 美義

満子 玲子

幸雀 見清

葉彦 則彦

雀舎 美智代

太陽はメビウスの帯道つ駆ける  
日航も東電までも沈みかけ  
太陽のひかりへ命立ち上がる  
腕白な顔に戻っていく祭り

雑踏の顔がのつべらぼうになる  
亡父の顔と声で兄貴が猪口を持つ  
頑固者の父だが顔は広かった  
この顔は親の引き継ぎいじらない

コメディアン難しい顔家に置き  
帰りがわ聞いてはならぬことを聞く  
青春は二度と帰らぬ蜃気楼  
帰れない風の音聞く被爆地図

古里に顔を見せたい母もなく  
無駄すべて削り不幸になりました  
青い星サルの浪費で赤茶ける  
贅沢と消費で景気浮揚策

バーゲンを買いに電車やバスに乗り  
花見にも行かずテレビで花見する  
溶けてゆき底にたまって穴あけた  
原発で家失うは想定外

食べるならユツケ信念揺るがない  
カードとやほんにお前は罪つくり  
大地震お地藏さんの向き変える  
東電は悪いデータ小出しする

広辞苑雑災と理財並ぶナゾ  
電源か命か岐路に立つ地球  
はくキリキリス妻のアリとで弥次郎兵衛  
フクシマが三途の川を渡り切る

労力の浪費いとわぬ蟻の列  
初盆はせめて仮設で迎えたい

克己 一彦

朝子 まつお

紀乃 穩夫

太郎 桃夫

秀夫 多恵子

君代 野鶴

見清 喜八郎

祥昭 愿

キイ 篤

武 正明

君になら何でも話す僕の恥  
君ももう定年だったか桜散る  
がんばりますと決めています  
ビールですきんと決めています

草の根を煎じて飲んでいる頑固  
頑固一徹笑つて許す妻が居る  
銅像になる人みんな頑固です  
半音階下げてはらはら歌い切る

母の日にバラ一輪を妻の手に  
田植えする日本の秋をなお信じ  
釣糸が緩んだままの日向ぼこ  
躓いた石にまたかと叱咤され

被災地の風が泳がす鯉のぼり  
がんばれをいっばい背負う日本国  
元気がす気遣いのある嘘を聞き  
どっこいしょ風を味方に立ちあがる

石垣の穴のすみれに立ち止る  
アドバイス聞かない耳を持つている  
横文字で頑固おやじを煙に巻く  
空向いてそら豆主張する頑固

日記にもないイニシャルが胸に住む  
音たてて雪駄ひきずる伊達男  
初動ミスひきずり果てはレベル七  
遠い日のトラウマ今もひきずって

一病をひきずり慎重に生きる  
はらはらとさせてユツケが裁かれる  
長生きの種を孫から掌に貰う

西宮北川柳会兵庫 小林 わこ報

比ろ志 茂

勝弘 正治

耕治 無限

美津子 奮水

武臣 哲夫

秋果 敏夫

宏造 朋果

直 光久

歳子 ひとみ

玲子 章子

哲男 基輔

浩司 毅

千代 忠

キヨミ

便利さに慣れて汚染に悩まされ  
君の一筆美事に鯉が滝のぼる  
サザエさん口ずさむ日はよい天気  
津波あと家族待つよに黄水仙  
生きて候君の支えがあればこそ  
みちのくの桜はらはら涙する  
はらはらを散る桜花無心なり

川柳あまがさき(兵庫) 田原 一兆報

逃げるよりこれくらいなら泥かぶる  
しつとりとさせて下さい宵の雨  
カプチーノほわほわ今日はみんな留守  
肩並べピッチを上げる演歌酒  
着心地が良くてこの服手離せぬ  
湯上りのさっぱり感も立夏です  
相合傘家まで送る雨の道  
相合傘二人の息が通い合う  
被災地で川柳披露なごませる  
苦しくて楽しい古希の川柳道  
電力不足補う初夏のクールビズ  
幸せと思う筍豆飯  
出来ちゃったそれがきつかけグリーン  
体調調整下手で年中着ぶくれる  
ソーダ水泡立つ数は過去の罪  
泥こねてガラクタばかり作る趣味  
たわいないきつかけ夫婦五十年  
薄化粧制服似合うニューフェース  
ほどほどにしてよテレビにまた余震  
明日着るものを揃えて胸はずむ  
よかつたに泥にまみれた位牌抱く

光子 嘉代子 順子 弘子 美籠 盛夫 佐紀子 求芽 洋子 哲男 義久 雪菜 菜々子 柳明 比ろ志 幸香 祐康 和子 茂幸 こはな 野薫 耕治 あかり 五月 勝巳 芳子 純

ごめんねがきつかけごめんねの返事  
言い訳が過ぎて自分が泥かぶる  
きつかけを忘れる程の古い仲  
儲かると甘言に乗る泥の舟  
喝采についで乗せられた泥の舟  
ただ帽子被っただけで見直され  
泥はねを無視した車脱みつけ  
にわか雨思わず母を傘に入れた  
泥つきの写真も幸せだった頃  
泥臭い奴ほど情があった  
借りた恩たまり溜つた今日の鬱  
きつかけが掴めず檸檬青いまま  
言い負けて男の意地を折りたたむ  
まだ女してます余力ふりしほり

川柳さんだ(兵庫) 堀 正和報

金庫には離婚用紙が用意され  
地味だけとひたすら燃えた青春譜  
間に合ったバスで一息いれている  
近く時はレディファースト譲りたい  
ピアノよりわたしの調律して欲しい  
葉桜になると寂しくなるベンチ  
さわやかな馬追いたの野を思う  
ハモニカ馴らし運転バビペポ  
大浴場人目忍んでひと泳ぎ  
俵を探し果てなき終の道  
スピーカー団地丸ごと運動会  
気の弱い鬼が仏の掌を探す  
いちどだけ切ない恋に泣きました  
惚けられぬ妻がお酒の所為にする

紀乃 泰子 登子 朋月 里江 美也子 キヨミ 江美 正和 龍 伊サミ 哲夫 かずお 美籠 宣子 一子 歳 ちあき 菜々子 朋月 哲夫 雅司 一泉 茂山 淑子 美和子 ひとみ 好文

探すのは止そう幸せ目の辺り  
鈴虫の楽譜はきつとりリリンリ  
さわやかに振られましたと言える歳  
働く手地道つばりだと書いてある  
さわやかにビール飲んでる勝ちゲーム  
正和

米子住吉川柳会鳥取 渡辺多美子報

水中ならしてやるお姫様だっこ  
一族の崖を見守る数椿  
もう四月行事入れている暦見る  
ふる里を放射能に追い出され  
世界中日本はげますあつたかい  
賽銭は一円玉を派手にまく  
新入生親の手離れ手をつなく  
久しぶり観音様に願いごと  
原発でどのチャンネルも沸騰する  
被災地で桜の花が勇氣つけ  
門の無い家で夫婦の火を囲む

川柳藤井寺(大阪) 鴨谷瑠美子報

足湯して胸の中までほっかほか  
見返り美人もユニクロのレギンス  
素足になり歩きたかろう被災者は  
トキキョーをアベベ素足で駆けぬけた  
真夜中の地震素足で飛び出した  
震災の海は素足で入れない  
川柳会わたしはだして逃げて行こ  
泥棒を裸足で追って駆けました  
古傷の残る素足がいと嬉しい

キヨミ 順子 忠 章子 正和 公一 ふみ 礼子 紀の治 登美枝 宏之 すみえ 欣子 正二 多美子 未延子 惠美子 一筒 昌子 いさお 紀雄 一步 みよ子 アヤ子 清之

素足よし夏の砂漠をうさぎ飛び  
せせらぎに素足浸して戯れる  
万歩計ひねもすゆたりのたりして  
生きている証夕日の影を追い  
いちにちを母は家族に使い切る  
初夏の陽を一日浴びる通路みち  
ダイエツトもう一日でやめましょか  
幸せな一日なぞか早く過ぎ  
明日への備え草刈鎌を研ぐ  
いちにちも無駄に出来ない余命表  
恋をした枯木に花が咲きました  
水槽に充電中とある鱈  
充電のはずの旅行で震度6  
充電の火花散らして生きている  
古里は生涯僕の充電器  
充電をしても歩けぬ車椅子  
幕下を裁く行司は皆素足  
語り尽した過去とただ今充電中  
防災グッズに充電バック入れてある  
ロボットも充電するのとよく喋る  
いちにちが無事に過せたのに感謝  
充電も若さも愛も不足する

翠洋会(大阪)

佐々木満作報

絹枝 美代子 悦子 喜代子 雄太 夏子 六子 シルク みつこ 光男 登志子 龍一 婦美枝 ヨシ枝 史郎 扶美代 ちづる 映三子 庸佑 瑠美子 希久子 理恵 葉子 日の出 照子 義

かんたんとなめた川の匂泣かされた  
越えられぬ川を渡って行く試練  
はんなんの昔が香る姥桜  
はんなんの風をまとうて京の女  
はんなんりと京の着倒れ京料理  
はんなんりがわかる気がした京の味  
はんなんりとオーラ伝わる京絵巻  
はんなんりのおこしやすから気が解れ  
鉾先はんなんりかやす京ことば  
あじさいの彩はんなんりと京都の寺  
皇后の所作はんなんりとして優し  
二条苑これがはんなんり京の味  
舞妓はんなんり客を遊ばせる  
擦れ違はんなんり匂うシャネルの香  
見はんなんり食べてはんなんり京野菜  
急かされてまんまと地デジ買わされる  
祝日に日の丸出さぬ日本人  
募金箱美人の方へ入れたいお  
世渡りのご高説聴く屋台酒  
榎山が近い断捨離せかされる  
奥床し王朝絵巻の列が行く  
草の匂い人の匂い聖五月  
鴨鍋をつつく池波の世界  
勝つために上手に負ける知恵を練る

川柳同友会(鳥取) 吉田 陽子報

公平 満作 千歩 みつ子 弘子 真澄 滋彦 啓子 志華子 楓楽 恭昌 浩二 舞夢 げんえい 桃花 知之 善之 正雄 富子 紀子 昭 蕉子 集一

燃えた味知って切ない火消し壺  
くつきりと眉描いて行く同期会  
復興の背に頑張ると書いてある  
国の危機党争いの場ではない  
死ぬことなど考えてない句の味  
抜け殻になり帰宅する城の主  
時重ね普通の暮らし祝う今  
三畳に生きたなごりの屋台骨  
地デジ化で味も匂いも見えてきた  
植木鉢こわしたボール拾えない  
日本語で好きな言葉はありがとう  
城捨てて介護ホームへ移り住む  
気まぐれの作り笑いが戻せない  
寂しさは口に出さずに背で語る  
長老に丸め込まれた振りをする  
歳月が鬼千匹をまるめ込む  
骨太の心貧乏したなごり  
まるまったサラシラップに音をあげる  
友人胸あからちよつとさまようの  
友見舞う気まぐれに来た振りをして  
放射能防ぐお城が欲しくなる  
よい味だ夕日が燃えて子が走る

倉吉川柳会(鳥取)

竹信 照彦報

お母さん打吹山は緑ですよ  
母にはならぬ婚活の娘たち  
母は皆捨てる命を持っている  
三陸で「岸壁の母」きょうも聞く  
母の汗まだまだ知らぬことがある  
いつまでも子から卒業出来ぬ母

章子 ふみ子 みち子 和恵 嘉子 ひとみ 菜美 美どり 温子 君代 信子 安子 久司 寒之 美恵子 勇 くに子 葵 華蓮 遊子 公弘 風露 螢 盛桜 次男 賀寿恵 由紀子

母の日はケーキを買って会いに行く  
一匹と一人で暮らす空がある  
暮らしむき向きをかえても同じこと  
独り言ではない犬と猫がいる  
逃げ道を探して楽に生きている  
適当な貧乏暮らしよしとする  
妻と居るこんな暮らしがいんじや  
地球出て宇宙で暮らす日も近い  
手をつなぎみんな笑顔で暮らしよう  
物欲を捨てて暮らせば楽なのに  
原子炉に鑑いて立ち向かう  
鉄兜かぶってでも戦死する  
かぶと脱ぎほつとさせたい自衛隊  
原発に耐える兜を身につける  
千年の歴史を語る兜蟹  
ヘルメット付けた中学生走る  
芋虫も立派な兜虫になる  
端午の日新聞で折る大兜  
たまに会う子もおじさんになっていた  
密柑の木に子の成長をだぶらせる  
今の子はおんぶを知らぬカンガルー  
もう一度子に戻れたら警官だ  
ツバメの子大口開けて餌を待つ  
産んだのはこの私ですこやかに  
子のメールたった一言元気だよ  
兜の緒締めてなかつたピンラディン

サークル檸檬大阪

松尾美智代報

天災はしばし忘れて野点など  
私の頑固へ妻の大津波

泰 輔  
美 千  
貞 子  
萩 江  
節 子  
けいこ  
宏  
文 恵  
美 菜 子  
祐 子  
石 花 菜  
鬼 一  
康 子  
日出子  
重 忠  
美 代 子  
智 恵 子  
酔 美 蓉  
龍 枝  
喜 美 子  
悠 子  
恭 子  
英 子  
和 子  
瑞 子  
照 彦

房 子  
光 久

野の花が余りにきれいだつたから  
夢も大志も野心も横に日向ぼこ  
昭和史に忘れてならぬ焼け野原  
辛い事ひととき忘れ野に遊ぶ  
文部省唱歌の中にある野原  
登りたい木が故里の野にあつた  
野や山へ鳥の言葉聞きに行く  
野の花の図太さ美しさに礼  
春や春若さ求めて野に遊ぶ  
野の道を蝶と道すれ山頭火  
背伸びした日から荒野を出られない

川柳ねやがわ大阪

籠 島 恵子報

女将の扇子度胸たたんだ錦帯  
家の中ないものはないデフレーション  
日が沈むまでまだ充分な時がある  
家計簿がちっちゃくなくて行くデフレ  
吊り橋も三度渡れば石の橋  
嬉しいねお茶に花びら入つてる  
母さんの度胸にこころ笑つてる  
引き裂かれた町へこころ繋がる  
度胸ある人を信じた綱渡り  
根回しが過ぎると軽石が沈む  
目覚ましが鳴つてその日がダッシュする  
思い切り笑う涙を溜めておく  
健気にも瓦礫の中で櫻咲く  
生まれつきスローテンポで無位無冠  
喫水線重荷に耐える父の船  
お茶だけで帰るきれいな初デート  
リストラの親子で沈む酒となり

昌 紀  
久 仁 雄  
たもつ  
美智代  
扶美代  
蕉 子  
希久子  
義 子  
みつ子  
い わ ゑ  
楓 菜

栄 二  
一 風

鶴を折る小さな紙にある絆  
昨晚のしこりのようなお茶が出る  
根無し草掴んでやつと浮く私  
年金がにっこり笑う五割引き  
青年の度胸を待っている政治  
花びらのダンスしばらく足を止め  
誠実な態度であればいい度胸

川柳塔さかい大阪

村上 玄也報

肩を抱く勇気なかつた傘の中  
大人しく愚痴を聞くのも楽しいやない  
内気だがあれで結構我を通す  
内気な子此の頃とんと見受けな  
昇格の辞令貰つて熱を出し  
いざ金のことには内気やかましい  
何げない言葉に刺がある内気  
妹に指図をされている内気  
かたよらず何でも食べてバイキング  
バイキング戦争中をふと思つ  
血糖を忘れてケーキバイキング  
ウエストはゴムのパンツでバイキング  
バイキングみな平らげたことがない  
バイキング元の取れない歳となり  
腹も身も内と悟つたバイキング  
バイキング目玉の皿はいつも空  
折箱を持って行きたいバイキング  
もう一つ胃袋欲しいバイキング  
別嬪に写るアングルしか撮らぬ  
黒ドレス真紅のバラがよく映える  
わたくしの車庫で見映えのせぬペンツ

麗  
仁 清  
美智子  
楽 鬼  
茜  
かすみ  
恵 子  
唯 好  
世 紀 子  
の ん 子  
時 雄  
月 子  
朋 月  
千 代  
綾 乃  
日 出  
愿  
俣 子  
天 笑  
敏 治  
竜 之 介  
雅 明  
としお  
さくら  
舞 夢  
扶美代

バイキング敵は野球部ラグビー部  
 値の高いものから攻めるバイキング  
 焼きたてのステーキ探すバイキング  
 バイキング美味しかったを通り越し  
 ブランドをまとった人とバイキング  
 寝たきりの祖母も手鏡放さない  
 文章のどこを切っても嘘ばかり  
 ぶつ切りをどっさり入れて潮汁  
 バイキング痩せの大食いうらやまし  
 内気で言うて会長引き受ける  
 見映えだけなら社長にも負けぬ腹  
 年寄りも損やとほやくバイキング  
 千円貸したが返せといえず忘れられ  
 無愛想にどちらさまかとうちの母  
 曲がつるだけできゅうりは聞かれる

京都塔の会

都倉 求芽報

清 みたこ  
 澄 空  
 篤 子  
 深 雪  
 清 晋  
 雅 山  
 像 山  
 半 銭  
 玄 也  
 公 誠  
 健 吾  
 隆 男  
 誠 一  
 比 志  
 俊 宣  
 美 義  
 昌 乃  
 公 子  
 則 彦  
 求 芽  
 ますお  
 欣 之  
 ふりこ  
 宏 子  
 文 代  
 葉 子

ひとひらを脱ぎ捨て眺む聖五月  
 迷子を見つけてママが泣きじゃくる  
 大好きを嫌いきらいと言うて恋  
 退屈に孫が遊んでくれている  
 定年の日から実権あべこべに  
 神さまがそりやあべこべや言うてます  
 あべこべにシヤツ着てはが黙つとく  
 逆さまで分らなかつたピカソの絵  
 逆縁の命呑みこみ憎い海  
 再会へ隠したくなる太い指  
 うれしくてねつね左の薬指  
 白魚の指どうやら家事は苦手らし  
 マジシャンの指の動きへ目を据える  
 指間から老いの兆しが毀れだし  
 練達の指で生まれる京和菓子  
 指の先向きを変えれば灯がともる  
 うかつにもこの指止まれサギだった  
 新刊をひもとく指が弾みだす

岩美川柳会鳥取

石谷美恵子報

知 栄  
 肇  
 朝 子  
 泰 夫  
 英 旺  
 義 昭  
 益 子  
 満 昭  
 由 美子  
 福 子  
 綾 子  
 庸 佑  
 万 紗子  
 かずお  
 弘 之  
 輝 美  
 啓 子  
 稔  
 幸 安  
 圭 一郎  
 完 司  
 菖 子  
 はるお  
 幸 枝  
 雅 女  
 忠 良  
 一 瑤

裏話入れてドラマは盛り上がる  
 裏街道生きて他人の情に泣く  
 それが抜か死んだら過去のひとになる  
 過去帳にトラ・クマ・シカが祀られる  
 震災で過去の戦禍を思い出す  
 二十代腰のくびれはまだあつた  
 お茶を飲み昔を語り今語り  
 丸い背に苦勞をかけた過去がある  
 間接に見たり聞いたり過去を知る  
 過去などは忘れて前を見て歩く  
 自慢する過去の有人人ねたましい  
 花だった過去の若さをそう思う  
 丁寧に埋めても過去は胸に棲む

川柳大阪

長井 善純報

孝 男  
 た ぬ  
 蟹 郎  
 節 子  
 茶 子  
 公 子  
 重 忠  
 清 帆  
 一 京  
 昭 弘  
 和 子  
 美 恵子  
 勝 弘  
 義 明  
 芳 香  
 ゆめこ  
 とし坊  
 照 月  
 一 風  
 ダン吉  
 花 笑  
 万 紗子  
 五 月  
 美 籠  
 喜 楽

欲張りに乗った詐欺師の口車  
肝心なときに無口になる夫  
三億円当ればやっぱり寝込むだら  
原発の安全神話無くなった  
やっぱりなあいつが右で俺左  
やっぱりと言ってるうちは普通人  
原発をやっぱり無くそ立ち上がる  
天罰と言つて取り消す選挙前  
農地汚染やっぱり悔しい情けない  
やっぱりと後で言うから腹が立つ  
絶望でもやっぱり信じたい奇跡

六甲川柳会兵庫 伊勢田 毅報

独り居の時計の刻む音ばかり  
安いなんであなたが着れば嘘になる  
螳螂が無理をするなど首を振る  
お互いに首に縄付け五十年  
首つたけだった昔が不思議です  
不況風派遣の首に強く吹き  
おでん屋に首をつつこむ古つづみ  
首つ丈夫鍋提げつもついて行く  
車いす妻のうなじを撫ぜる風  
新そばを刻む香りか秋の風  
飛はんからチョコチョコ刻むパーファイブ  
震災が日本に刻む危機管理  
辛酸を生きた証だ顔の皺  
亡夫の助言胸に刻んで生きている  
胸に刻む三・一一は忘れまい  
子育てに刻み込まれた母の色  
S席の一行後がお得です

鉄心 笑風 川童 紀雄 照月 柳弘 彦太 かよこ 朝子 まつお 善純  
能子 美穂 洋一 政一 和恵 浩司 基輔 寿朗 忠弘 茂 千賀子 保雄 利子 武臣 孝子 義博

安い筈賞味期限が今日切れる  
真心は高い安いで計れない  
原発に命を安く見積られ

どうみてもお安くないがバブの隅  
激安のチラシを持ってハシゴする  
安かった服はいまだに着ていない  
振り向けば同じ歩みのない旅路  
孫の背は筍に似てよく伸びる  
行くあてもないが浮き立つ雨上がり  
影法師お日さま笑顔で隠れんぼ  
放たれた牛ふくし様の草をはむ  
心から笑える夫という至福  
どん底で出会った人の手が温い  
優しさに包まれた時湧く気力  
する事があるから今日もちゃんと生き  
憎しみが揺ぐぐでつかい海に逢う  
初動ミス糊塗する策でミス重ね  
子沢山ママのパートは教育費

大山滝句座鳥取

新家 完司報

のたうてど何も変わらぬ貧富の差  
伸び過ぎた芽はマスコミに叩かれる  
お礼肥草が横取りして太る  
任せてと言いたいときに金が無い  
酒と女そんなら顔を出しますよ  
知る権利知りたくもない事ばかり  
玄関みると親の躰がようわかる  
久しぶりちよっと贅沢鯛のカマ  
幾久しく幸を折った友他界  
暁に喜望峰まで伸びた夢

勤 芳江 康弘 美恵子 夏子 和郎 登美子 繁義 盛夫 山弘 武彦 順子 無限 毅 光久  
山 芳山 忠良 美恵子 紀の治 大鯨 水歌 やえ 由紀子 泰輔 石花菜

久しぶり家族揃って肉を食う  
足首にカボチャの蔓が巻きついた  
貧乏はイヤ原発はもつとイヤ  
口笛を吹いてごらんとキスをする  
久々に五感の掃除しています  
百目指す生命線が伸びてくる  
汽車に乗る今日一日は自由の日  
つう弾む実家へ行くと長居する  
排気ガス吸って鼻毛がよく伸びる  
伸びすぎてわらびぜんまい草になる  
指輪外して今日は弾んで良いですか  
心へのサブリメントと本を読む  
入院の母が見舞の娘を案じ  
久しぶり歌口ずさみ照れ隠し  
天災を世界の人に目覚めさせ  
空気を足すとまだまだ弾む古い毬  
貧乏性メロンの皮を薄く剥く  
五ミリほど背丈が伸びている五月

わかあゆ川柳会鳥根 松本はるみ報

夕立が流してくれたため息を  
つい其処に叱ってくれる友がいる  
縁結び出雲の神に見守られ  
繕いがつづく五体の結びに  
名が通り仮面とうとう外せない  
びつたりと出雲をうたう安来節  
はばたいて飛んで行つたは夢の中  
上座には座りたくない向い風  
軍服の写真の染みが胸をうつ

螢 博子 寿代 柳歩 美智子 重忠 登貴枝 久子 典子 照彦 美つ千 圭一郎 悦子 希楽良 恒子 すみゑ 仁美 完司 恵美子 英子 伸子 ちよえ かつ子 はるみ 好栄 博利 清泉

# 柳界展望

いる

★第8回大野風柳賞は30名の応募があり、大賞は板垣孝志さん(奈良県)に決定。懺悔ではないが一日酒を絶つ ほか4句。

優秀賞に同人・木本朱夏さん(和歌山市)

探しものは何だったのか  
花筏 ほか2句。

☆小島蘭幸主幹は5月28日第12回井笠川柳会笠岡大会に出席。西出楓楽理事長は同大会に於て選者を務めた。

☆小島蘭幸主幹・西出楓楽理事長・川上大輪副主幹・新家完司副主幹・板尾岳人相談役は、6月12日全日本川柳仙台大会に出席した。

松尾和香さん(同人・和歌山市)は、10年連続出席参加者として6月11日大会前夜祭にて表彰された。

☆乗原道夫さん(理事・堺市)は「上方芸能」180号「私の趣味欄」に「私の劇場好き」を執筆。

▽御芳志御礼△

○故西尾菜氏遺族(西尾

妙子さん、古今堂蕉子さん)から十七回法要供養として金一封を拝受。

○高田美代子さん(参与・藤井寺市)より金一封拝受。

●初山隆盛さん(同人・大阪府)の夫人・正子さんは5月16日逝去、享年83歳。

●清水利武さん(同人・大阪市)は5月16日逝去、享年91歳。

▽柳界動向△

○川柳塔まつえ吟社役員交代  
名誉顧問 恒松 町紅  
相談役 三島 淞丘  
主 幹 石橋 芳山  
(事務局を兼務する)

副主幹 松本知恵子  
欠席投句先  
〒690-0005 6  
松江市雑賀町366

錦織 禮子宛  
▽出版 版△

○藤井則彦さん(同人・豊中市)は川柳句集「ボコ・ア・ボコ」を出版。B6判148頁。序文・西出楓楽。

○林さだきさん(同人・福

岡県)は川柳エッセイ集「道程」を出版。B6判268頁、新葉館出版、一二〇〇円十税。序文・西出楓楽、なお5月19日付、西日本新聞に写真入りで紹介された。

▽お詫びして訂正△

▼4月号P82上段13行目、青雲のころに蜜柑まだ遠くく青く。

▼6月号P表紙裏、残暑見舞廣告締切、七月二十日↓六月二十日。P3上段12行目、水原昌鼓↓水原昌鼓。

P61上段6行目、黒岩靖博さんの作品は川柳塔欄への

間違ひにつき、お詫びして訂正いたします。P81上段12行目、都夫↓都夫。P95下段23行目高田美代子↓高田。P103下段23行目、両殿下の物腰に救われている↓両陛下。P121上段左上から9行目「酸っぱい」田中新一↓田中一眸。P1203段5行目、中野幸子↓中前常任理事会は6月7日(火)出席者22名。①第17回川柳塔まつり関連②定例確認事項③各部報告事項④その他次回は7月7日(木) 13時30分

## 第14回 鳥取県川柳文芸大会

|      |                            |
|------|----------------------------|
| 日時   | 7月10日(日) 午前10時開場           |
| 場所   | 新日本海新聞社5階ホール               |
| 兼題   | 「八百里川上」                    |
|      | 「晴酌」                       |
|      | 「くらいら」                     |
|      | 「酸っぱい」                     |
|      | 「バラ」                       |
|      | 「困る」                       |
| 針    | 自由                         |
| 切費   | 午前11時30分(軽食、大会誌呈)          |
| 総会費  | 2000円                      |
| 欠席投句 | 締切7月5日(当日消印有効)             |
| 投句料  | 1000円                      |
| 投句先  | 〒680-0074 鳥取県卯垣1-110 夏目 一粹 |
| 主催   | 鳥取県川柳作家連盟                  |

## 第二十九回 夜市川柳大会

とき 平成23年7月30日(土)

10時30分開場

ところ 堺市総合福祉会館

5階 大研修室

宿題と選者

(各題2句・席題なし・欠席投句拝辞)

「料理」(堺) 河内 天笑 選

(尚「料理」は事前投句とします。

ハガキに2句)

「外れ」(堺) 小寺竜之介 選

「破る」(鳥取) 新家 完司 選

「じつくり」(枚方) 寺川 弘一 選

「息」(鳥取) 両川 無限 選

「立つ」(藤井寺) 太田扶美代 選

「晒す」(海南) 三宅 保州 選

「華す」(榎原) 居谷真理子 選

「回す」(羽曳野) 井上 一筒 選

「街」(和歌山) 古久保和子 選

出句締切 12時30分

事前投句締切 7月25日(月)

投句先 〒593-8305

堺市西区堀上緑町2-16-3

河内 天笑方 川柳塔さかい

会費 2000円(軽食・お茶・賞品多数)

懇親会 あり

## 第19回 和歌山県川柳大会

日時 9月25日(日) 11時開場

場所 和歌山商工会議所・4階大ホール

参加費 2000円(内訳:※事前投句料

1000円・当日参加費1000

0円・軽食・記念品・発表誌呈)

柳話 「私の川柳観」三宅 保州

事前投句 「雑詠」1句

和歌山県川柳協会 選

事前投句 「港」 玉置 泰作 選

兼題 「映画」 川上 智三 選

兼題 「ようやく」 廣田 定子 選

兼題 「救う」 松原 寿子 選

兼題 「ハイカラ」 井伊 東吉 選

兼題 「植える」 本田 智彦 選

出句締切 12時30分 各題2句

事前投句 8月18日(木) 必着

※投句料1000円なお、当日出席者は

会場にて1000円を納付のこと

※事前投句については欠席投句可。兼題

は当日出席者のみ可。

懇親宴 3500円

投句先・問合せ先 〒640-8111

和歌山市新通7-17 古久保和子 方

主催 和歌山県川柳協会

## 第四回 「こんぎつねの郷」

### 全国誌上川柳大会

課題 (木)(樹) 一口二句提出

選者 渡辺 松風・樋口由紀子

赤松ますみ・梅崎 流青

浅利猪一郎

他 計十一人による共選

締切 七月三十一日(消印有効)

投句料 一〇〇〇円

(切手不可・小為替等使用のこと)

投句先 〒475-0833

愛知県半田市花園町4-11-14

「こんぎつねの郷」

全国誌上川柳大会事務局

森本 恵子宛

問合せ 実行委員長 浅利猪一郎まで

TEL・FAX 0569-26-0721

| 句会名       | 日時と題   | 会場と投句先  |
|-----------|--|---|
| 岸和田柳会     | 16日(土) 午後1時30分締切<br>責任・倒す・ちよろちよろ<br>ノート        | 岸和田市立福祉総合センター<br>〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19<br>中岡香代                                  |
| 川柳ねやがわ    | 17日(日) 午後2時締切<br>駄菓子・ポイント・うっかり<br>自由吟          | 寝屋川市立総合センター 4F 第1研修室<br>寝屋川市駅からバス<br>〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉                      |
| 川柳藤井寺     | 17日(日) 午後2時締切<br>バランス・汗・席題は共選                  | 藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F<br>近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分<br>〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子     |
| 岬川柳会      | 17日(日) 午後2時締切<br>放つ・鋭い・根性                      | 淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分<br>〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592<br>八十田洞庵                         |
| 豊中川柳会     | 18日(月) 午後1時40分締切<br>鳴る・予定・つらい・自由吟              | 豊中市中央公民館 阪急曾根駅南東・徒歩5分<br>〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清                                |
| 川柳さんだ     | 19日(火) 午後1時から<br>予感・作る・電池・さすが<br>自由吟           | 三田市中央公民館<br>〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和   |
| 川柳クラブわたの花 | 22日(金) 午前9時30分から<br>馬・山・揃う・自由吟                 | 八尾市生涯学習センター<br>〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明  |
| 川柳塔すみよし   | 23日(土) 午後2時30分締切<br>鼻・効く・嬉しくて仕方がない<br>(読み込み不可) | 住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分<br>〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206<br>鶴田遠野                      |
| 和歌山幸三川柳会  | 23日(土) 午後0時30分から<br>飛ぶ・意外・ハーモニー                | 和歌山商工会議所4階 第2会議室<br>和歌山三幸川柳会事務局<br>〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子                       |
| はびきの市川柳会  | 24日(日) 午後2時締切<br>蟬・うんざり・シート・遅い                 | 綾南の森 公民館<br>近鉄高鷲駅北東・徒歩10分<br>〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏                           |
| 川柳ふうもん社   | 24日(日) 午後1時30分締切<br>分裂・ギャップ・真人間                | 鳥取駅 2F シャミネホール<br>〒680-0872 鳥取市宮長205-45 萩原美雪  |
| 南大阪川柳会    | 25日(月) 午後6時から<br>地デジ・煽てる・遠い・雑詠                 | 大阪市立住まい情報センター 5F 研修室<br>地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口<br>〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ |
| 京都塔の会     | 25日(月) 午後2時締切<br>咲く・あけすけ・説                     | 京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤番出口すぐ<br>〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル<br>弁財天町328-202 都倉求芽               |
| 松川露柳会     | 25日(月) 午後8時締切<br>乾く・毬・雑詠                       | 溝口五区集会所<br>〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3<br>小西雄々                                       |

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

## 7 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

| 句会名              | 日時と題                                      | 会場と投句先   |
|------------------|---|--|
| 城北<br>川柳会        | 2日(土)午後1時開場<br>放つ・カード・なるべく<br>自由吟         | 旭区老人福祉センター3F<br>地下鉄千林大宮③番出口<br>〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子                          |
| 富柳会              | 2日(土)午後1時開場<br>少し・切符・自由吟                  | 富田林市中央公民館<br>近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m<br>〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10<br>TEL 0721-25-0603 池 森子   |
| 倉吉<br>川柳会        | 2日(土)午後2時締切<br>たくさん・免・晴れ                  | 倉吉市 明倫公民館<br>〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17<br>谷口次男                                     |
| 川柳塔<br>なら        | 6日(水)午後1時開場<br>抜ける・袖・工面                   | 奈良市立中部公民館4F<br>近鉄奈良駅④番出口 徒歩5分<br>〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵                       |
| あかつき<br>川柳会      | 8日(金)午後2時締切<br>切る・妻・神秘                    | 大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2階)<br>地下鉄[谷町6丁目]駅③番出口から3分 道路向い側<br>〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花 |
| 川柳大阪             | 9日(土)午後2時締切<br>悔る・命・節約                    | 地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」<br>〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純                             |
| 川柳塔<br>さかい       | 9日(土)午後1時から<br>奇蹟・よほど(よっぽど)<br>「とまと(折り句)」 | 堺市総合福祉会館<br>〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑  |
| 川柳塔<br>まつえ       | 9日(土)午後2時締切<br>斜・仮面・防ぐ・サービス               | 松江市雑賀町 雑賀公民館<br>〒690-0056 松江市雑賀町1388 安達幸子  |
| 川柳塔<br>みちのく      | 9日(土)午後5時締切<br>憶測・直線・ふわふわ                 | 弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」<br>〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯                                 |
| 川柳塔<br>打吹        | 9日(土)午後2時締切<br>星・過ち・選ぶ                    | 倉吉市上灘町9 上灘公民館<br>〒682-0034 倉吉市大原637-1 牧野芳光   |
| 八尾市民<br>川柳会      | 10日(日)午後1時半締切<br>切符・唄・飲む・雑詠               | 八尾神社内 西郷会館3F<br>近鉄八尾駅西口徒歩5分<br>〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生                         |
| 川柳塔<br>わかやま<br>社 | 10日(日)午後1時40分締切<br>竹・素直・しみじみ・麺類           | 近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前<br>〒640-8482 和歌山市六十谷1188-14 川上大輪                                 |
| 西宮北口<br>川柳会      | 11日(月)午後1時45分締切<br>激しい・正体・ときどき<br>自由吟     | 西宮市立中央公民館<br>阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレラにしのみや<br>〒662-0062 西宮市木津山町3-15 亀岡哲子                      |
| 川柳<br>あまがさき      | 12日(火)午後2時締切<br>節約・撫ぜる・そわそわ<br>自由吟        | 尼崎女性センター トレビエ<br>阪急武庫之荘駅南へ200m<br>〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治                         |
| ほたる<br>川柳<br>同好会 | 12日(火)午後1時30分締切<br>無・読む・ときどき              | 豊中市立螢池公民館<br>阪急・モノレール 螢池駅駅前ビル5F<br>〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼                          |



# 暑中お見舞申し上げます

東日本大震災に遭われた皆様の一日も早い復興を念願しています

『川柳いのちの詩』の川柳同友会みらい（日川協加盟）

会長 鈴木公弘

事務総局 〒689-0342 鳥取市気高町殿410-2 稲村遊子方

鳥取市

（日川協加盟）

くろぼこ川柳会

鳥取市

川柳公家の会

米子市

がいな川柳会

倉吉市

川柳みやびの会

鳥取市

わかば台川柳会

鳥取市

かちべ川柳教室

米子市

なずな川柳会

## 会 員 ・ 誌 友 募 集 中

川柳塔同人

稲村 遊子

斉尾くにこ

鈴木 公弘

高浜 勇

田中 一眸

平尾 菜美

深澤千恵子

山松みち子

吉田 陽子

ほか

誌友一同

第12回春はくろぼこ川柳大会は2012年（平成24年）4月1日開催の予定です

暑中お見舞い申し上げます

平成23年 盛 夏

# 川 柳 塔 さ か い

会 長 河 内 天 笑

|       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |        |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|
| 山本 進  | 矢倉 五月 | 宮本かりん | 日野 愿  | 西村りつえ | 永田 山彦 | 遠山 唯教 | 島尾 政男 | 斉藤 隆男 | 源田八千代 | 奥 時雄  | 太田扶美代 | 榎本 舞夢  | 岩崎 公誠 |
| 米澤 俣子 | 矢野 梓  | 村上 玄也 | 伏見 雅明 | 原 清晋  | 中野 健吾 | 徳山みつこ | 島田 誠一 | 澤井 敏治 | 小寺竜之介 | 柿花 和夫 | 大谷 篤子 | 大久保のん子 | 内海 綾乃 |
| 和田つづや | 山本 半銭 | 元永 雅子 | 升成 好  | 樋口 冬虹 | 西内 朋月 | 中井 萌  | 高木世紀子 | 志田 千代 | 齋藤さくら | 河内 月子 | 荻野 像山 | 太田としお  | 榎本日の出 |

暑中御見舞申し上げます

## 大阪川柳人クラブ

会員一同

|         |         |         |         |         |
|---------|---------|---------|---------|---------|
| 会 長     | 会 計     | 幹 事 長   | 副 会 長   | 会 長     |
| 儀 野 いさむ | 中 川 隆 充 | 竹 森 雀 舍 | 板 野 美 子 | 儀 野 いさむ |
| 板 尾 岳 人 | 伊 達 郁 夫 |         |         |         |

暑中御見舞申し上げます

# 川柳塔すみよし

会長 鶴田 遠野

|        |       |       |
|--------|-------|-------|
| 石橋 直子  | 奥村 五月 | 西村りつえ |
| 石丸正太郎  | 河井 庸佑 | 福岡 末吉 |
| 板尾 岳人  | 川端 一步 | 藤島たかこ |
| 井丸 昌紀  | 北村 賢子 | 堀田 温子 |
| 岩崎 公誠  | 吉川 哲矢 | 坊農 柳弘 |
| 江島谷勝弘  | 古今堂蕉子 | 宮崎シマ子 |
| 榎本日の出  | 坂 裕之  | 宮本かりん |
| 榎本 舞夢  | 澤田 定子 | 森松まつお |
| 大内 朝子  | 阪井美世子 | 森松 芳香 |
| 大川 桃花  | 柴本 太郎 | 矢倉 五月 |
| 大久保のん子 | 柴本ばっは | 山根 妙子 |
| 大隅 克博  | 鶴田 遠野 | 山本 半銭 |
| 大谷 篤子  | 中井 萌  |       |
| 奥田チエコ  | 長浜 美籠 |       |

例会 毎月第4土曜日  
但し会場の都合で変更になる場合もあります

暑中お見舞申し上げます

# 豊中もくせい川柳会

会員一同

暑中お見舞申し上げます

平成二十三年 盛夏

香川県東かがわ市白鳥

# 川柳塔おっぱこ吟社

会長 成重 放任

會計 川崎 ひかり

顧問 木村 あきら

伊勢 八重子

角尾 いさむ

辻上 よしみ

堤 くに子

田中 弘

原 賢

山崎 はつ恵

暑中お見舞申し上げます

# いずも川柳会

会長 竹治 ちかし

会員 一同

事務局 〒693-0006

出雲市白枝町423 伊藤玲子方

TEL 0853-23-3200 FAX 0853-23-3201

暑中お見舞い申し上げます

# 川柳塔きやらぼく

会長 政岡 未延子

会員 一同

事務局 〒683-0845 米子市旗ヶ崎3-12-13

政岡 未延子

TEL 0859-34-1729

暑中お見舞い申し上げます

## 竹原川柳会

会長  
監査  
會計

|     |     |      |      |      |      |      |
|-----|-----|------|------|------|------|------|
| 小島幸 | 時広路 | 岩本笑子 | 古田太虚 | 森井菁居 | 石原淑子 | 山内房子 |
|-----|-----|------|------|------|------|------|

ほか会員一同

暑中お見舞い申し上げます

# 川柳ふうもん吟社

会長 両川洋々

会員 一同

事務局 〒680-0874 鳥取市宮長205-45

萩原美雪

TEL 0857-53-1185

月例会：毎月第4日曜日 13:00～

会場：砂場隆浩事務所（鳥取市片原1丁目107）

スランプと猛暑克服する良書！

初心者はもちろん、中級者やベテランにも役立つ

**総合川柳入門の決定版！**

## 川柳の理論と実践

- ・著者 新家完司
- ・装丁 B6判・326ページ・ソフトカバー
- ・定価 本体 1600円＋税
- ・送料 1冊300円、5冊以上無料

ご希望の方は下記出版社へご注文ください。

**新葉館出版** 〒537-0023 大阪市東成区玉津1丁目9-16 4F  
TEL 06-4259-3777 FAX 06-4259-3888

あかつき川柳会創立10年・鶴彬忌

# 記念川柳大会

―川端二歩句・文集「紙つぶて」発刊―

●と き 2011年9月11日(日)

●開 場 12時 ●出句締切 13時

(昼食は済ませてご入場下さい)

●会 場 大阪健康福祉短期大学・ホール

JR阪和線「堺市駅」3分(天王寺駅)より快速8分

■講 演 「今に生きる鶴彬」

評論家 中田 進先生

●特別投句 (2句)

「十」 あかつき川柳会 川端 一步 謝選

●兼題と選者(各題2句・特別投句以外の欠席投句は拝辞)

「挑む」 和歌山三幸川柳会 木本 朱夏 選

「包囲」 やまと番傘川柳社 植野美津江 選

「許す」 川柳天守閣 板野美子 選

「完走」 番傘川柳本社 田中 新一 選

「時代」 川柳塔社 小島 蘭幸 選

●参加費 20000円(大会誌・記念品)

●懇親会 30000円(定員40人)

(主催) あかつき川柳会・鶴彬顕彰事業基金

(後援) (社)全日本川柳協会

治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟大阪府本部

## 暑中お見舞い申し上げます 川柳あまがさき

|     |     |    |     |    |     |     |    |     |      |     |     |    |    |     |    |    |    |    |
|-----|-----|----|-----|----|-----|-----|----|-----|------|-----|-----|----|----|-----|----|----|----|----|
| 堀   | 坪井  | 加川 | 田原  | 軸丸 | 西部  | 藤田  | 古川 | 醉谷  | 村山   | 松村  | 木村  | 岩城 | 奥村 | 松下  | 林  | 山田 | 西内 | 長浜 |
| 正和  | 孝一  | 靖鬼 | 一兆  | 勝巳 | イサミ | 雪菜  | 奮水 | 亀与子 | あかり  | 里江  | 美代子 | 義芳 | 五月 | 比ろ志 | 昭三 | 耕治 | 朋月 | 美籠 |
| 上田  | 大久保 | 中井 | 田中  | 渡辺 | 大岸  | 上垣  | 谷  | 北野  | 扇野   | 片山  | 吉井  | 高野 | 小山 | 富田  | 都倉 | 南  | 小野 | 矢野 |
| ひとみ | 泰子  | 茂幸 | 由美子 | 柳明 | 和子  | キヨミ | 祐康 | 哲男  | よしひさ | かずお | 菜々子 | 政江 | 紀乃 | 美義  | 求芽 | 全彦 | 江美 | 野薫 |

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし  
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

## 医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科  
緩和ケア（ホスピス）  
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>

暑中お見舞い申し上げます

## 翠 洋 会

|    |     |    |     |    |     |    |     |     |    |     |    |    |     |      |    |
|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|-----|----|-----|----|----|-----|------|----|
| 高杉 | 佐々木 | 小谷 | 古今堂 | 小谷 | 奥田  | 太田 | 大久保 | 大川  | 榎本 | 榎本  | 岩本 | 井上 | 阿部  | 安土   | 浅井 |
| 千歩 | 満作  | 集一 | 蕉子  | 滋彦 | みつ子 | 昭  | 真澄  | 桃花  | 舞夢 | 日の出 | 浩二 | 照子 | 紀子  | 理恵   | 公平 |
|    | 渡辺  | 米田 | 吉田  | 横山 | 山本  | 前川 | 藤井  | 原田  | 西出 | 中村  | 天正 | 寺井 | 津村  | 辻内   | 谷口 |
|    | 富子  | 恭昌 | 知之  | 捷也 | 希久子 | 善之 | 正雄  | すみ子 | 楓楽 | 叡子  | 千梢 | 弘子 | 志華子 | げんえい | 義  |

暑中お見舞申し上げます

# 京都塔の会

会員一同

暑中御伺い

申し上げます

河内長野

## 長柳会

講師

板尾岳人

会員有志

水谷正子

村上直樹

山岡富美子

坂上淳司

黒岩靖博

暑中お見舞い申し上げます

川柳クラブ

## わたの花

生嶋ますみ 西川義明

吉村一風 寺川はじめ

山本宏至 田邊浩三

八倉知佐子 松浦愛子

乾美代子 小西博子

篠原いつふみ 上田和子

井尻民 土谷耀一

馬場宏 葭矢正春

杉本晴美 今川孝子

脇俊子 坂本奈良司

赤木妙子

暑中お見舞申し上げます

# 川柳塔みちのく

|      |       |       |        |       |       |        |
|------|-------|-------|--------|-------|-------|--------|
| 主幹   | 副主幹   | 相談役   | 顧問     | 理事    | 監事    | 会計     |
| 齊藤 苺 | 小寺 花峯 | 森中恵美子 | 波多野五楽庵 | 岩渕 黙人 | 高森 一吞 | 福士 慕情  |
|      |       |       |        | 高橋 岳水 | 肥後和香子 | ほか同人一同 |
|      |       |       |        | 福村 美鈴 | 小枝ふさゑ |        |
|      |       |       |        | 高橋 洋子 |       |        |

暑中御見舞い申し上げます

# エイシス堺

講師 河内天笑

|      |      |      |      |       |     |      |      |       |      |       |      |       |       |     |       |      |       |
|------|------|------|------|-------|-----|------|------|-------|------|-------|------|-------|-------|-----|-------|------|-------|
| 米澤俣子 | 矢倉五子 | 元永雅也 | 村上玄也 | 宮本かりん | 升成好 | 伏見雅明 | 樋口冬虹 | 西村りつえ | 中野健吾 | 高木世紀子 | 島田誠一 | 斉藤さくら | 源田八千代 | 奥時雄 | 太田としお | 榎本舞夢 | 榎本日の出 |
|------|------|------|------|-------|-----|------|------|-------|------|-------|------|-------|-------|-----|-------|------|-------|

暑中お見舞い申し上げます

# 米子住吉川柳会

会員一同

〒683-0804 米子市米原5-1-3-304

竹村紀の治

# 和歌山県川柳協会

和歌山県川柳大会を9月25日(日)に開催します。  
ご参加をお待ちします。(詳細は129頁記載)

会 長 三宅 保州

副 会 長 川上 大輪

【お問い合わせ先】 事務局 長 古久保和子

〒640-8111 和歌山市新通7丁目17

TEL 073-423-8930

暑中お見舞申し上げます

## 和歌山三幸川柳会

主 幹 三宅 保州

理 事 長 木本 朱夏

相 談 役 桜井 千秀

副 主 幹 古久保 和子

副 理 事 長 喜田 准一

理 事 田中 みね

川 玉 置 当 ね

川 上 智 代

楠 見 章 子

武 本 章 碧

事務局

〒640-8111  
和歌山市新通七-17

TEL 073-423-8930

古久保 和子 方

例会

毎月第四土曜日 午後一時

和歌山商工会議所

(和歌山市役所西隣)

暑中お見舞申し上げます

平成23年

## 川柳塔唐津

井上 勝視

岩崎 實

市丸 晴翠

坂本 蜂朗

仁部 四郎

樋口 輝夫

山口 高明

暑中御見舞

申し上げます

六甲川柳会

メダカ  
の学校

世話人

伊勢田

黒田能

山口光久

山口美穂

両川無限

暑中お見舞申し上げます

八尾市民川柳会

会員一同

暑中お見舞申し上げます

西宮ローズ川柳会

秋元てる

岩倉キク子

奥田みつ子

小倉藍

亀岡哲子

木村貴代子

西口いわゑ

春城年代

山崎君子

山本義子

暑中お見舞申し上げます

# 南大阪川柳会

会長 前 たもつ

会員 一同

住まいの情報センター（地下鉄谷町線・堺筋線 天神橋6丁目駅③出口）  
原則として第4月曜日・6時から

暑中お見舞申し上げます

# 川柳塔なら

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 加 | 森 | 飛 | 安 | 渡 | 居 | 吉 | 坊 | 米 | 中 | 大 |
|   | 門 | 中 | 永 | 土 | 辺 | 谷 | 川 | 農 | 田 | 原 | 内 |
| 会 | 萌 | 博 | ふ | 理 | 富 | 真 | 寿 | 柳 | 恭 | 比 | 朝 |
| 員 | 子 | 一 | り | 恵 | 子 | 理 | 美 | 弘 | 昌 | 呂 | 子 |
| 一 |   |   | こ |   |   | 子 |   |   |   | 志 |   |
| 同 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |

暑中お見舞申し上げます

# 富柳会

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 久 | 石 | 栃 | 中 | 中 | 河 | 前 | 林 | 小 | 関 | 山 | 古 | 中 | 中 | 池 |
|   | 他 | 世 | 橋 | 尾 | 島 | 村 | 野 | 田 | 野 | 野 | 野 | 田 | 崎 | 井 |   |
|   | 一 | 高 | 未 | 奏 |   | 彦 | 登 | 澄 | 紅 | よ | 寿 | 千 | 深 | ア | 森 |
| 同 | 鷺 | 知 | 子 | 華 | 恵 | 次 | 子 | 子 | 紫 | し | 之 | 華 | 雪 | キ | 子 |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   | 朗 | み |   |   |   |   |   |

暑中お見舞申し上げます

# サークル 檸 椽

|     |    |     |     |    |     |     |    |    |     |    |    |     |     |     |     |     |    |    |
|-----|----|-----|-----|----|-----|-----|----|----|-----|----|----|-----|-----|-----|-----|-----|----|----|
| 吉村  | 山本 | 山本  | 山本  | 山口 | 松尾  | 前村  | 西村 | 西村 | 西村  | 長浜 | 鶴田 | 古今堂 | 久保田 | 片岡  | 奥田  | 太田  | 井丸 | 浅野 |
| 久仁雄 | 義子 | 希久子 | 加お里 | 光久 | 美智代 | たもつ | 哲夫 | 楓楽 | いわゑ | 美籠 | 遠野 | 蕉子  | 千代  | 智恵子 | みつ子 | 扶美代 | 昌紀 | 房子 |

暑中お見舞申し上げます

# 城北川柳会

会長 伊達郁夫  
 会員 一同

# 大阪川柳の会

事務局 〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706 本田智彦 方  
 TEL 06 (6303) 7297

|    |    |    |     |    |    |    |    |    |    |    |     |     |    |
|----|----|----|-----|----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|----|
| 安井 | 森口 | 本田 | 藤井  | 内藤 | 伊達 | 竹森 | 黒川 | 大堀 | 碓氷 | 足立 | 世話人 | 磯野  | 代表 |
| 英華 | 美羽 | 智彦 | 満洲夫 | 光枝 | 郁夫 | 雀舎 | 孤遊 | 正明 | 祥昭 | 淑子 |     | いさむ |    |

暑中お見舞い申し上げます

# 岩 美 川 柳 会

会 員 一 同

〒681-0074 鳥取県岩美郡岩美町網代118-115

TEL 0857-72-0762

山 下 蟹 郎

皆様ご自愛くださいませ

# 川 柳 藤 井 寺

# 川 柳 み さ さ ぎ

代表 高田美代子 会 員 一 同

暑中お見舞い申し上げます

# 川 柳 さ ん だ

会 員 一 同

例会：毎月第3火曜日 13時 三田市中央公民館

暑中お見舞申し上げます

# 鳥取県川柳作家連盟

会 員 一 同

連絡先 〒680-0843 鳥取市南吉方3丁目364  
安田方 春 木 圭一郎  
TEL 0857-24-2834

暑中御見舞申し上げます

## わかあゆ川柳会

会 長 石 田 清 泉

福 間 博 利  
奥 谷 澄 子  
河 原 恵 美 子  
菅 田 かつ 子  
武 島 千 代 枝  
松 本 英 子  
渡 部 好 栄  
松 本 好 栄  
松 本 好 栄

暑中お見舞申し上げます

## 岸和田川柳会

岩 佐 丹 吉  
雪 本 珠 子  
増 田 隆 昭  
藤 原 昭 昭  
中 岡 香 代  
仲 谷 弘 子  
沖 川 泰 弘  
助 川 和 美  
次 井 義 泰  
林 井 つか さ  
井 伊 東 吉  
小 島 笑 司  
児 玉 俊 昭  
荒 木 は る え  
飯 田 忠 太  
稲 葉 幸 洋  
藤 幸 子  
佐 藤 益 子  
鈴 木 益 子  
土 橋 房 枝  
堤 橋 房 枝  
林 権 代  
不 破 仁 子  
松 岡 浅 子  
三 宅 保 子  
宮 野 み つ 江  
向 井 清  
森 井 清  
山 本 龍 子  
米 富 淳 風  
飯 田 忠 太

暑中お見舞い申し上げます

## はびきの市民川柳会

会員一同

暑中お見舞申し上げます

## 川柳らくだの会

会員一同

事務局 〒689-0202 鳥取市美萩野1-134 岸本宏章方  
TEL・FAX 0857-59-0435

暑中お見舞

申し上げます

川柳茶ばしら

|      |       |       |      |      |       |
|------|-------|-------|------|------|-------|
| 早川盛夫 | 金子美千代 | 関本かつ子 | 吉田幸子 | 脇田雅美 | 板山まみ子 |
|------|-------|-------|------|------|-------|

# 納涼 デカンショ祭

8月15・16日

丹波路へどうぞ

## 川柳 ささやま

代表 遠山可住

場 勉 句  
所 強 会  
豊中市蛍池公民館  
第四火曜日 午後一時より  
第二火曜日 午後一時より

|    |    |     |    |     |    |    |    |    |    |    |    |
|----|----|-----|----|-----|----|----|----|----|----|----|----|
| 西村 | 中島 | 池田  | 松尾 | 笠田  | 唐住 | 江見 | 栗田 | 藤原 | 宮田 | 小牧 | 水野 |
| 康子 | 公純 | 美智代 | 幹治 | 実清  | 見久 | 桂子 | 輝子 | 信男 | 黒兔 |    |    |
|    | 樋口 | 荒木  | 貝塚 | 神野  | 中山 | 多田 | 寺井 | 米原 | 田中 | 高嶋 | 藤澤 |
|    | 順子 | 郁子  | 正子 | 宇乃子 | 春代 | 契子 | 柳童 | 雪子 | 螢柳 | 長勝 | 一  |

ほたる川柳同好会

暑中お見舞い申し上げます

暑中お見舞い申し上げます

## 川柳塔わかやま吟社

同人一同

事務局 〒640-8482 和歌山市六十谷1188-14  
川上大輪方  
電話・FAX 073-462-7229

暑中お見舞い申し上げます

# 川柳塔まつえ吟社

主幹 石橋 芳山

同人一同

連絡先 〒690-0001 松江市東朝日町206-7

石橋 芳山

TEL.090-2003-5846

暑中お見舞

申し上げます

## 熊本川柳会

高野 宵草

永田 俊子

岩切 康子

暑中御見舞

# 川柳ねやがわ

会員一同

会長 山本 三郎

事務局 高田 博泉

暑中お見舞申し上げます

# 川 柳 塔 社

名譽主幹  
主 幹  
理 事 長  
副 主 幹  
副 理 事 長  
常 任 理 事

河 内 天 笑  
小 島 蘭 幸  
西 出 楓 楽  
川 上 大 輪  
村 上 玄 也  
居 谷 真 理 子  
柿 花 和 夫  
久 保 田 千 代  
黒 田 能 子  
佐 々 木 満 作  
長 浜 美 籠  
松 原 寿 子  
村 上 直 樹

新 家 完 司  
河 内 月 子  
鴨 谷 瑠 美 子  
木 本 朱 夏  
古 今 堂 蕉 子  
鶴 田 遠 野  
坊 農 柳 弘  
水 野 黒 兔  
山 岡 富 美 子  
山 口 光 久

川柳塔社常任理事会

# 編集後記

★七夕の赤い色紙へ釋路郎

薫風

★東日本大震災の被災地・仙台で、全日本川柳大会が予定通り6月12日開催された。開催までには紆余曲折があったと聞くが川柳界からの「がんばれ東北」のメッセージが、すこしでも被災地を勇気付けたらどうか。

★震災以後、印刷所や製紙工場の被災により、出版状況が厳しいと聞いていたが仙台、岩手の川柳誌が予定通り発行され送られてきた。生々しい被害の実態を伝えるながらも、遅滞なく柳誌を読者に届けられたのは、被災地の川柳人の祈りの深さであろう。

★山口麦彦さんが『アート川柳への誘い』を出版。(飯塚書店・一五七五円税込)。素晴らしい絵で表紙を飾って頂いている前田尋先生の9月号11月号表紙

紙も収載されている。麦彦さんによれば、何よりも前田先生のきり絵がお気に入りだそうである。川柳とアートの競演に本誌が一役買えたことがうれしい。

★同人・誌友参加特集「路郎この一句」には20名の思いが寄せられた。もちろんほとんどの方には路郎は雲の上の人であり「麻生路郎読本」を通じての師である。また昭和44年7月号が「路郎この一句」を特集している

ことを、栗原道夫さんに教えられ葭乃夫人、薫風先生の一文をも再録した。なお文中、「俺に似よ俺に似るなと子を思ひ」「おれに似よ俺に似るなと子をおもひ」と表記が異なっていますが、生前の薫風先生にお聞きしたことがあります。路郎はその時の気分で書き分けられたそうです。

★「路郎この一句」のために『麻生路郎読本』をあらためて開いた方も多かったと思う。路郎は気難しいというイメージがあるが、あ

## ひとこと

### 大切な一冊

玄関を出るとき男空を見る  
玄関を出るとき女振り返る

「路の臺」小出智子先生の句集より。ほとんどが一頁三句になっているなか、なぜこの二句だけが一頁に収められているのか、考えました。キョロキョロしないで自分の身の回りを大切に詠んで行きなさい。女にしか気付かないもの

を見て「あらなさいと、声が聞こえた気がしました。」

「路の臺」は静かに読む句集、女性の想いの溢れた句集、そして私を諷めてくれる句集です。十分に意味を理解せずに、カタカナ語に惹かれたり、日常の会話にない難解な言葉を使いたくなったり、自分らしくを、教えてくれる大切な一冊。プレゼントして下さった友に感謝です。(古久保和子)

ちこち拾い読みをしていると、子煩悩な路郎、愛妻家の路郎、ユーモリストの路郎、淋しがりの路郎、孤独な路郎、そして、何より人間・路郎の素顔がみえる。「麻生路郎読本」をぜひ座右に置き、路郎と対話して頂きたい。(朱)

◇車のひき逃げ死亡事故の時効は20年との声がありました。通常のひき逃げ死亡事故(道路交通法違反)は従来どおり7年です。自動車運転による死亡事故の場合でも悪質なものは

刑法で危険運転致死傷罪(時効は20年)、自動車運転過失致死傷罪(時効は10年)を設けています。◇ある同人から編集後記に「裁判員云々と川柳に關係がない事を書いて」との声がありました。果たしてそうでしょうか?

裁判員制度が導入された当時から、裁判員に関する川柳を数多く見かけます。また、ある川柳会の定例会において、兼題「裁判員」が出されています。

◇5月号の編集後記で殺人罪の時効は25年と書きましたが平成22年の刑法改正で廃止されました。お詫びして訂正します。

◇川柳塔本社平成20年3月

(光)

# 川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(9月号)

地名

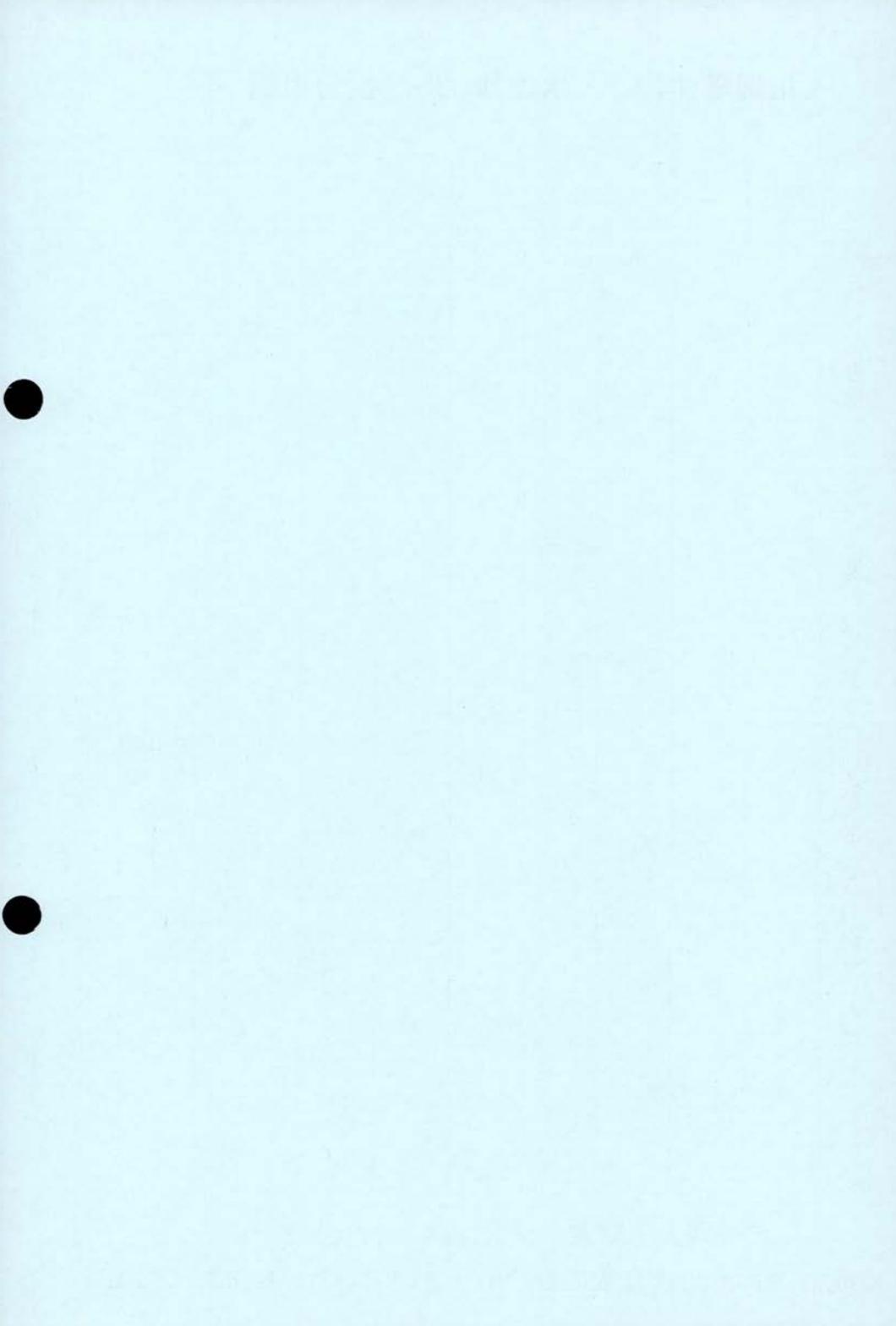
都府道市  
都道府市  
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201



# 檸檬抄投句用紙

「変化」(7月15日締切)

9月号発表

池 森子 選 — 共選 — 福士 慕情 選

B A

|  |  |
|--|--|
|  |  |
|--|--|

地名

市都  
県道府

姓雅号

B A

|  |  |
|--|--|
|  |  |
|--|--|

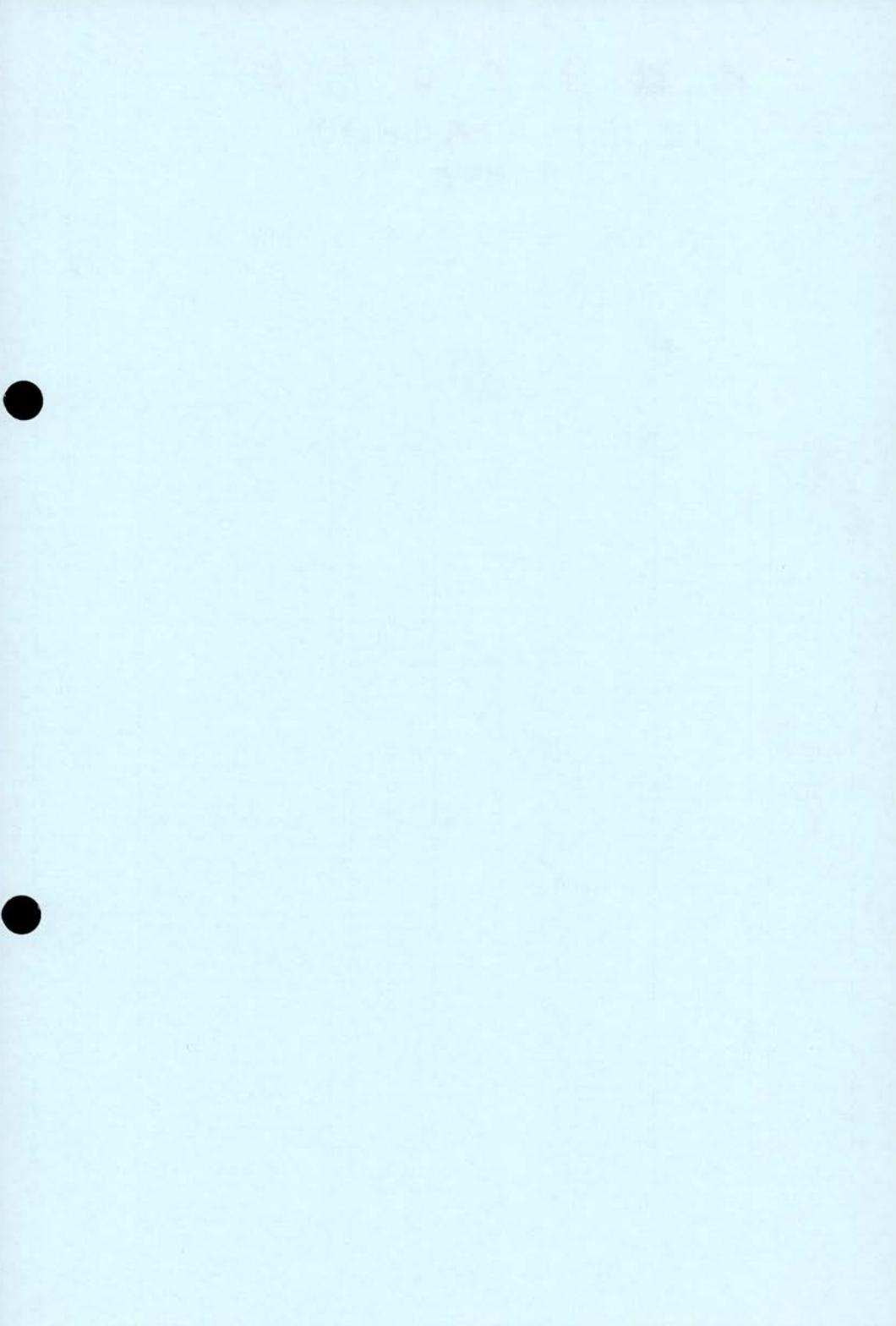
地名

市都  
県道府

姓雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



## 作品募集

川柳塔 (8句) 小島蘭幸選  
 水煙抄 (8句) 川上大輪選  
 愛染帖 (3句) 新家完司選  
 檸檬抄「変化」 (2句) 福士慕情共選  
 池森子選  
 一路集 (3句) 「兼ねる」「誤算」「さらり」 森山盛桜選  
 福永ひかり選  
 鈴木公弘担当

9月号発表 (7月15日締切)

檸檬抄「錯覚」  
 一路集「叫ぶ」「はしご」「かなり」  
 初歩教室「港」

10月号

## 路郎忌 本社 7月句会

とき 7月7日(休) 午後5時開場・6時20分締切り  
 ー開場時間、締切時間を変更しています。ー注意下さい。  
 ところ アウィーナ大阪 4階 金剛の間  
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441  
 おはなし「法隆寺と詩人達」 中原比呂志  
 席題「」 坊農柳弘選  
 兼題「半額」 当日出席者選  
 「拗ねる」 川端一步選  
 「ビタミン」 古今堂蕉子選  
 「裏」 住田英比古選  
 「炎天」 小島蘭幸選  
 会費 1000円 投句料 500円(切手可)  
 (各題2句以内)

## 本社 8月句会

5日(金) 午後5時から

兼題「手柄」「のこのこ」「扇風機」「誇る」「倍増」

## 第30年度 夜市川柳募集

第2回「濡れる」稲村遊子選  
 ハガキに3句 7月末日締切  
 投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3  
 河内天笑方 川柳塔さかい

## 「川柳塔」への投句について

- (1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
  - (2)愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
  - (3)各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
  - (4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜 祝日を除く 平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

定価 八百円(送料92円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇一一年(平成二十三年)七月一日発行

発行人 小島和幸

編集人 木本朱夏

印刷所 美研アート

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一七

花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話 〇六・六七七九一三四九〇番

振替 〇〇九八〇一四一二九八四七九番

# 杵つき製法の「すりごま」 オニザキの

# すりごま

長い間親しまれてきた  
オニザキの「すりごま」は、  
名称を変更し、パッケージ  
ジを一新いたしました。

オニザキのすりごまは、  
元々すり鉢ですったゴマ  
ではなく、杵と臼を使った  
杵つき製法で出来た「すり  
ごま」です。  
今までと変わらぬ、風味  
豊かな味わいをご堪能く  
ださい。



株式会社 オニザキコーポレーションス  
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

## 「川柳雑誌」「川柳塔」通巻一〇〇〇号記念出版 『麻生路郎読本』



麻生路郎  
読本

川柳雑誌「川柳塔」  
編集 川柳塔社

A5版

514頁

頒価 三〇〇〇円

(郵送料共)

### 目次

- 麻生路郎アルバム
- 麻生路郎作品「旅人」 「旅人その後の作品」
- 麻生路郎文集・麻生路郎語録
- 麻生路郎物語（東野大八）
- 麻生路郎の人と作品
- 麻生路郎作品「福寿草」
- 麻生路郎著作解題・麻生路郎年譜
- 麻生路郎・葎乃作品索引

ご希望の方は左記の事務所までお申し込みください。

〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号

花野ビル201号

電話 06-6779-3490

川柳塔社

振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番